前　田F1

—昭和55年度県営圃場整備事業
に伴なう発掘調査報告(1)—

1982

群馬県勢多郡粕川村教育委員会

はじめに

粕川村は、昭和54年度より県営土地改良事業に伴なう埋蔵文化財の発掘調査を行なっております。この発掘調査では、全く予想だにしなかったところから非常に貴重な先人の遺産が数多く発見されております。

今年度、昭和55年度は、古墳時代後期初頭の住居址群をはじめとして、県内でも珍しい弥生時代後期の「村」の発見など、粕川村の古代を考える上で大変重要な資料を私達に与えてくれました。このような遺跡、あるいは遺物の発見は、粕川村にもこんなに素晴らしいものがあるのかという郷土の再発見にもつながるものでありましょう。

ここに昭和55年度の発掘調査の成果の一端を報告し、この冊子が粕川村の埋蔵文化財の保護と理解との一助になることを願います。

この調査の際に御協力いただいた関係各位に対し謝意を表し、序文といたします。

粕川村教育委員会

教育長　金井久雄

例　　言

1．本書は昭和55年度県営粕川地区土地改良事業に係る発掘調査中、田面(タナボ)遺跡群前田(マエダ)遺跡の発掘調査報告書である。なを、前田遺跡の略称はＦ１である。

2．前田(マエダ)遺跡は、群馬県勢多郡粕川村大字西田面(ニシタナボ)字前田78番地他に所在する。

3．この発掘調査は土地改良事業によって、遺跡が直接破壊を受ける部分について粕川村教育委員会が県農政部の委託を受けるとともに、昭和55年度文化財保護国庫補助金、県費補助金を受けて実施したものである。

4．発掘調査は、昭和55年４月19日より８月11日まで行った。

5．発掘調査は粕川村教育委員会社会教育係文化財担当の小島純一が担当した。本書の発掘写真、本文及び編集も小島が行った。

6．遺物の実測は、鈴木幸子、吉沢てい子、松村まり子、田ノ倉武男が担当し、製図は、笠原嘉子、田島洋子、小島が行った。又、遺物写真については武田　勉による。

7．本遺跡の資料は粕川村教育委員会の管理下に保管されている。

8．遺物整理及び報告書作成協力者

小沢　富江、笠原　嘉子、杉山　秀宏、鈴木　幸子、武田　勉、田島　洋子、田野倉　武男、中嶋　あぐり、長瀬　トモ、長瀬　久子、中野　ひろ子、長井　文明、茂木　邦子、吉沢てい子松村　まり子、小池　雅典。

9．発掘及び遺物整理において次の諸氏から御指導、御助言をいただいた。心より感謝いたします。

新井　房夫、飯田　陽一、井上　唯雄、内田　憲治、柏崎　敦子、坂爪　久純、桜場　一寿、能登　健、前原　豊、松村　佐喜次、粕川村土地改良区、粕川村第７工区土地改良役員一同。

凡　　例

1．各遺構の縮尺は1/60を基本としている。ただし、カマドの平面図は1/30である。

2．各遺物の実測図及び写真の縮尺は1/3である。

3．遺構平面図におけるスクリントーンはカマド及び炉址を示したものである。

4．土層断面図におけるスクリーントーンは榛名二ツ岳火山灰－ＦＡ－及び浅間Ｂ軽石を示したものである。

5．水糸レベルは原則として各遺構毎に統一した。

本 文 目 次

序　　文……粕川村教育委員会教育長　金　井　久　雄

例　　言

凡　　例

本文目次

付表目次

挿図目次

図版目次

Ⅰ　発掘調査の経緯……1

Ⅱ　遺跡の位置と周辺の遺跡……4

Ⅲ　発見された遺構と遺物……9

1)　第1号住居址……9

2)　第2号住居址……19

3)　第3号住居址……31

4)　第4号住居址……35

5)　第5号住居址……47

6)　第6号住居址……53

7)　第7号住居址……55

8)　第8号住居址……62

9)　第9号住居址……71

10)　その他の遺構と遺物……73

Ⅵ　前田遺跡調査の意義と問題点……76

1)　遺構について……76

2)　出土遺物について……77

ア　土師器……77

イ　土製品……78

3)　ま　と　め……

付　表　目　次

第１表　発掘経過表……2
第２表　第１号住居址計測表……9
第３表　第２号住居址計測表……19
第４表　第３号住居址計測表……31
第５表　第４号住居址計測表……35
第６表　第５号住居址計測表……49
第７表　第６号住居址計測表……54
第８表　第７号住居址計測表……56
第９表　第８号住居址計測表……62
第10表　第９号住居址計測表……71

挿　図　目　次

第１図　土地改良事業と発掘調査……1
第２図　昭和55年度調査遺跡の位置……4
第３図　前田遺跡とその周辺のおもな遺跡……5
第４図　前田遺跡遺構配置図……6・7
第５図　第１号住居址実測図……11・12
第６図　第１号住居址の遺物分布……13・14
第７図　第１号住居址出土の土師器(1)……15
第８図　第１号住居址出土の土師器(2)……16
第９図　第１号住居址出土の土師器(3)……17
第10図　第１号住居址出土の土師器(4)……18
第11図　第１号住居址出土の砥石……18
第12図　第２号住居址カマド実測図……20
第13図　第２号住居址実測図……21・22
第14図　第２号住居址の遺物分布……25・26
第15図　第２号住居址出土の土師器(1)……27
第16図　第２号住居址出土の土師器(2)……28
第17図　第２号住居址出土の土師器(3)……29
第18図　第２号住居址出土の遺物……30

第19図　第３号住居址の物分布……32
第20図　第３号住居址出土の砥石……32
第21図　第３号住居址出土の土師器……32
第22図　第３号住居址実測図……33・34
第23図　第４号住居址カマド実測図……38
第24図　第４号住居址実測図……39・40
第25図　第４号住居址の遺物分布……41・42
第26図　第４号住居址出土の勾玉……43
第27図　第４号住居址出土の土師器(1)……44
第28図　第４号住居址出土の土師器(2)……45
第29図　第４号住居址出土の土師器(3)……46
第30図　第５号住居址実測図……48
第31図　第５号住居址カマド実測図……49
第32図　第５号住居址の遺物分布……50
第33図　第５号住居址出土の遺物……51
第34図　第５号住居址出土の筒形土製品……52
第35図　第５号住居址出土の石製品……52
第36図　第６号住居址実測図……53
第37図　第６号住居址の遺物分布……54
第38図　第６号住居址出土の土師器……54
第39図　第７号住居址実測図……55
第40図　第７号住居址の遺物分布……57・58
第41図　第７号住居址出土の土師器(1)……59
第42図　第７号住居址出土の土師器(2)……60
第43図　第８号住居址実測図……63
第44図　第８号住居址カマド実測図……64
第45図　第８号住居址出土の砥石……66
第46図　第８号住居址の遺物分布……67・68
第47図　第８号住居址出土の土師器(1)……69
第48図　第８号住居址出土の土師器(2)……70
第49図　第９号住居址実測図……71
第50図　第９号住居址出土の土師器……71

第51図　第９号住居址　遺物分布……72
第52図　１号溝と１号土拡実測図……73
第53図　２号土拡実測図……74
第54図　第２号土拡出土の縄文土器……74
第55図　前田遺跡表採の紡錘車……75
第56図　住居址の変遷……77
第57図　前田遺跡出土の遺構、土師器の分類……80・81

図　版　目　次

図版１　第１号住居址全景……9
図版２　第１号住居址の発掘……10
図版３　第２号住居址全景……19
図版４　第２号住居址の発掘　(1)……23
図版５　第２号住居址の発掘　(2)……24
図版６　第３号住居址全景……31
図版７　第４号住居址全景……35
図版８　第４号住居址の発掘……36
図版９　第４号住居址のカマド……37
図版10　第５号、６号、７号、８号、９号住居址全景……47
図版11　第５号住居址のカマド……49
図版12　第５号住居址の発掘……50
図版13　第７号住居址の発掘……56
図版14　第８号住居址全景……63
図版15　第８号住居址の発掘……65
図版16　１号溝と１号土拡……73
図版17　２号土拡の発掘……74
図版18　住居址出土の土師器　(1)……81
図版19　住居址出土の土師器　(2)……82
図版20　第１号住居址出土の土師器……83
図版21　第１号住居址出土の土師器……84
図版22　第２号住居址出土の土師器……85
図版23　第２号住居址出土の土師器……86

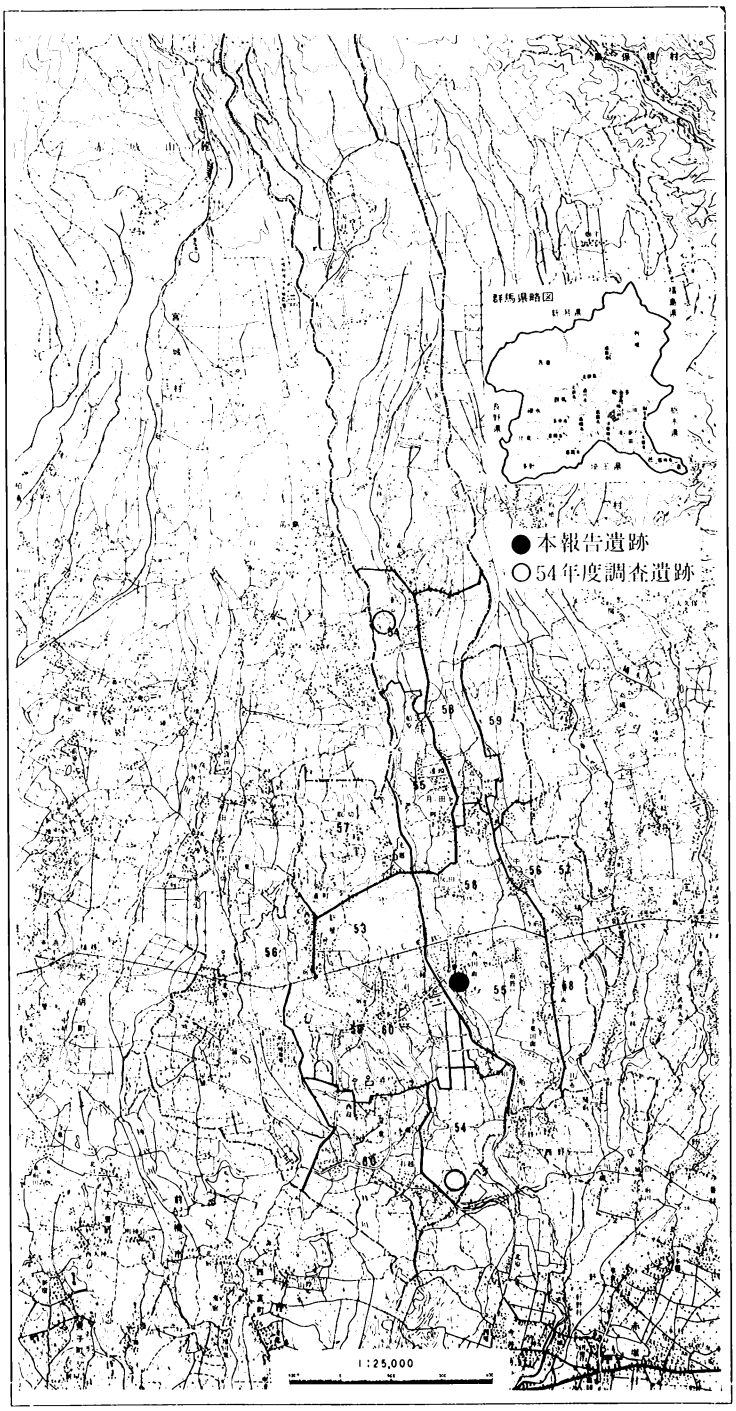
図版24　第3号住居址、第4号住居址出土の土師器……87
図版25　第4号住居址出土の土師器……88
図版26　第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址出土の土師器……89
図版27　第7号住居址出土の土師器……90
図版28　第8号住居址出土の土師器 ……91
図版29　第8号住居址、第9号住居址出土の土師器……92
図版30　第5号住居址出土の土製品……93
図版31　第5号住居址出土の土製品……94
図版32　前田遺跡出土の滑石製品及び土製品、砥石……95

I　発掘調査の経緯

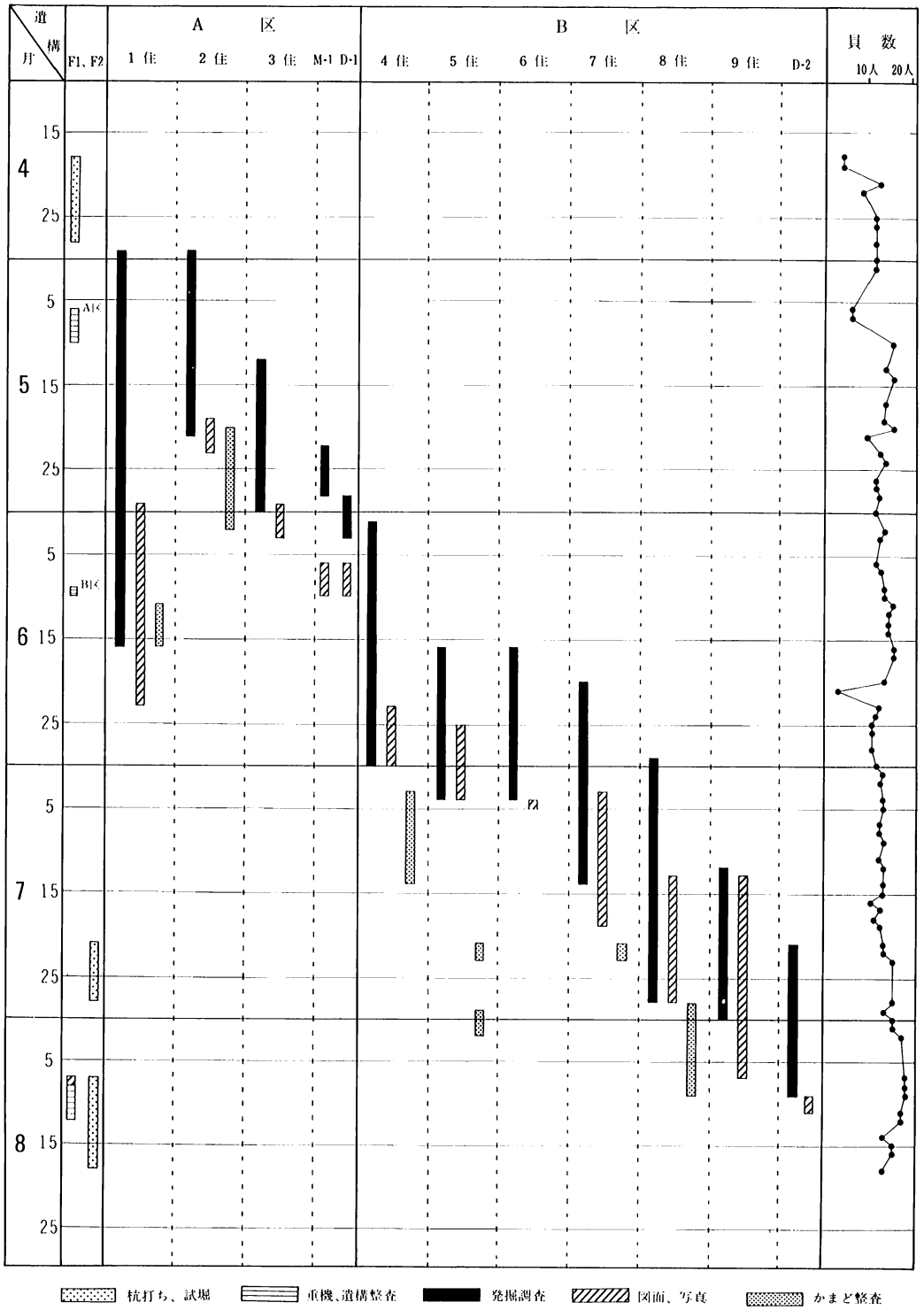
粕川村は昭和53年度より、ほぼ全村にわたる県営圃場整備事業が実施されている。それに伴なって工事によって破壊されていく埋蔵文化財の緊急発掘調査が実施されてきている。本報告の昭和55年度はその２年目にあたっている。

昭和54年度は発掘調査の開始時期がさまざまの理由により圃場整備の工事と同時着手という形をとった為、教育委員会は圃場整備工事の遅れを懸念する地元地権者と工事関係者との間に入り非常な苦悩を強いられることとなった。その為、昭和55年度はその轍を踏むことなく、年度当初からの圃場整備工事に先行する発掘調査を実施するという方針のもとに工事側との調整にあたったのである。

当初、教育委員会では田面地区（第７工区）内に６か所の包蔵地を確認していたが、試堀調査あるいは重機による掘削時の立ち合いなどの結果から最終的に４か所の包蔵地について調査を実施することとなった。しかし、この内の１か所、堤頭遺跡では、大巾な土量の移動が出てきたため当初の予定の倍近い面積の調査を余儀なくされた。又、昭和57年度工事着工予定地区であった月田地区（第２工区）内の月田古墳群についても、その対称面積の広大さ、埋蔵文化財の豊富



第１図　土地改良事業と発掘調査


遺構
月
F1、F2
A 区
1 住
2 住
3 住
M-1 D-1
B 区
4 住
5 住
6 住
7 住
8 住
9 住
D-2
貝 数
10人 20人
4
5
6
7
8
15
25
5
A区
B区
杭打ち、試掘
重機、遺構整査
発掘調査
図面、写真
かまど整査

第1表　　発 掘 経 過 表

さなどを考慮して1年先行の発掘調査という形で古墳3基について調査を行なうこととなった。

以上のような経緯で昭和55年4月22日付耕第126号で粕川村と群馬県との間で委託契約が結ばれ発掘調査が行なわれることとなった。発掘遺跡は5遺跡を数え、4月から前田遺跡、8月より一日市城址、10月より提頭、石切遺跡、2月より月田古墳群の発掘にそれぞれ着手することとした。発掘面積9900㎡、それに古墳3基、延参加人員は5153人を数えた。

発掘調査は年度当初、4月1日からの着手予定であったが、発掘対照地が一面桑園であることなどから補償問題等でかなり難行した。しかし、本報告の前田遺跡については逸速く地権者から理解が得られ、4月中旬より試掘に入ることができた。発掘対象は、この遺跡内を東西に横切ることとなる幅6m、長さ120mほどの道路敷を対象とした。

調査は試掘の段階で2か所の落ち込みが確認できたため、すぐに大形重機を導入し、全面表土剥ぎを行うこととなった。

この調査で確認できた遺構はいずれも掘り込みが深く、規模も大きく、又遺物の残りも非常に良好で、しかも出土量が豊富であったため、発掘調査はこれらの諸条件からかなりの労働量と時間を費やしてしまった。（第1表）

なお、発掘調査に関する事務局の組織は下記のとおりである。

金　井　久　雄　　教育委員会教育長

白　石　高　士　　教育委員会事務局長

坂　本　　実　　〃　　社会教育係長

武　井　修　一　　〃　　社会教育係主事

発掘調査の組織は下記のとおりである。

小　島　純　一　　教育委員会社会教育係、文化財担当主事

考古学専攻生

杉　山　秀　宏　　明治大学文学部学生　　長　井　文　明　　奈良大学文学部学生

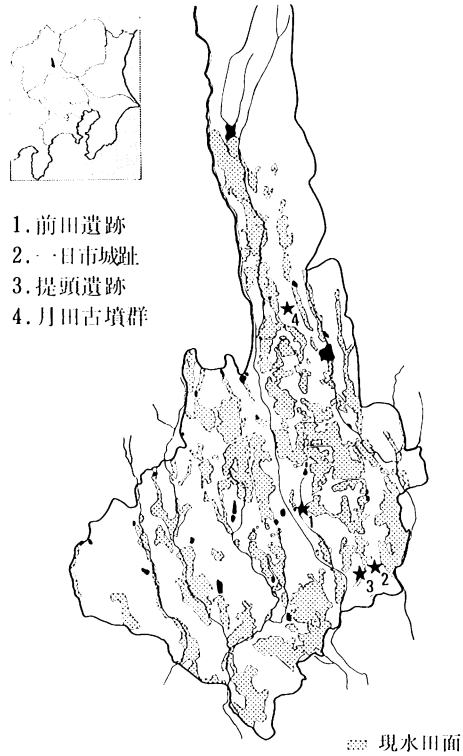
発掘参加者

新井　政雄、　小沢　富江、　笠原　磯寿、　笠原　嘉子、　金子金三郎、　高橋　昌志
立川誠三郎、　中嶋あぐり、　長瀬　信吉、　長瀬　トモ、　長瀬　當子、　中野ヒロ子
根岸　利久、　松村　捷代、　松村　徳治、　茂木　芳子、

II　遺跡の位置と周辺の遺跡

前田遺跡は、群馬県勢多郡粕川村大字西田面字前田78番地他に所在する。この遺跡は赤城山から南北にゆるやかに傾斜しながら延びてくる台地上の南端部に位置し、標高175m、現粕川からの比高差は約10mを計る地点にある。この台地は粕川の左岸にあたり、西は粕川に、南は粕川が東に大きく屈曲する部分まで比較的平端地が続いている。東には小さな谷が入りこみ、この谷頭には湧水が存在している。この湧水のまわりには現在でもわずかに水田が作られていた。(注1)

この前田遺跡をとりまく周辺の遺跡としては、前田遺跡の北方に小河川を狭んで隣接する役場遺跡が知られている。(注2)　この遺跡は現在、役場庁舎が新築されるなどでほぼ完全に消滅したものと考えられ、その内容については詳細に触れることはできないが、前田遺跡と同時期かやや時間的に下だる遺跡である。この遺跡地には地元の古老の話しによると、小円墳も数基存在していたらしく、現在でも粕川51号墳が残っている。又、東方には同じく小円墳である粕川69号墳も存在している。



第2図　昭和55年度調査遺跡の位置

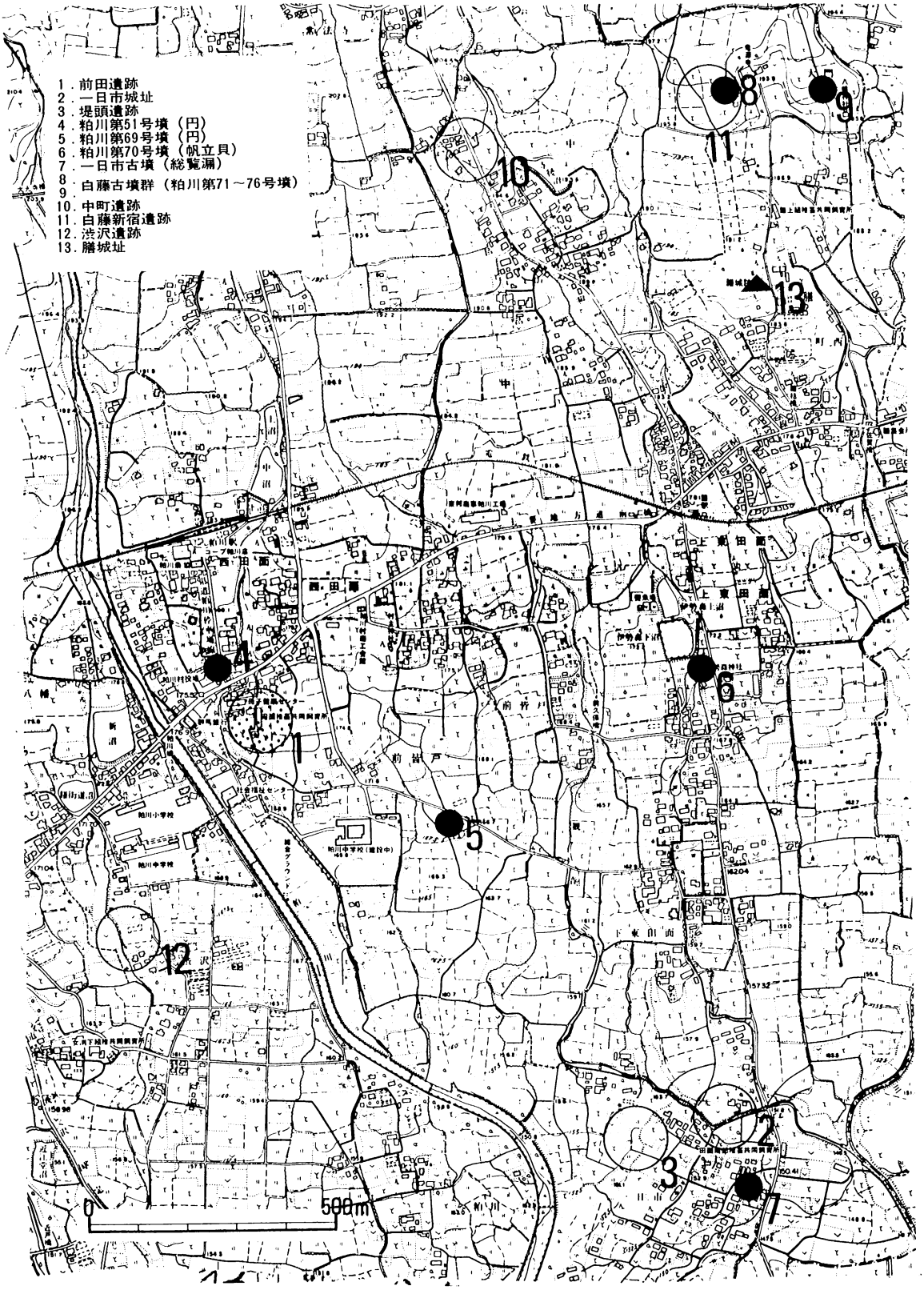
この役場遺跡の他に、前田遺跡とほぼ同時期と考えられる遺跡として、中町遺跡、一日市遺跡、白藤遺跡、渋沢遺跡などの遺跡が知られている。(第3図) これらの遺跡の内、一日市遺跡と白藤遺跡は前田遺跡よりやや古い時期の住居址を主体とする遺跡である。中町遺跡についてはすでにその出土遺物の一部が公表され、6世紀中葉頃の赤城山と粕川に対する信仰の場として把えられ、祭祀遺跡として性格付けられている。(尾崎　1958年)(注3) 公表された資料を見ると前田遺跡第1号住の出土遺物と同時期か、若干、古い様相をもったものとして把らえられる。

粕川村には、古墳時代中期とされる土器(和泉式土器)を出土する遺跡が非常に多く、古墳時代後期になると、遺跡数も減少し、そのかわりに後期古墳に位置付けられる小円墳が月田地区、深津地区、膳地区などに群集墳という形をとって出現してくるのである。前田遺跡はこの古墳時代後期前半を主体とする遺跡であり、上記のような粕川村における古墳時代のあり方を考える上で重要な位置を示めるものと考えられる。

注1、この水田面については試掘を行ったが古代の水田跡を検出することはできなかった。

注2、井上　唯雄　「粕川村誌」　1972

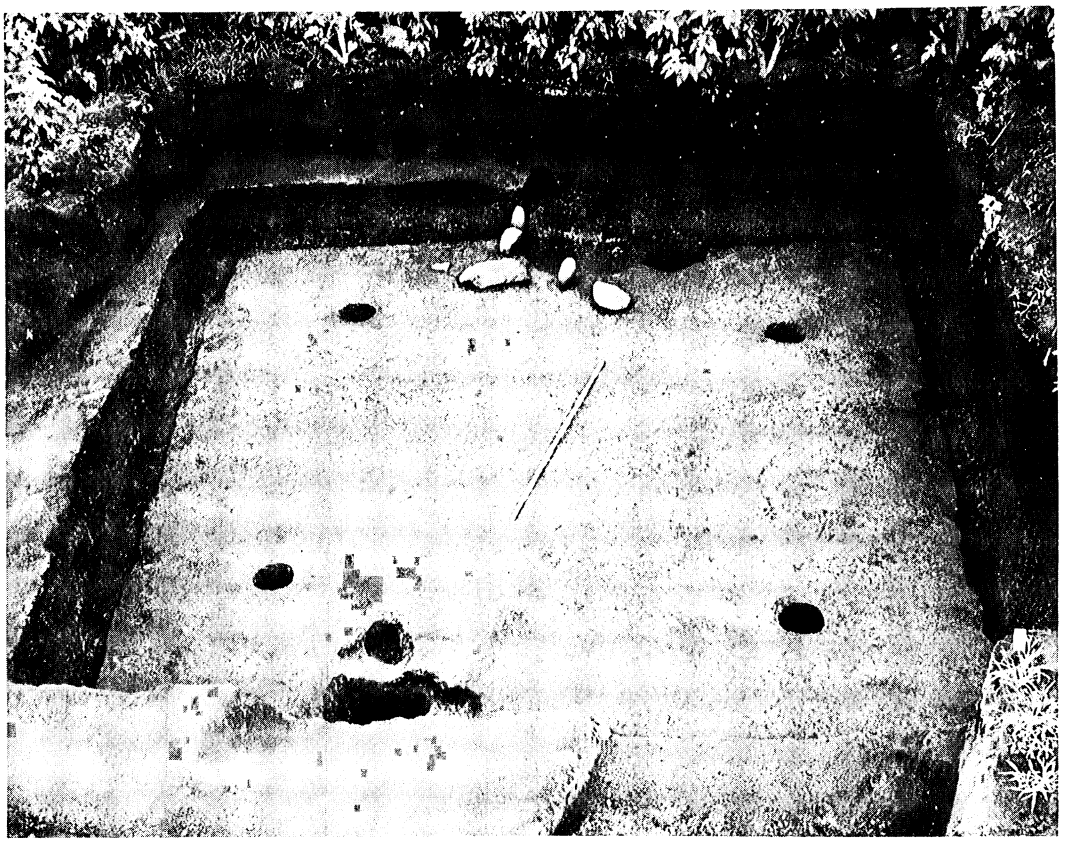
注3、尾崎喜左雄　「群馬県勢多郡粕川村中出土の土器群」日本考古学年報11.　1958



第3図　　前田遺跡とその周辺のおもな遺跡

III　発見された遺構と遺物

1）　第1号住居址

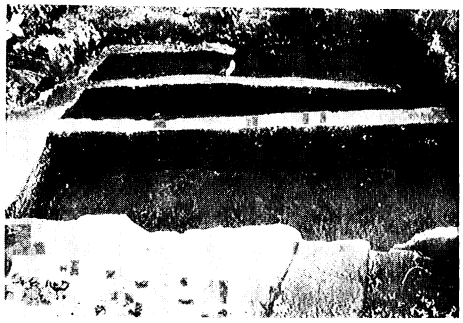


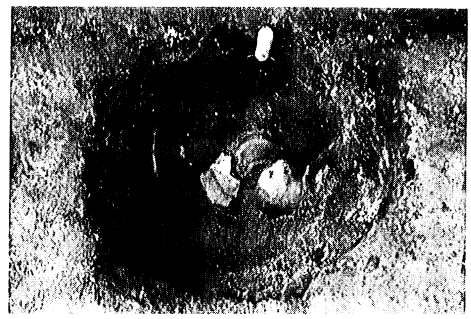
図版1　第1号住居址全景

第1号住居址は発掘区の東端に位置している。住居址の掘り込みは非常に深く、床は硬くしまっている。北壁にカマド状の遺構を持ち、その東側に貯蔵穴、さらに南壁面よりには南北に縦列する形で2個の Pit を有する。又、住居中央には、炉を配する。主柱穴は4本、壁下には壁周溝が全周している。覆土上層には榛名二つ岳給源の火山灰層（ＦＡ層）が確認できた。

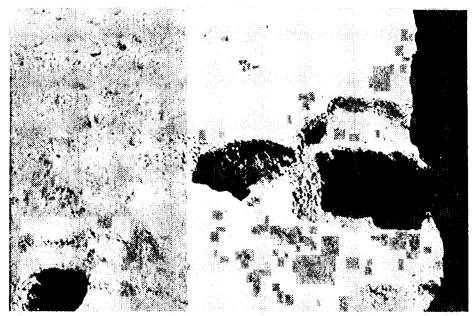
項　　目		項　　目	最長径 cm	最短径 cm	深　さ cm
主　軸　方　向	N－21°－W	主柱穴 P_1	34	30	80
		〃 P_2	36	27	73
東西方向の辺の長さ cm	640	〃 P_3	30	25	86
		〃 P_4	30	24	80
南北方向の辺の長さ cm	640	貯蔵穴 P_5	53	52	48
		P_6	62	60	26
壁　高 cm	60	P_7	34	30	12
		壁　周　溝	33	20	10

第2表　第1号住居址計測表


1


2

3


4

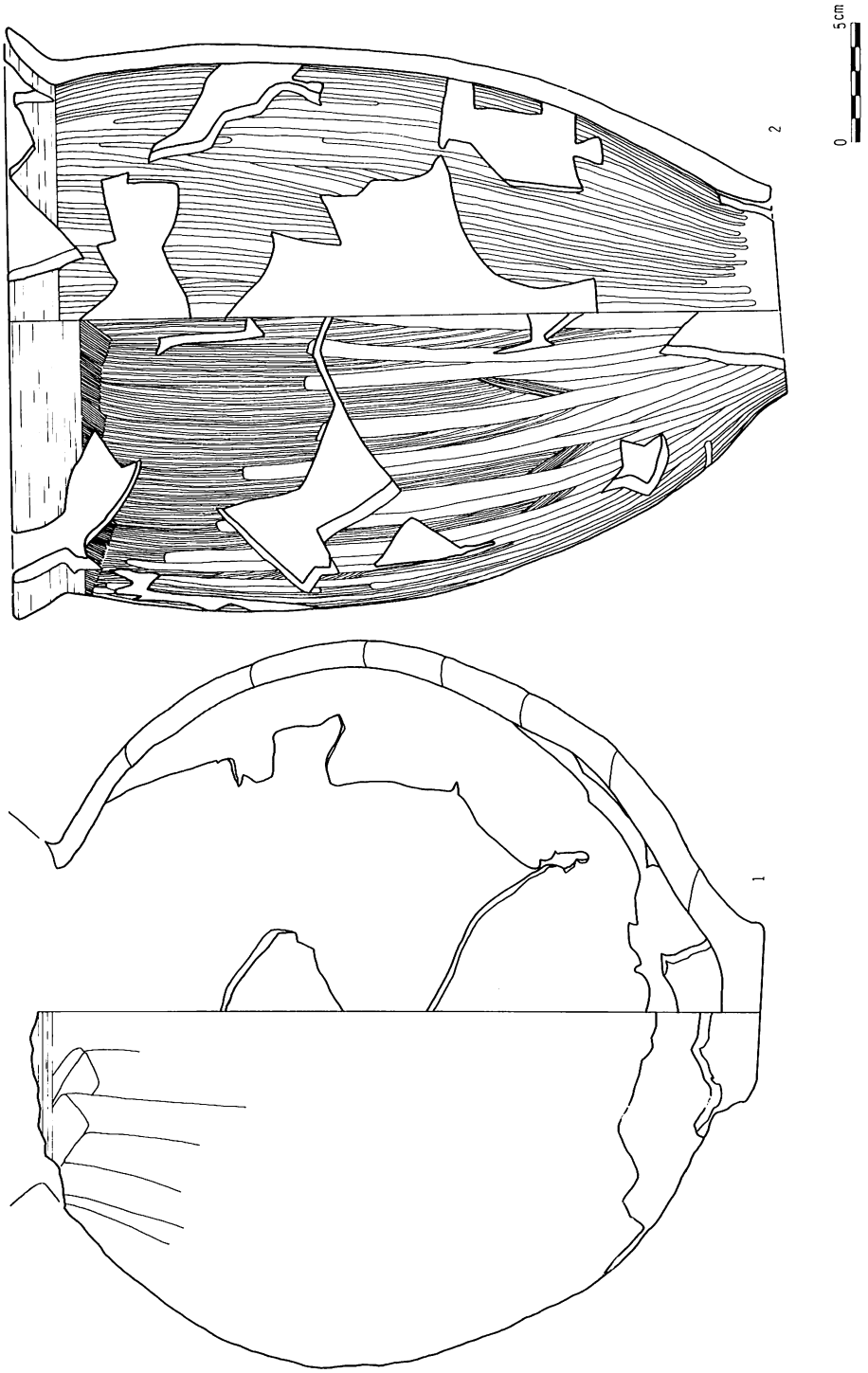
図版2　第1号住居址の発掘

(1) 第1号住居址の東西土層断面（南より）。住居址覆土は6層に分けられる。第1層は榛名二つ岳軽石（ＦＰ）と浅間Ｃ軽石を多量に含んだ層である。第2層は黄灰褐色土のサラサラした層であり、ＦＰ粒を多く含んでいる。第2層以下の層にはＦＰ粒をまったく含まない。この第2層が榛名二つ岳給源火山灰層（ＦＡ層）である。図版中、やや白っぽくブロック状に認められるのがそれである。

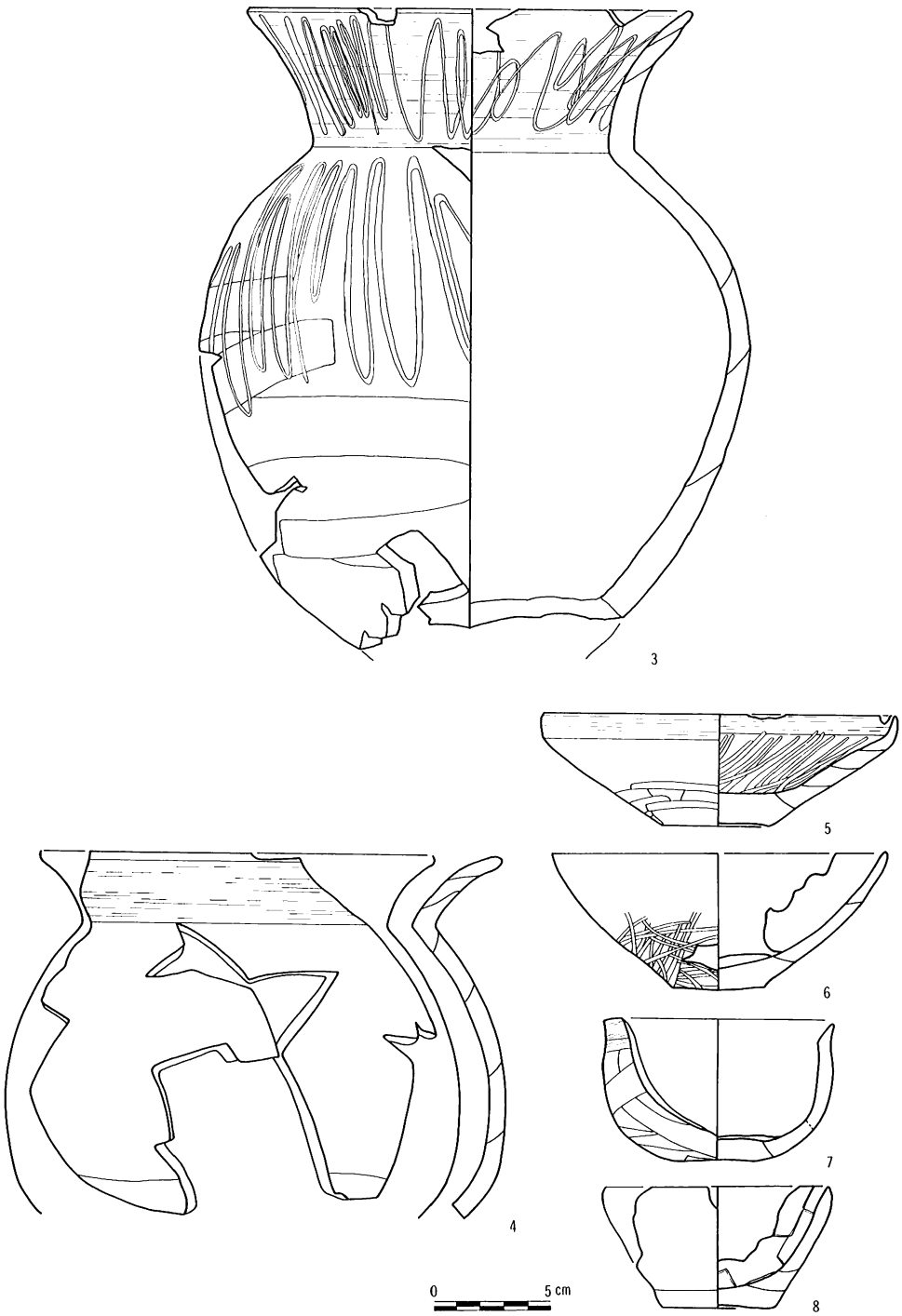
(2) カマド状遺構の東側に確認された貯蔵穴内の遺物出土状態。坏（第8図－5）、高坏（第8図－9、第9図－15）、坩（第10図－18）が出土している。

(3) カマド状遺構とその遺物出土状態（南より）。北壁中央に立石と粘土塊、さらに焼土塊を確認した。しかし、この部分はちょうど後世の攪乱をうけていた為、明確にカマドとして把えることができなかった。一応、ここではカマド状遺構として呼称しておく。このカマド状遺構西脇には壺（第7図－1）、と高坏（第9図－11、12）の破片を集積したものを確認した。

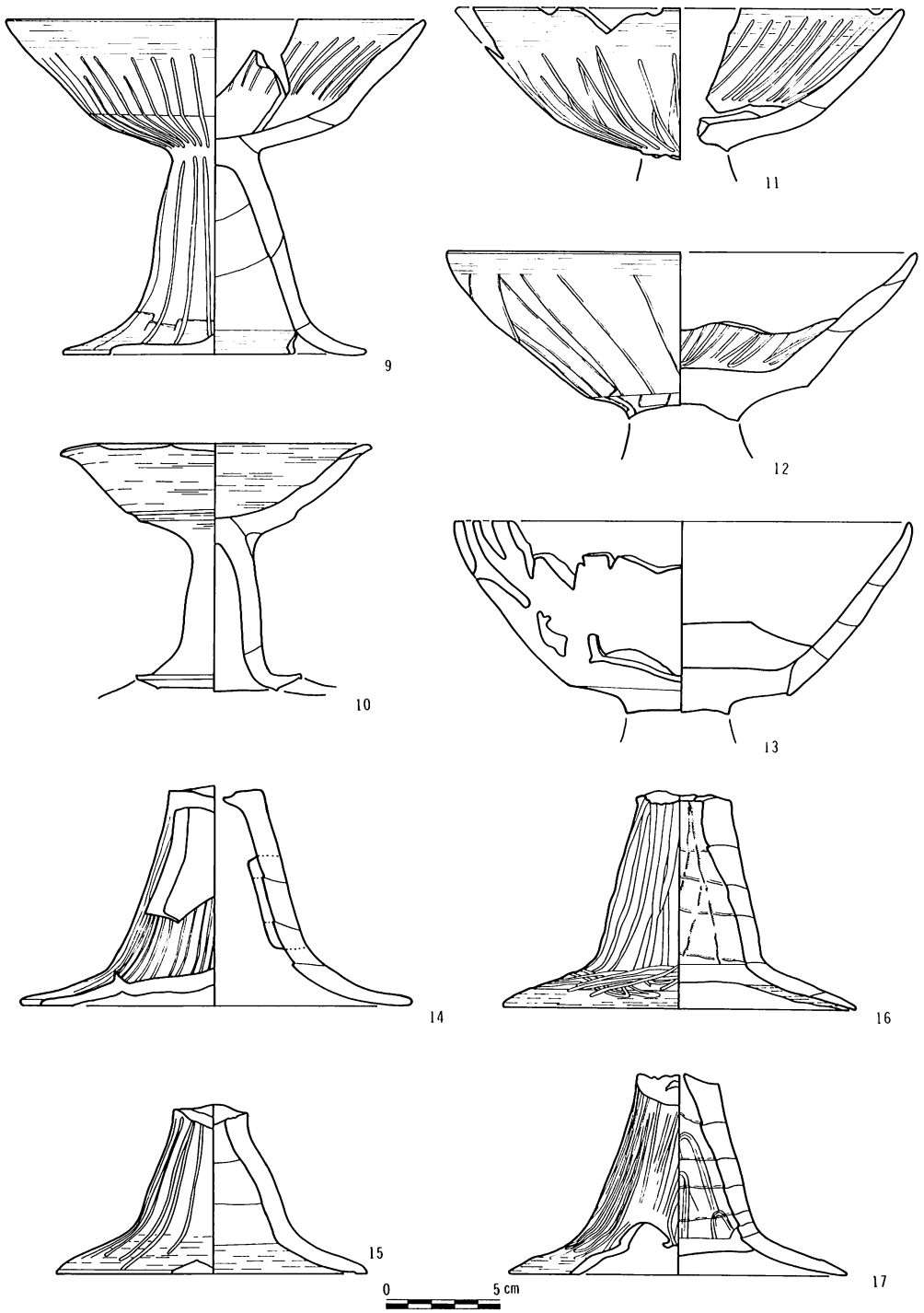
(4) 入口状施設柱穴（西より）。この住居址には、貯蔵穴及び4本の主柱穴の他に住居址南壁西隅に基壇状の高まりを設け、その中に2本の Pit を穿った遺構が確認できた。写真中央がそれである。2個の Pit は南北方向に2個縦列し、南のものは不整方形、北のものは、やや小さく円形である。なお北の Pit は垂直方向に掘られるのではなく斜め方向、すなわち住居址中央方向に向って斜め方向に掘られていた。



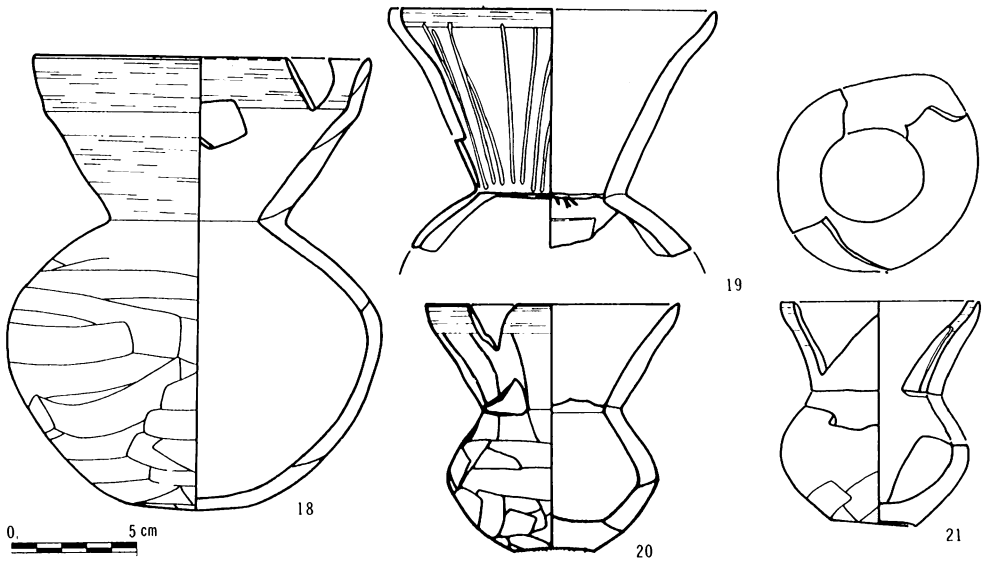
第7図　第1号住居址出土の土師器 (1)



第8図　第1号住居址出土の土師器(2)



第9図　第1号住居址出土の土師器(3)



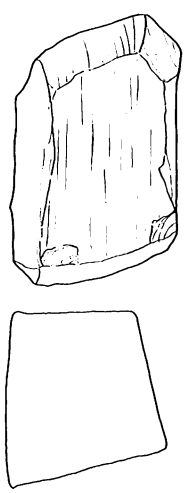
第10図　第１号住居址出土の土師器(4)

出土遺物（第７図～第11図）

第１号住居址出土のおもな遺物は、壺、甕、椀、坏、高坏、坩である。その他砥石が出土している。出土土師器の内、大形甑（第７図－２）と甕（第８図－４）は住居址覆土上層からの出土である。

壺は底部から大きく球形にふくらむ胴部を有するもの（第７図－１）と口縁部中の長い口縁部を有するもの（第８図－３）とに２分できる。坏は底部から直線的に開くが口唇部近くでほぼ垂直に立ちあがり稜をもつもの（第８図－５）と底部から直線的にそのまま口縁部まで開くもの（第８図－6，8）とがある。椀は所謂「内斜口縁」を有するものである。（第８図－７）　高坏はいずれも坏部に稜を有するもので、脚部の形態で２分できる。すなわち、ラッパ状にひろがるもの（第９図14～17）と、脚部に段を有するものである。（第９図－10）　坩は小形でそろばん玉状の胴部と直線的にハの字状に開く口縁部をもつもの（第10図－20、21）大形で球形の胴部に頸部から直線的に開く口縁部が口唇部近くでやや内湾ぎみに立ち上がり稜を有するもの（第10図－18、19）とに２分できる。

これらの遺物の出土状態は第６図に示されるように接合関係が非常に多く、又破片が距離をおいて接合するなど遺物の動きは動的である。又、カマド状遺構を中心とした遺物の動きが顕著である。



第11図　第１号住居址出土の砥石

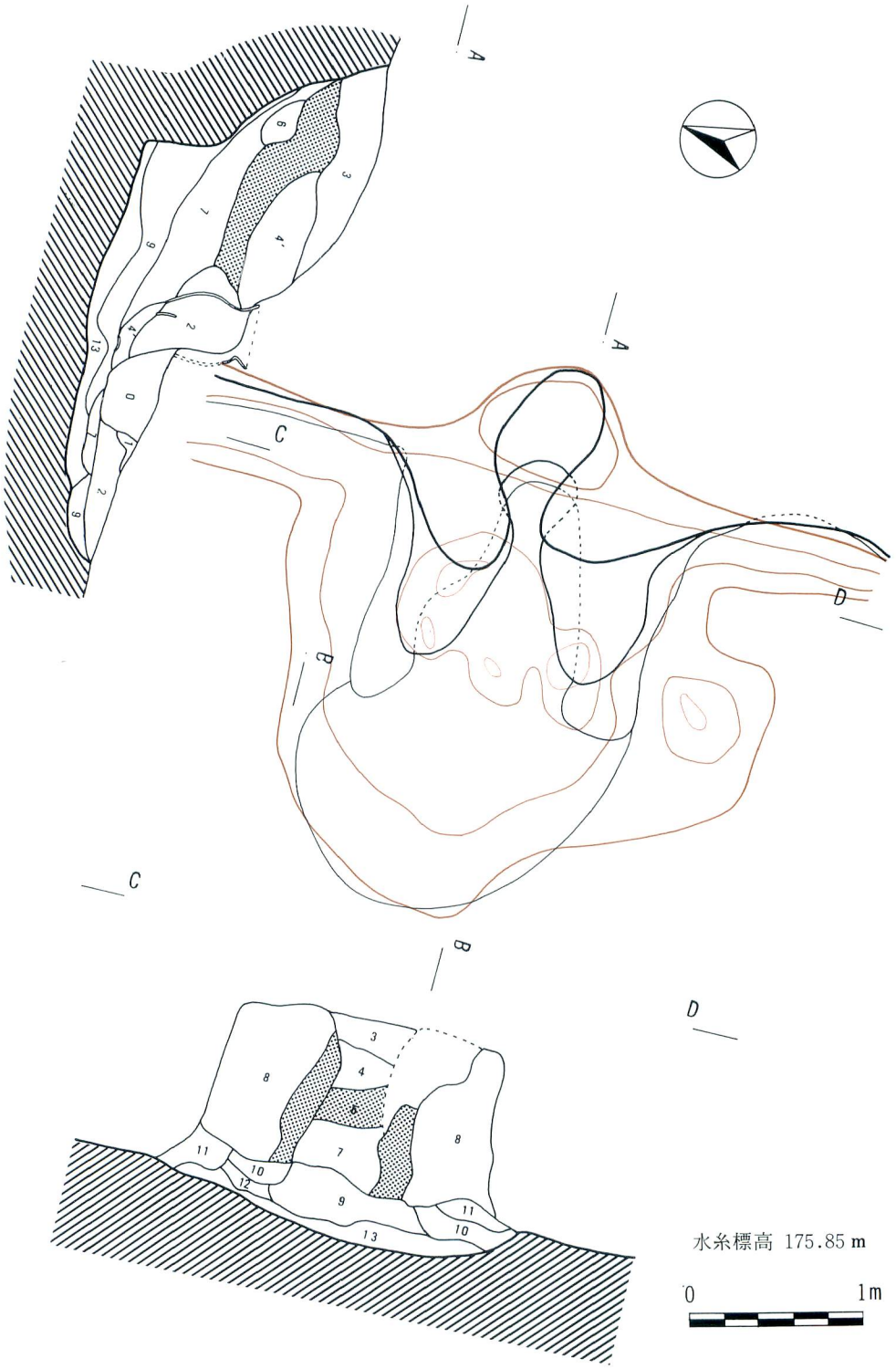
2） 第2号住居址

図版3 第2号住居址 全 景

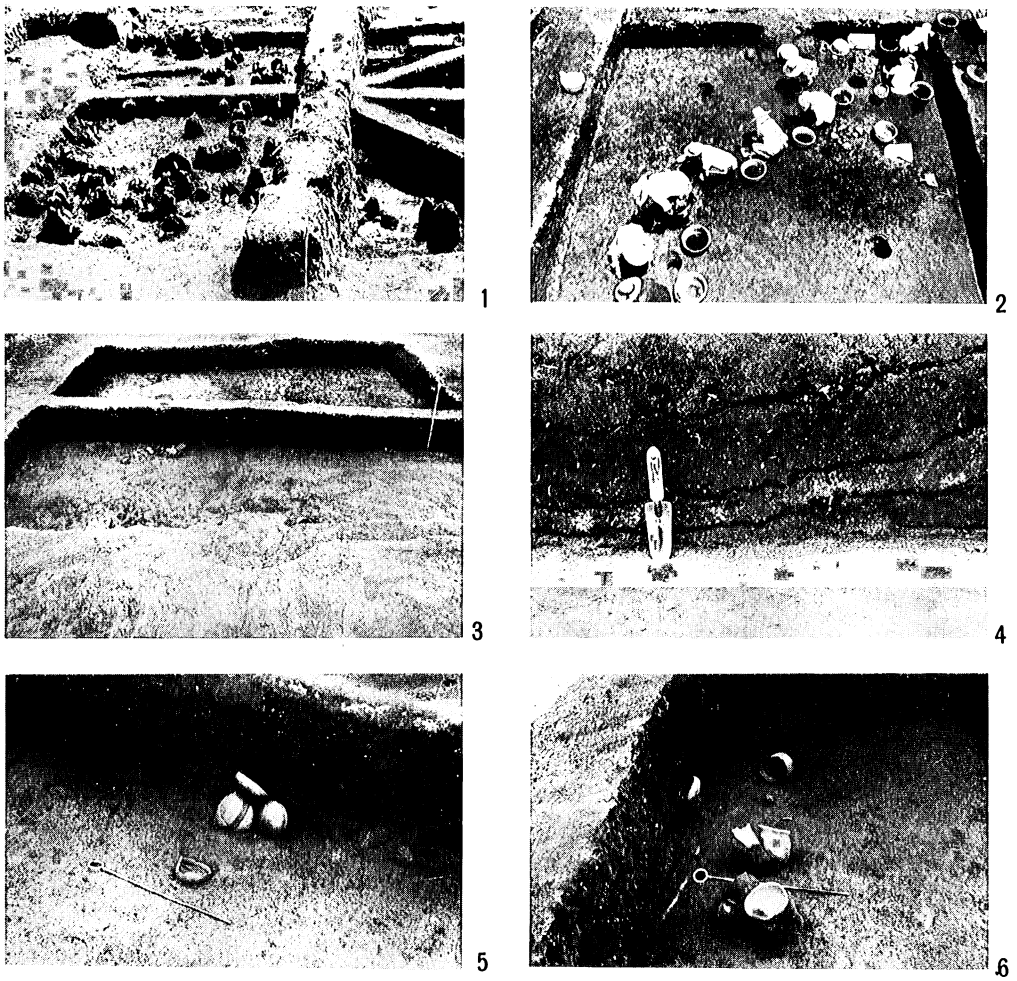
第2号住居址は発掘区のほぼ中央、第3号住居址と第4号住居址との間に位置している。この住居址も掘り込みが深く遺構、遺物の残りは非常に良好であった。住居址東壁中央にはロームブロックを袖として用いたカマドを付設している。カマドの南には平面形隅丸長方形の深い貯蔵穴がある。主柱穴は4本、壁周溝も全周している。覆土中には床面直上にFAの堆積が認められた。

項　目		項　目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N－83°－E	主柱穴 P_1	34	33	41
		〃 P_2	47	37	32
東西方向の辺の長さ cm	640	〃 P_3	46	33	36.5
		〃 P_4	37	35	41
南北方向の辺の長さ cm	630	貯蔵穴 P_5	111	86	169
		P_6	54	38	59
壁高 cm	58	P_7			
		壁周溝	32	20	8

第3表 第2号住居址計測表



第12図　第２号住居址カマド実測図



図版 4　第 2 号住居址の発掘(1)

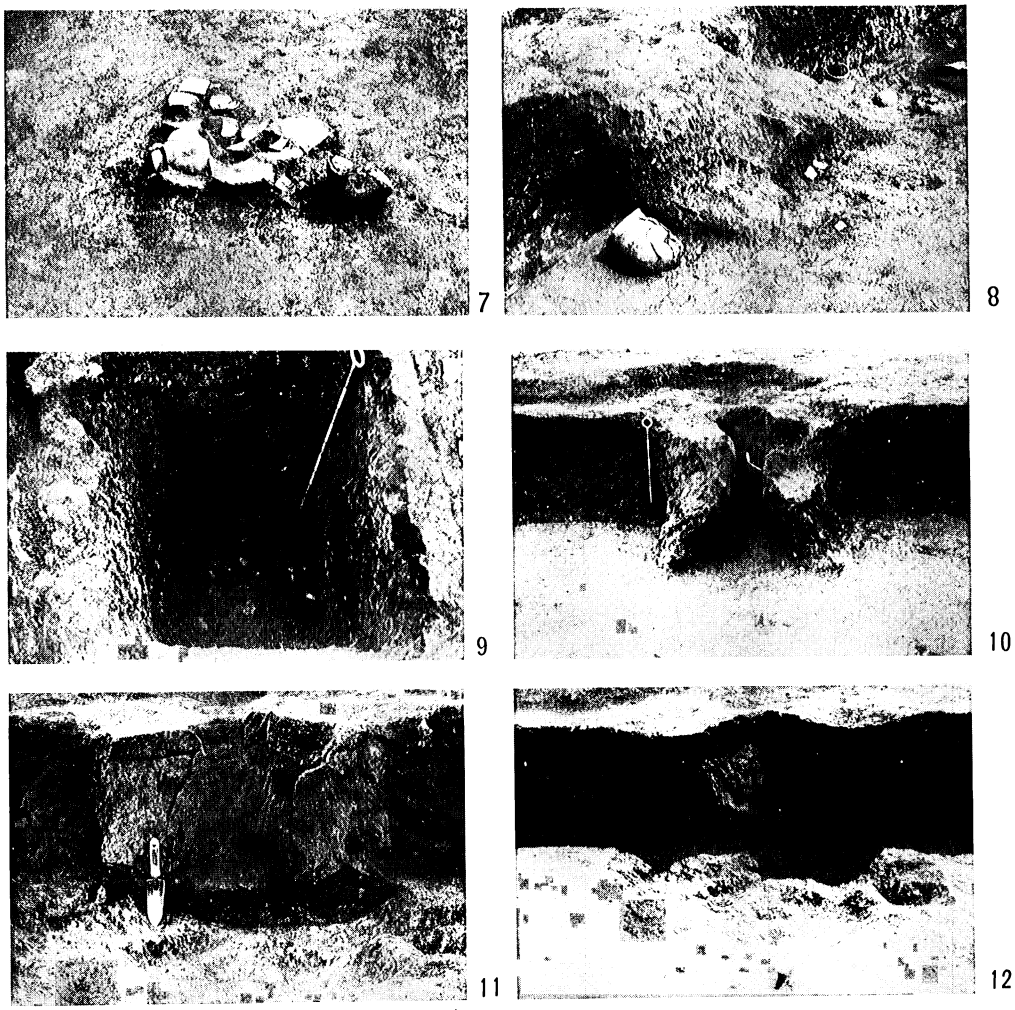
(1)　第 2 号住居址覆土上層における遺物の出土状態。（西より）

(2)　第 2 号住居址の床面精査状況。（西より）

(3)、(4)　第 2 号住居址の覆土中に確認されたＦＡの堆積状況。図版中白っぽくみえるのがＦＡである。

(5)　第 2 号住居址西壁南よりに土師器の坏（第17図16、17、18、25）と埦（第16図10、13）が、立てかけられているような形で重なりあって出土している。

(6)　南壁中央の遺物出土状態。（北より）



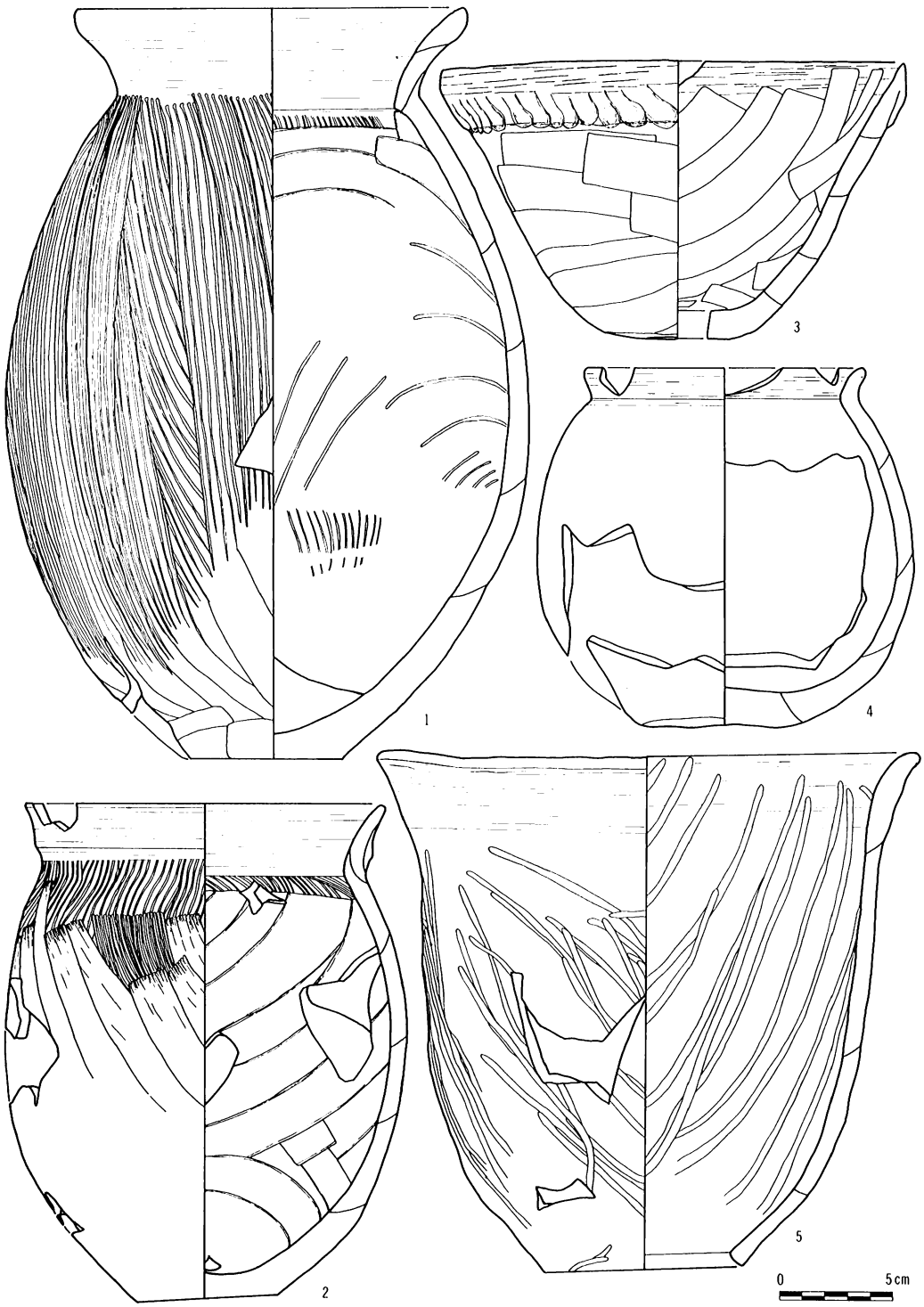
図版 5　第２号住居址の発掘(2)

(7)　第２号住居址のほぼ中央部、甕（第15図１）と小形の甑（第15図３）の出土状態。甑内より石製の勾玉（第18図28）が出土している。

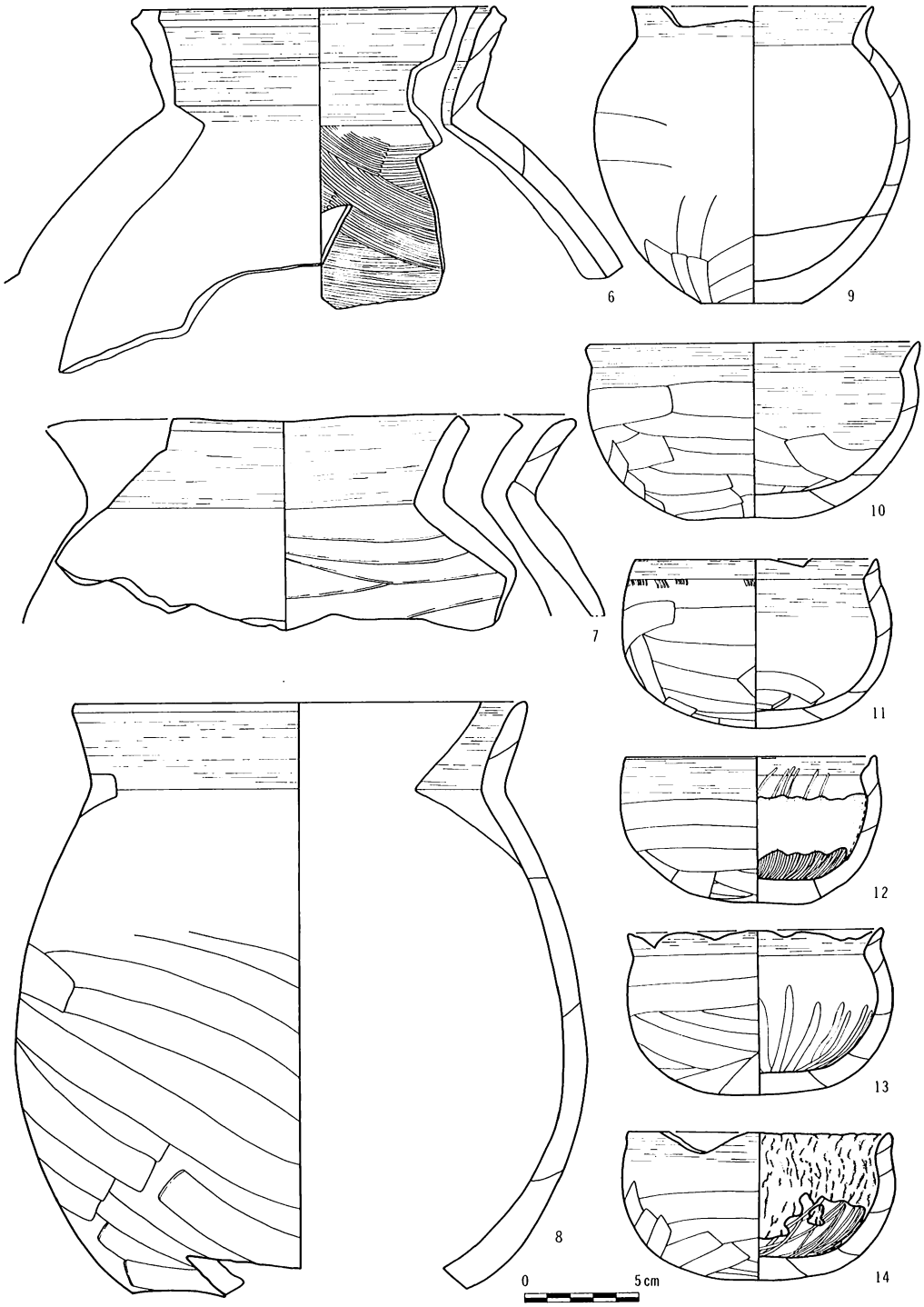
(8)　第２号住居址カマド周辺の遺物出土状態。カマド内より甕(第16図８)、カマド北側には小形甕（第15図２）が出土している。

(9)　貯蔵穴内の遺物出土状態。貯蔵穴は深く床面から110cmの深さを計る。

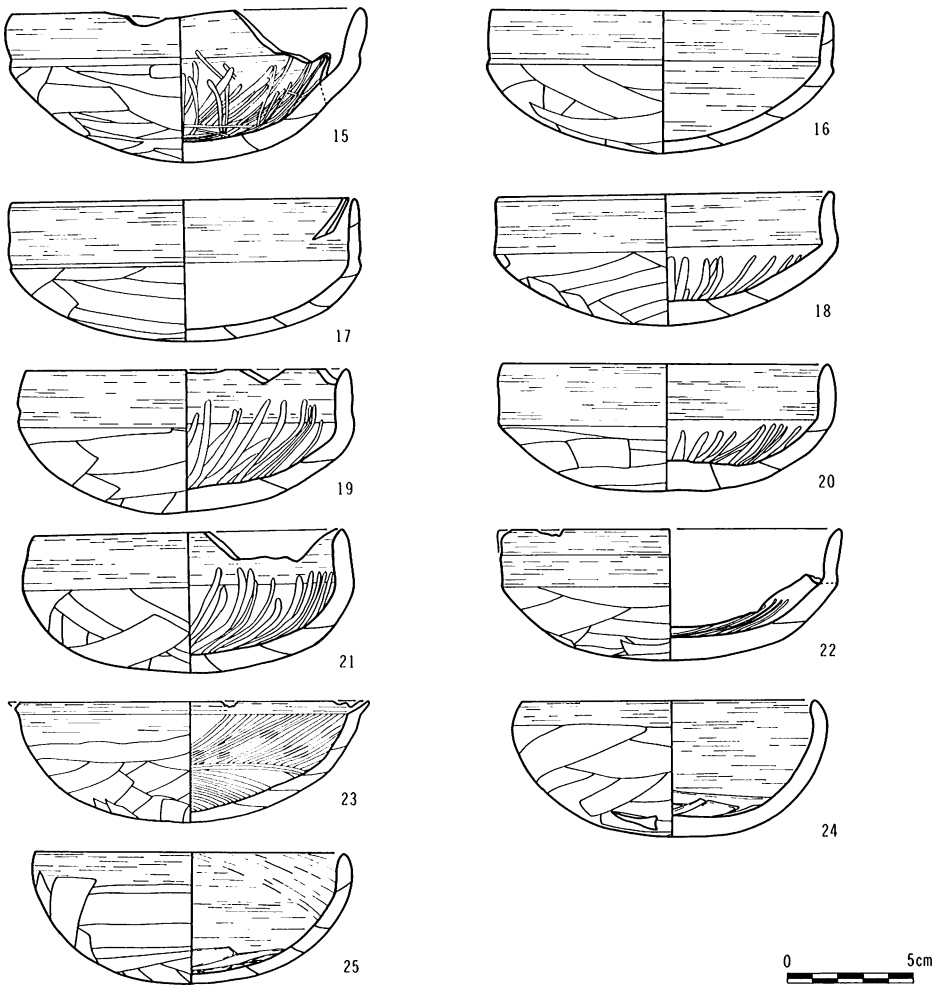
(10)(11)(12)　第２号住居址カマドの発掘状態である。カマドはロームブロックを袖としてもちいている。煙道は発達せず、カマド内には支脚等はみとめられなかった。(11)はカマドの袖部の切開の状態である。堀り方埋め土、袖のロームブロック、袖部の熱による赤化の状態がわかる。(12)は堀り方の状態である。（第12図参照）



第15図　第２号住居址出土の土師器(1)



第16図　第２号住居址出土の土師器(2)

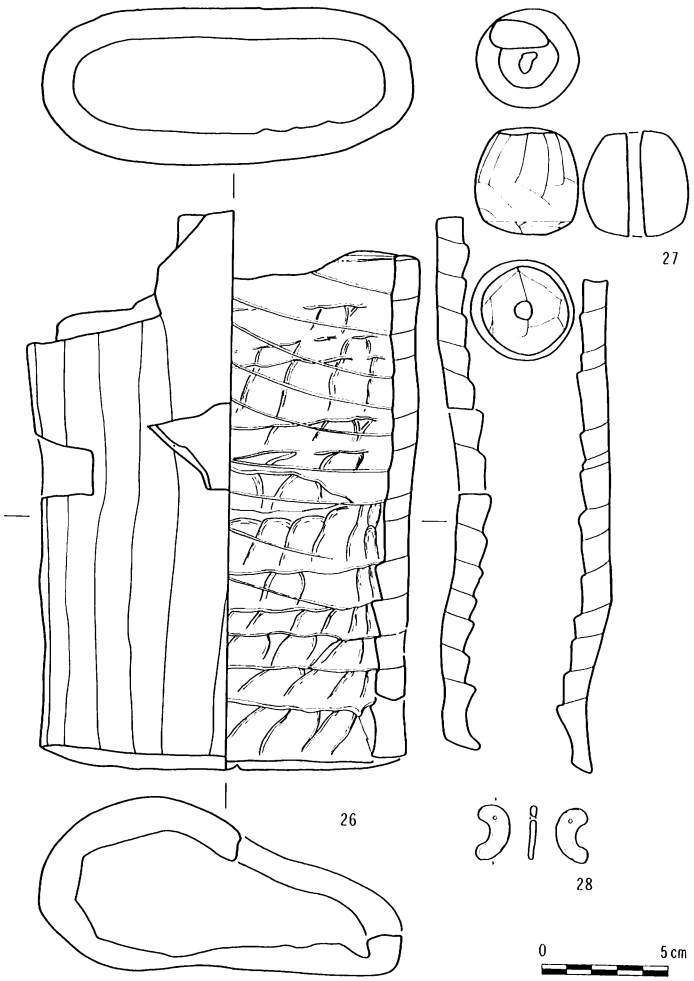


第17図　第２号住居址出土の土師器(3)

出土遺物（第15図～第18図）

第２号住居址出土の土師器は壺１、甕６、甑２、坏14、埦５であり高坏の欠落が指摘できる。この他、筒形土製品（第18図26)、土製紡錘車（第18図27)、淡青緑色の貢岩製の勾玉(第18図28)などの遺物が出土している。この内、甕（第16図７）と土製紡錘車は住居址覆土上層からの出土であり、筒形土製品はＦＡ層上面からの出土である。他の遺物については床直からの出土である。

壺（第16図６）は口縁部にわずかに段を有し、胴部から「くの字」に屈曲するものである。胴部は欠失しているが、かなり張るものであろう。甕（第15図１、２、４、第16図７、８、９）は甕と小形甕とに２分できる。さらに甕は、長胴の胴部を有し、口縁部は胴部から「くの字」に屈曲し口唇部は肥厚するもので、整形技法上の特徴として胴部表面にはハケ目を残すもの（第15図



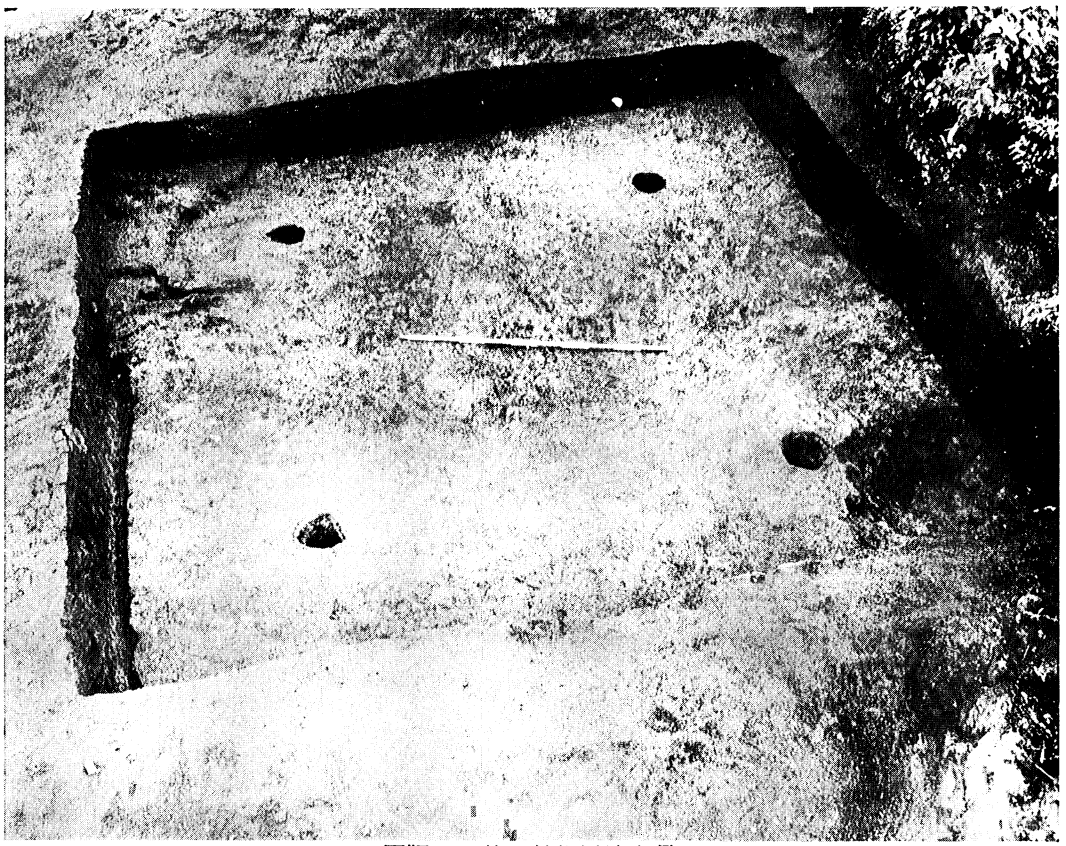
第18図　第２号住居址出土の遺物

１)。胴部はやや長めの球形状を呈し、口縁部と胴部との屈曲も前者に比べて弱いもの（第16図８）とに２分できる。又、小形甕も口縁部にわずかに稜を有し口縁部から胴部に至る屈曲はゆるく胴部のふくらみもあまり顕著でないもので胴部表面にハケ目を残すもの（第15図２）と、ちょうど埦の胴部を上下に延ばしたような形を呈するもの（第15図４、第16図９）とに２分できる。甑（第15図３、５）は小形で口縁部は折り返し口縁を有し、底部から口縁部まで直線的に「逆ハの字」状に広がるもので底部には一孔を有するもの（第15図３）と、大形で胴部はやや下ぶくれで口唇部は肥厚し底部が大きく抜かれているもの(第15図５)とに２分できる。整形上の特徴として前者がヘラケズリと指頭による圧痕が顕著であるのに対し、後者はヘラミガキが顕著である。坏（第17図）は口縁部に稜を有するもの（15～22)、稜を有せず口唇部近くで内湾するもの（24、25)、さらには所謂「内斜口縁」を有するもの（23）とに３分できる。埦（第16図10～14）は丸底あるいは小さな上げ底状の底部を有するものであり口縁部はいずれも「内斜口縁」を有する。坏、埦ともに整形技法上の特徴として内面ヘラミガキによる「放射状暗文」を有するものが多い。

筒形土製品（第18図26）は断面形が上下につぶれた円筒形を呈するもので、胎土は精製されず、内面には粘土帯の接合痕を明瞭に残し、外面には縦方向の荒いヘラケズリが施されているもので

これらの遺物はいずれも単体で出土しているものであり、距離をおいての遺物同士での接合関係はほとんど存在しない。（第14図）

3） **第3号住居址**

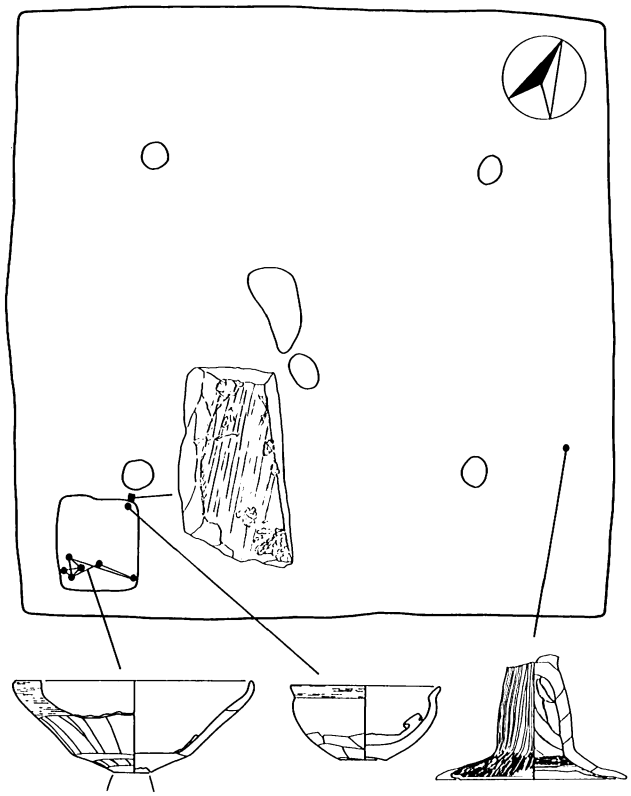


図版6　第3号住居址全景

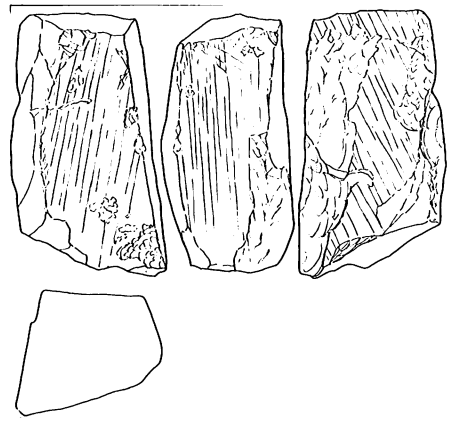
第3号住居址は第1号住居址と第2号住居址との間に位置している。この住居址はカマドを有せず、住居址中央に地床炉を有している。床はかたくしまり、4本の主柱穴と住居址南西隅に隅丸方形のやや浅い貯蔵穴をもっている。又、壁下には周溝が全周している。特記されることとして、住居址北東隅に焼土層の塊が分布していたことがあげられる。

項　　目		項　　目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N－23°－10	主柱穴 P_1	30	260	160
		〃 P_2	29	25	90
東西方向の辺の長さ cm	610	〃 P_3	32	29	92
		〃 P_4	30	28	108
南北方向の辺の長さ cm	630	貯蔵穴 P_5	98	92	47
		P_6			
壁高 cm	55	P_7			
		壁周溝	30	16	8

第4表　第3号住居址計測表



第19図　第３号住居址の遺物分布

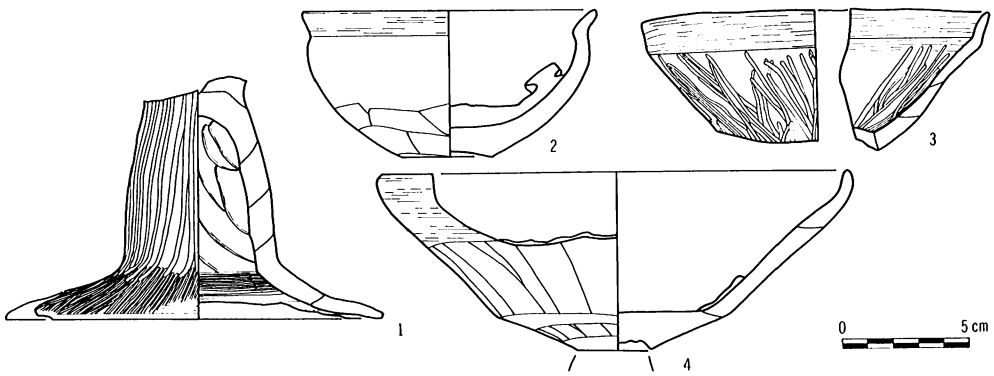


第20図　第３号住居址出土の砥石

出土遺物（第20図、第21図）

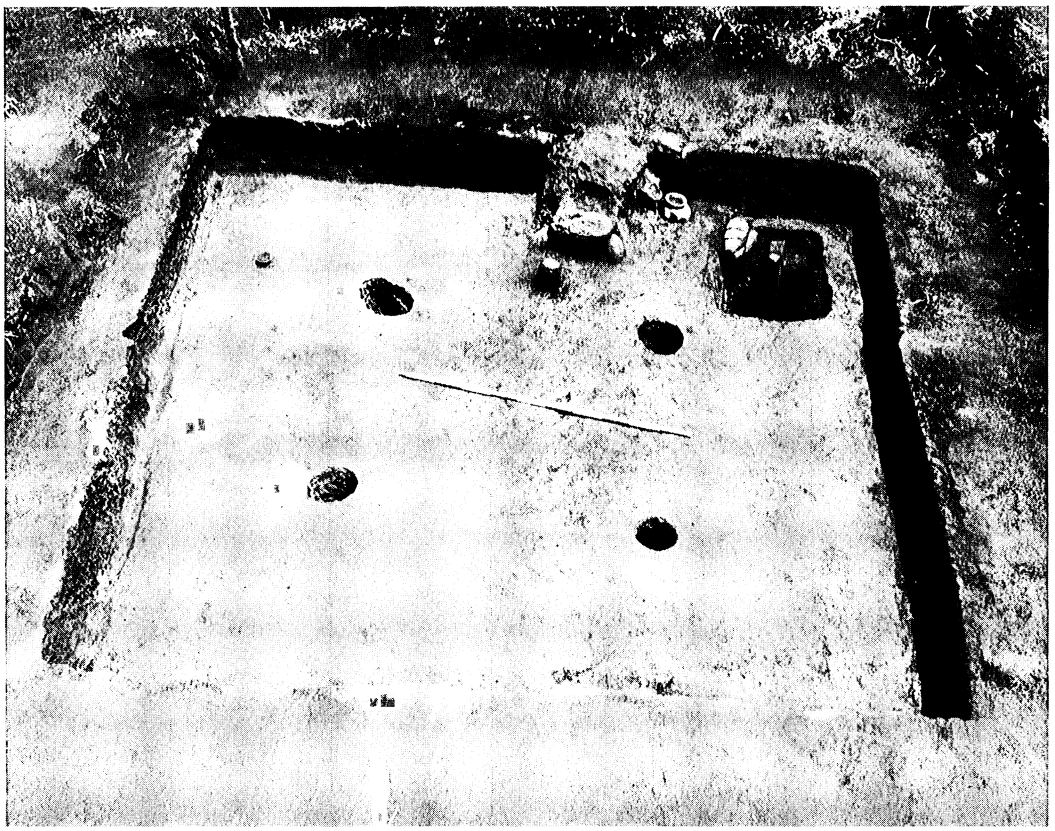
第３号住居址のおもな出土遺物は椀１、高坏２、坩１、砥石１である。遺物はすべて床面直上からの出土でありその出土は貯蔵穴に集中している。（第19図）

椀（第21図２）は内斜口縁を有するもので、底部はやや上げ底風の小さな底部を有するものである。高坏（同図１、４）は坏部と脚部が１個ずつ出土しているがいずれも別個体である。脚部はヘラミガキによる暗文が卓越している。坩（同図３）は口縁部のみの出土である。口唇部近くでやや直に立ち上がるものであり、内外面ともにヘラミガキによる暗文が顕著である。砥石（第20図）は泥岩製のもので３面に使用面が認められる。



第21図　第３号住居址出土の土師器

4）　**第4号住居址**



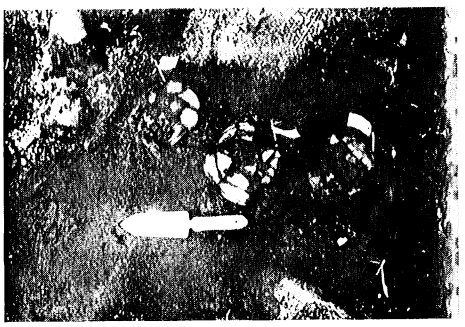
図版7　第4号住居址全景

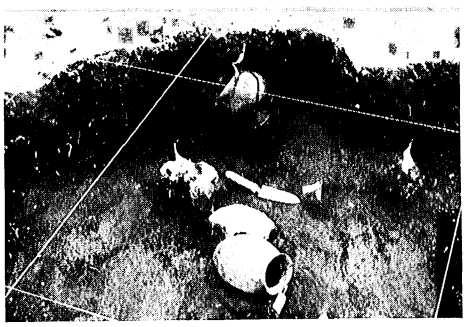
第4号住居址は発掘区の中央、第2号住居址の西に近接して確認された。この住居址も非常に遺構の残りは良好であり、遺物の出土も多かった。住居址東壁中央よりやや南にはカマドの袖の部分に石を用いて鳥居状に組んだカマドが付設されている。カマド南には平面形長方形の貯蔵穴を有している。主柱穴は4本、壁周溝も全周している。覆土中にはＦＡの堆積が認められた。

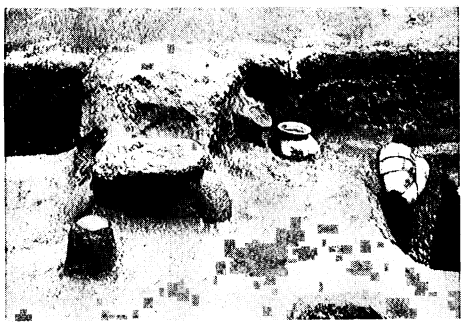
項　　目		項　　目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主　軸　方　向	E－3°－S	主柱穴 P_1	48	37	54
		〃 P_2	42	36	53
東西方向の辺の長さ cm	530	〃 P_3	46	30	50
		〃 P_4	29	25	48
南北方向の辺の長さ cm	500	貯蔵穴 P_5	119	99	86
		P_6			
壁　高 cm	46	P_7			
		壁周溝	28	14	8

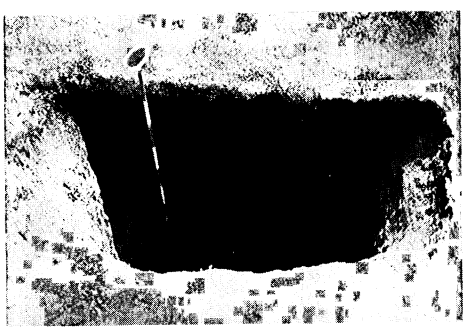
第5表　第4号住居址計測表

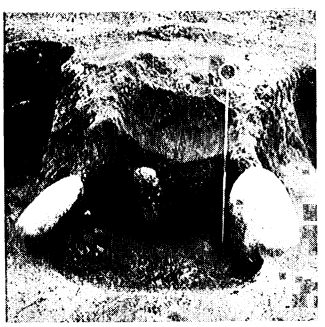
1


2


3


4


5


6

図版 8　第 4 号住居址の発掘

(1)　第 4 号住居址の覆土中に確認されたＦＡの堆積状況。写真中、やや白っぽくみえるところがＦＡ層である。

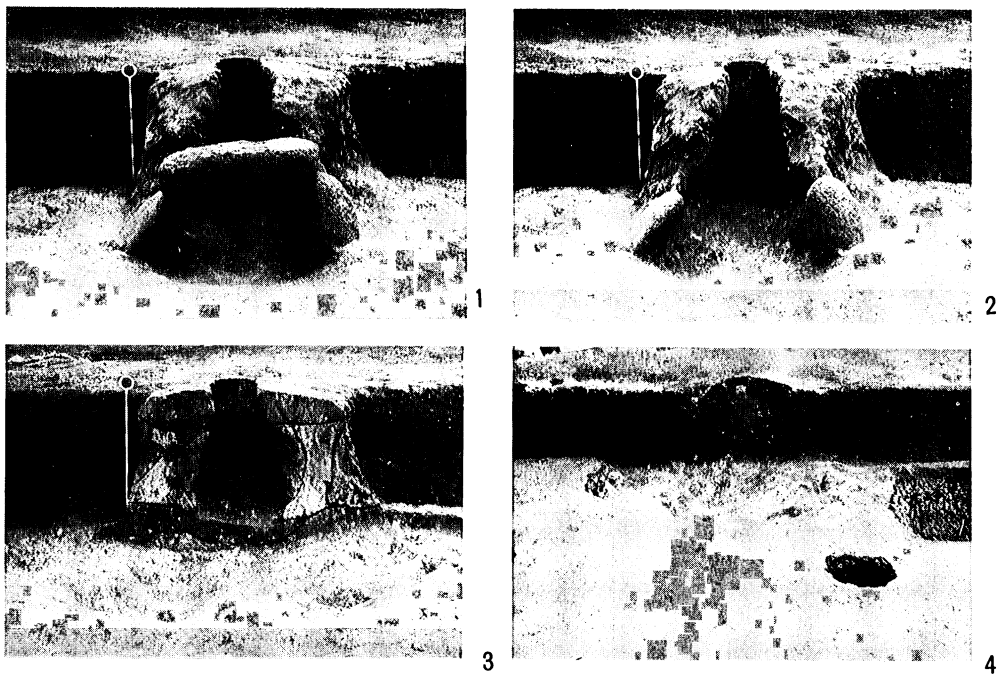
(2)　第 4 号住居址ＦＡ層の上面から出土した杯（第28図、７、８、10、14～21）の出土状態。いずれもふせられた状態で出土している。

(3)　ＦＡ層の下面の遺物出土状態、壺（第27図２）と甕（第27図４）が出土している。

(4)　カマド周辺の遺物出土状態。石を鳥居状に組んだカマドの脇に壺（第29図26）と貯蔵穴に落ち込んだ状態で甑（第29図23）が確認できた。

(5)　カマド南側の貯蔵穴の土層堆積状態。（第24図）

(6)　カマドの切開状態、カマド内に石製の支脚をみとめることができる。（第23図）



図版 9　第 4 号住居址のカマド

(1)　カマドの完掘状態、石を鳥居状に組んだ状態である。煙道はほとんど発達していない。

(2)　鳥居状の石の上部を取りのぞいた状態。ロームブロックと石をもちいて袖部を構成している。又、このカマド内には石製の支脚がみとめられた。

(3)　カマド袖部の切開の状態。ロームブロックとこれが熱によって赤化した部分、さらには、カマドを付設する場合の住居址の掘り方埋め土の黒色土がみとめられる。

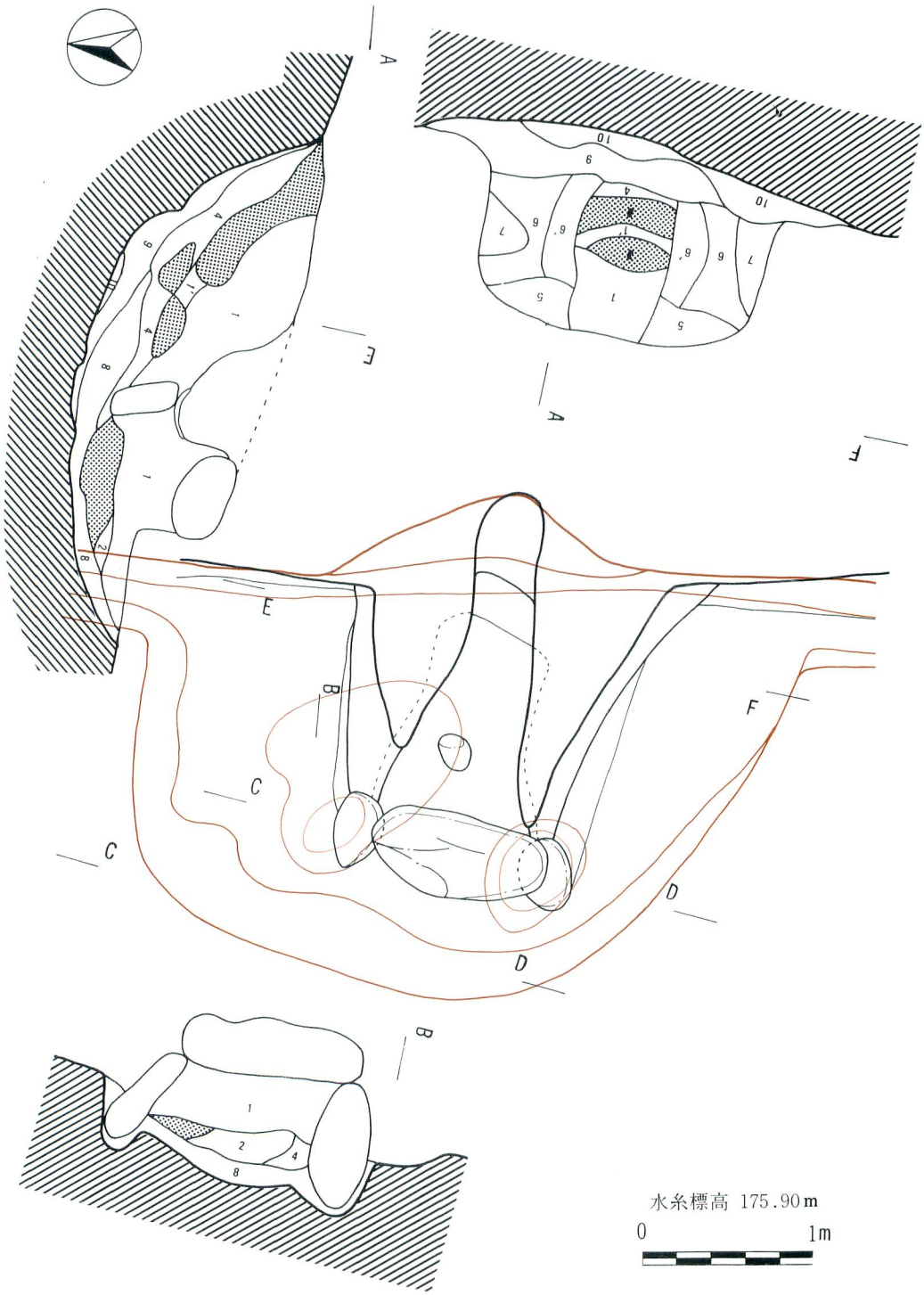
(4)　カマドの掘り方の状態、カマドの火床をはぐと黒色土がみとめられ、これをはぐと不整円形の落ち込みとなる。（第23図）

出土遺物（第26図～第29図）

第 4 号住居址の出土遺物は、住居址覆土中にみとめられるＦＡ層をはさんで、上層の遺物と下層、すなわち床面直上の遺物とに層位的に 2 分できる。

上層からは、壺 1（第29図24）、甕 4（第27図 5 、第28図 6 、22、第29図27）、高坏 1（第27図 3 ）、坩 1 （第29図24）、坏12（第28図 7 ～ 8 、10、13～21）が確認された。これらの土師器はいずれも破損が著しい。

壺（第27図 1 ）は、折り返し口縁を有するものであり、口縁部は頸部でくの字に屈曲し、大きく開くものである。胴部は上半部に最大径を有する。甕は大形の甕（第28図 6 、22、第29図27）と小形の甕（第27図 5 ）とに 2 分できる。大形甕は長胴化した胴部を有し、整形技法として縦方



第23図　第4号住居址カマド実測図

向のヘラケズリが顕著なもの(第29図27)と、胴部最大径を胴中央部に持ち整形技法としてハケ目痕を明瞭に有するもの(第28図22)とに2分できる。小形甕(第27図5)は胴部中央に最大径を有するものであり底部はやや上げ底風のものである。高坏(第27図3)は逆ハの字形に直線的に開く坏部を有するもので、脚部との接合はホゾによっている。坩(第29図24)は頸部から直線的に直に立ち上がる口縁部を有するものである。坏(第28図7、8、10、13～21)は所謂、埦に近い器形のもの(第28図13)と口縁部に明瞭に稜を有するもの(第28図7、8、10、14～21)とに2分され、さらに稜を有するものは、稜の部分を凸帯状に作り出すもの(第28図15～21)とただ単に稜を作り出すもの(第28図7、8、10、14)とに2分できる。

床面直上からは、壺1(第29図26)、甕2(第27図2、4)、甑1(第29図23)、坏3(第28図9、11、12)、埦1(第29図25)が確認できた。

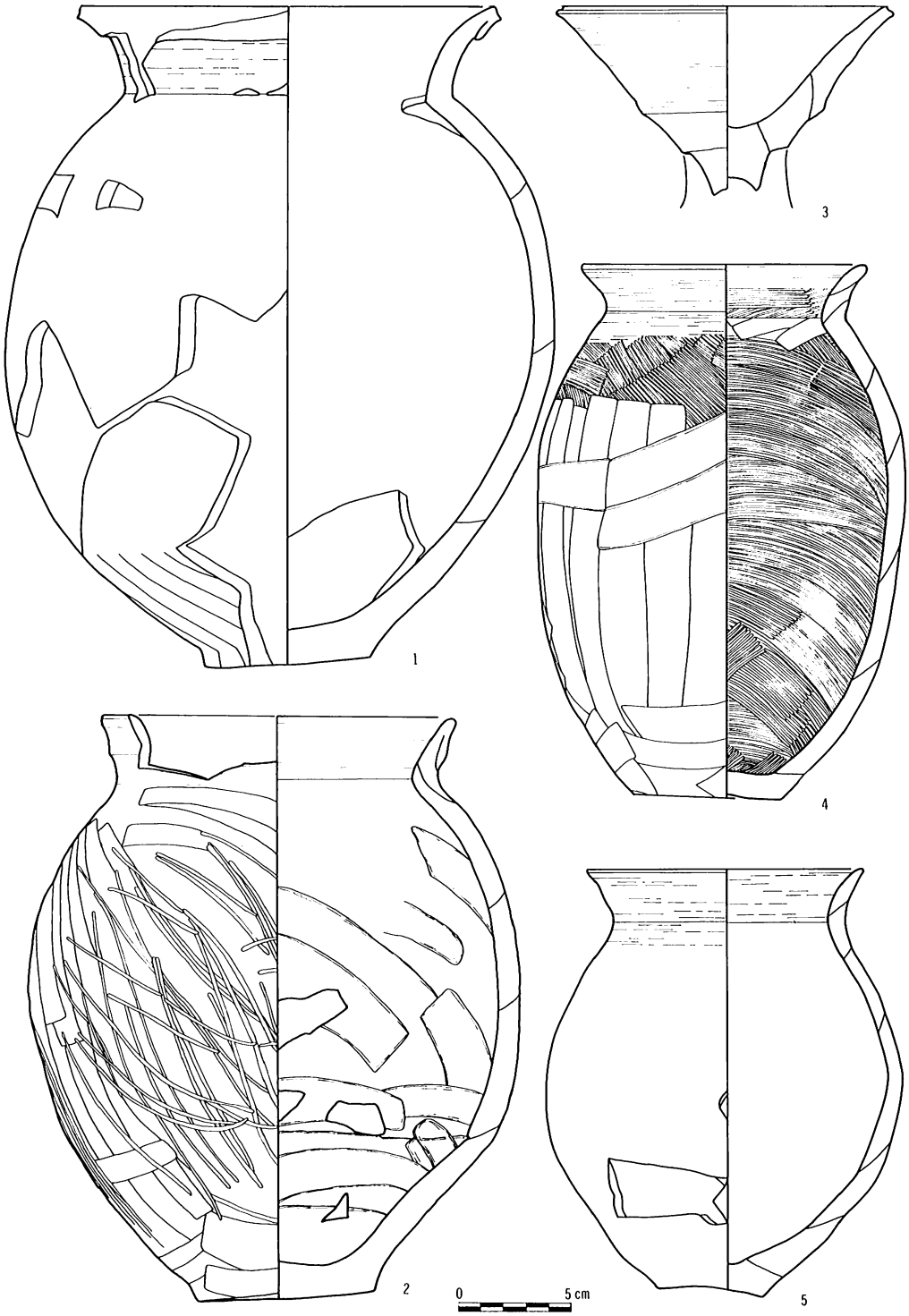
壺(第29図、26)は胴部下半を欠損してはいるが、かなり球形状の胴部を有するものと思われる。口縁部は肥厚し、口縁部半ばに稜を形成している。甕は、口縁部が折返しの手法によって肥厚し、稜を有するもので、胴部から短かく「くの字」に屈曲し、胴中央部に最大径を有し、ヘラミガキが顕著なもの(第27図2)と胴部はほとんどふくらみをもたずズン胴で内面と外面にハケ目痕を残すもの(第27図4)とに2分できる。甑(第29図23)は、底部全体を孔としているものであり、胴部は砲弾状を呈し、口縁部はわずかに外反している。胴部内面には縦方向のヘラミガキが顕著である。坏(第28図9、11、12)はいずれも大形で深く、口縁部と胴部との境には明瞭に稜を有し、口縁部は直に立ち上がるものである。埦(第29図25)は、小形のもので、口縁部は内湾する、所謂「内斜口縁」を有するものであり、胴部はやや下ぶくれのものである。

以上の土師器の他に滑石製の勾玉が第4号住居址からは出土している。(第26図)

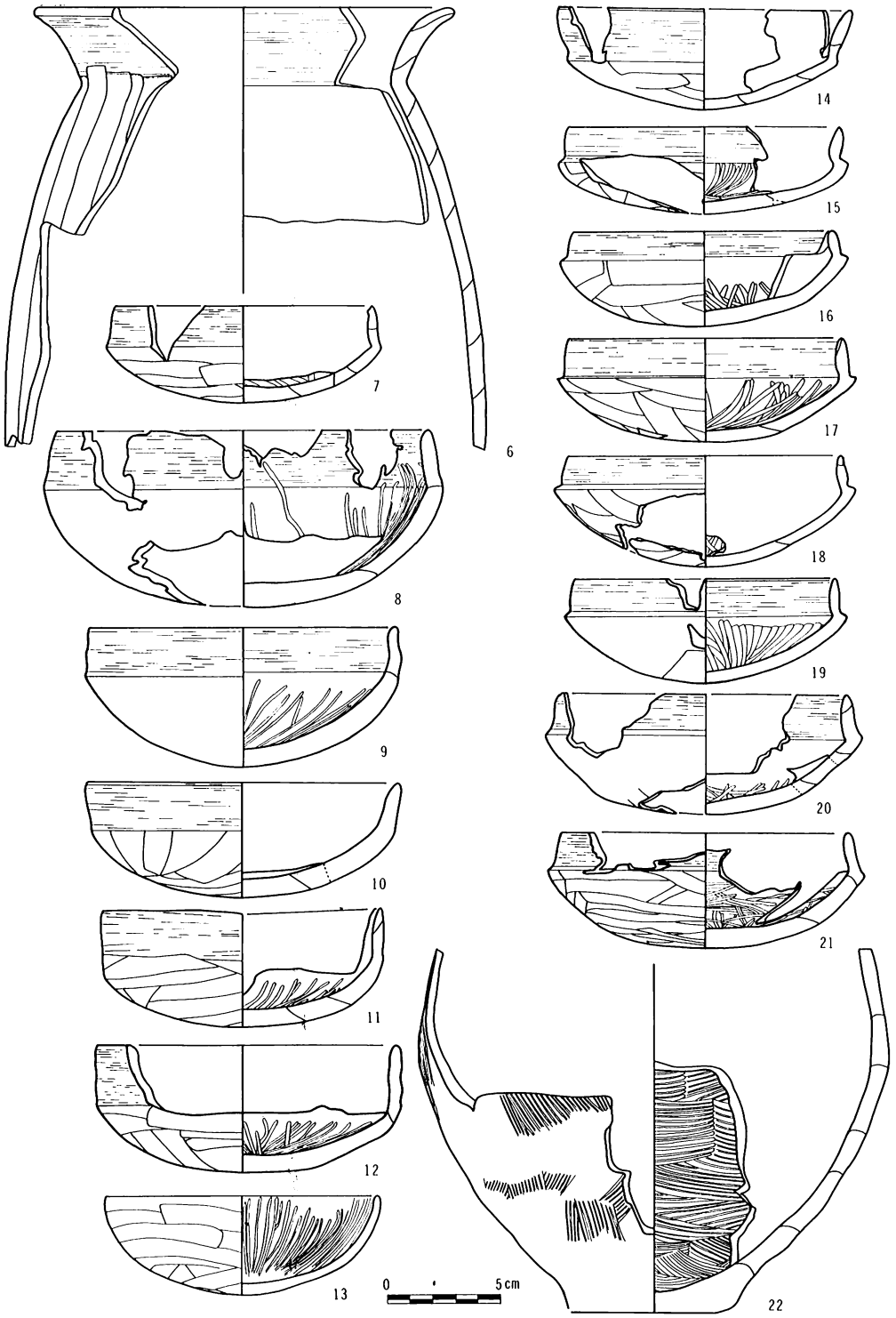
第4号住居址からはFA層を狭んで層位的に2つの土師器群が確認できた。この2つの土師器群は、その土器組成の上においてはほとんど差異はないが、甕、坏などにおいて形態的な差異は明瞭である。特にFA層上部から確認された土師器群は、これから記述する第7号住居址、第8号住居址などの土師器群のあり方の検討を通してさらに明瞭なものとなろう。

遺物の出土状態(第25図)は、床面直上の遺物はほとんど単独で接合関係をもたない状態で出土しているものに対して、FA上層の遺物群は非常に活発な動きを見せている。

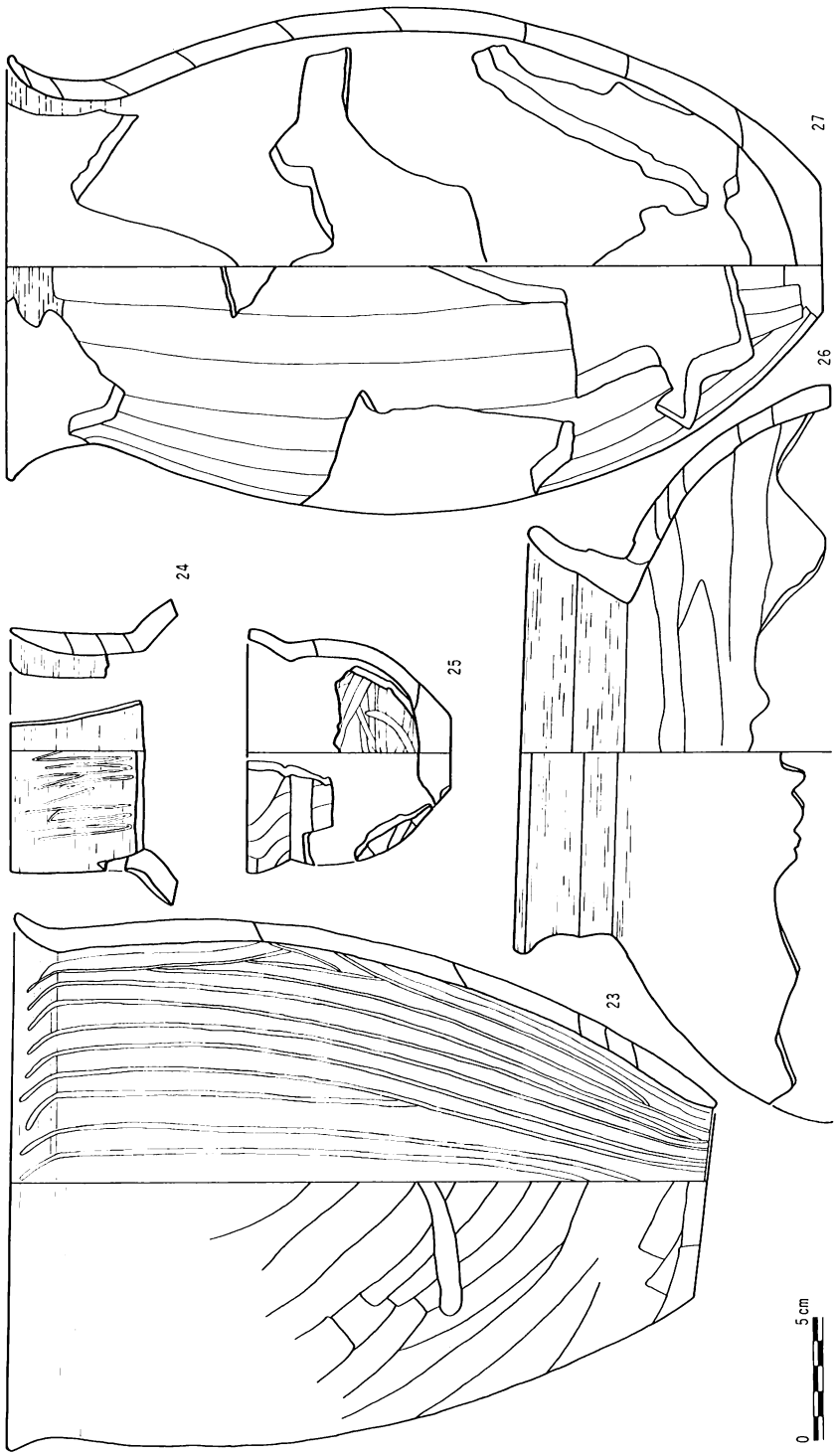
第26図
第4号住居址出土の勾玉



第27図　第4号住居址出土の土師器(1)



第28図　第４号住居址出土の土師器(2)

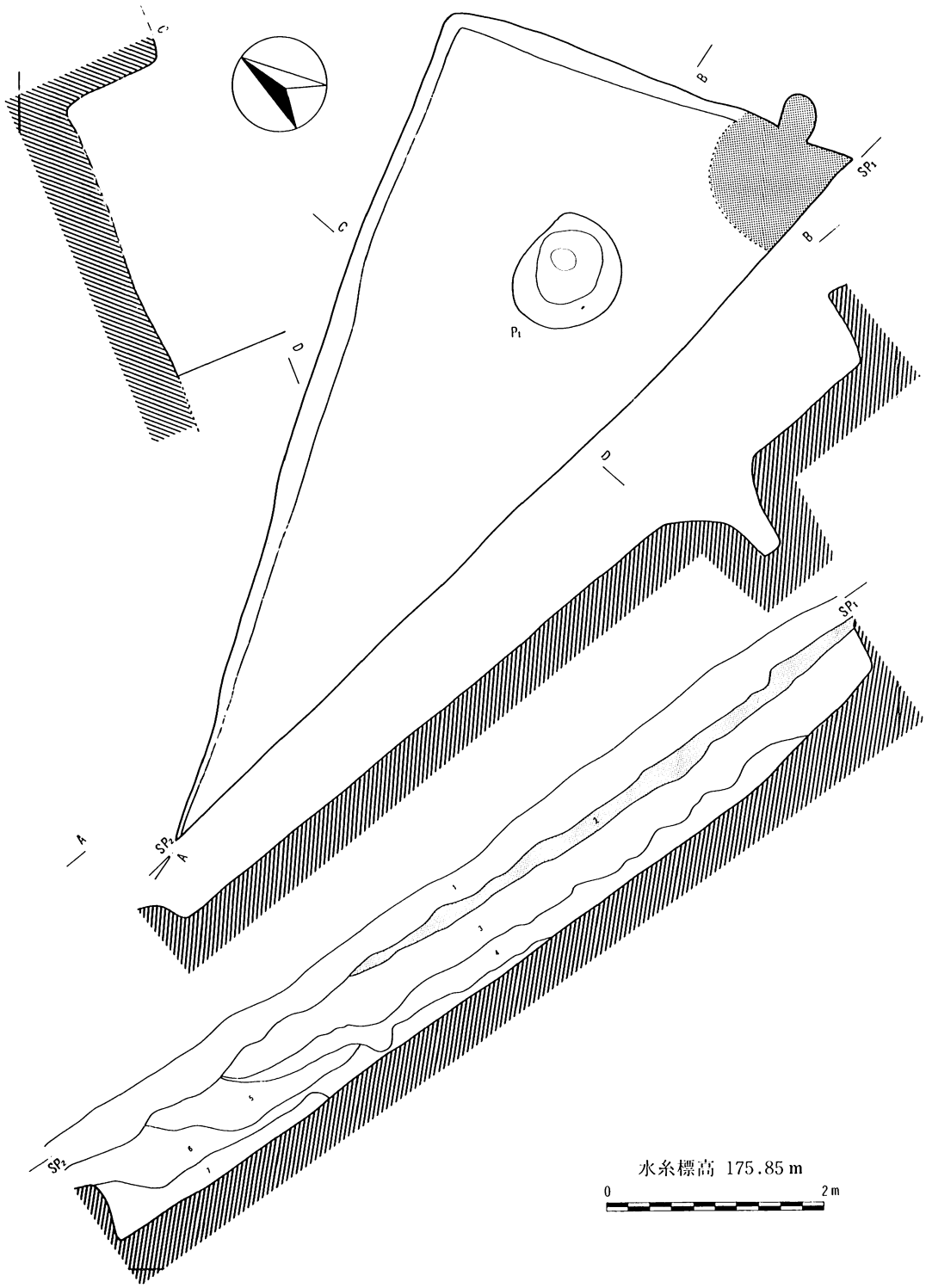


第29図　第4号住居址出土の土師器(3)

(5) 第5号住居址

図版10 第5号、6号、7号、8号、9号 住居址全景

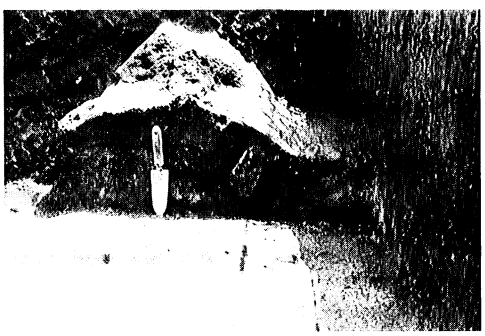
第5号、6号、7号、8号、9号住居址は発掘区の西端に互いに切り合い関係をもって確認された。図版中央のポールが入っている住居址が第7号住居址である。その右が第5号住居址である。第5号住居址は第7号住居址の一部を切って構築されている。第5号住居址は、発掘区の都合で全掘することができなかった。

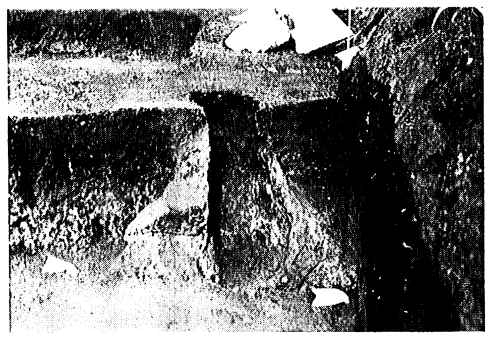


第30図　第５号住居址実測図

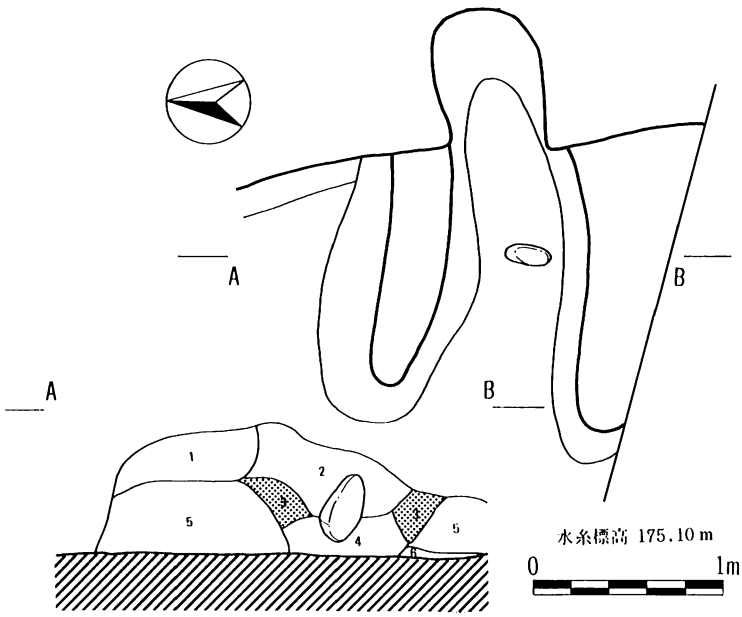
項　　目		項　　目	最長径 cm	最短径 cm	深　さ cm
主　軸　方　向	N－76°－E	主柱穴 P_1	106	90	80
		〃 P_2			
東西方向の辺の長さ cm		〃 P_3			
		〃 P_4			
南北方向の辺の長さ cm		貯蔵穴 P_5			
		P_6			
壁　高 cm	80	P_7			
		壁周溝			

第6表　第5号住居址計測表





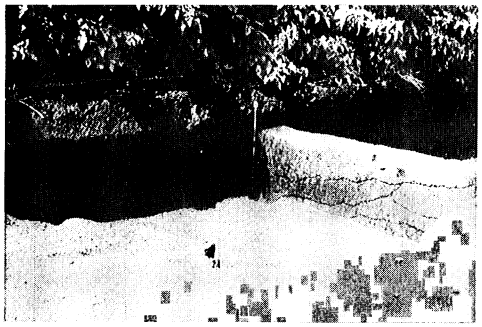
図版11　第5号住居址のカマド

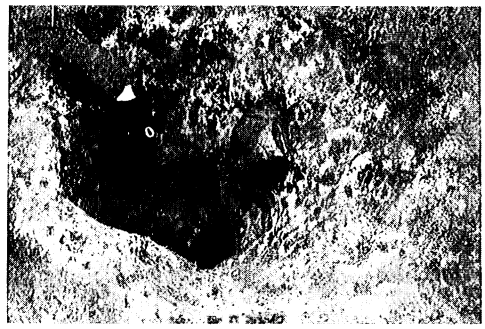


第31図　第5号住居址 カマド実測図

第5号住居址は、第7号住居址の南に位置しており、住居址の北東の隅の一部を調査したにすぎない。東壁には橙灰白色の粘土を袖として使用し、石製の支脚を有したカマドがかなり崩れた形で確認できた。このカマドの位置は、東壁でもかなり北側に寄った位置であることが予想される。又主柱穴の内、1個を確認した。壁周溝はもたない。

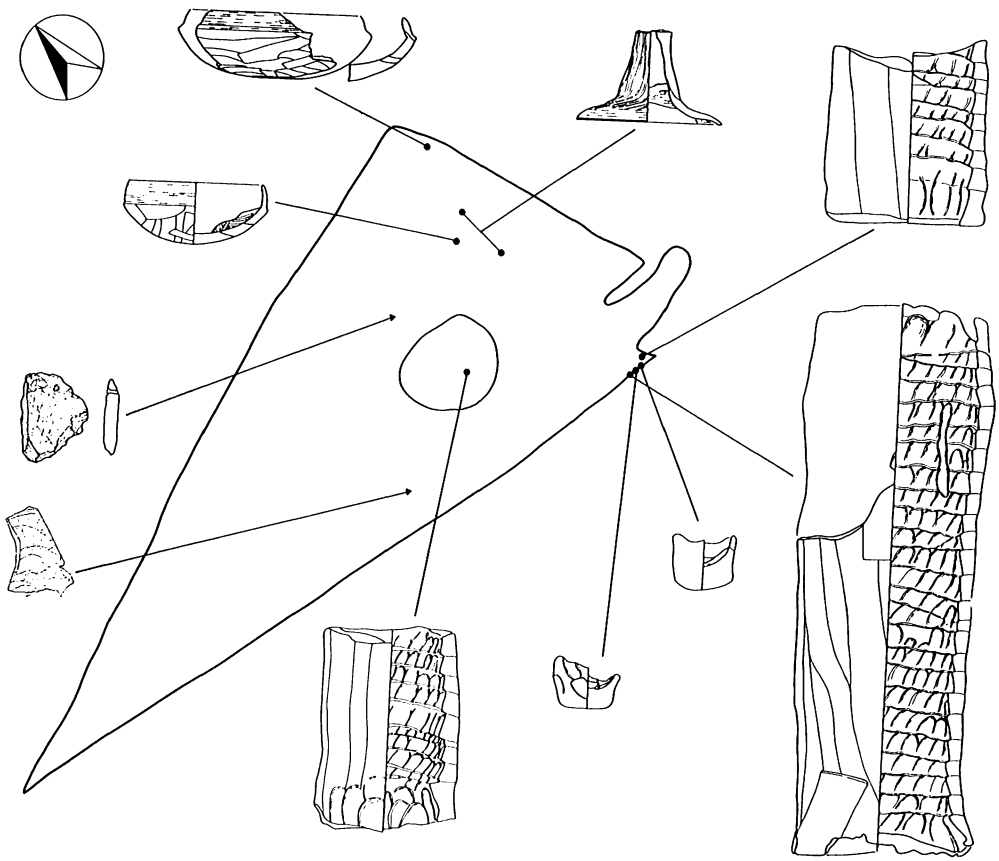
（第30図、第31図）



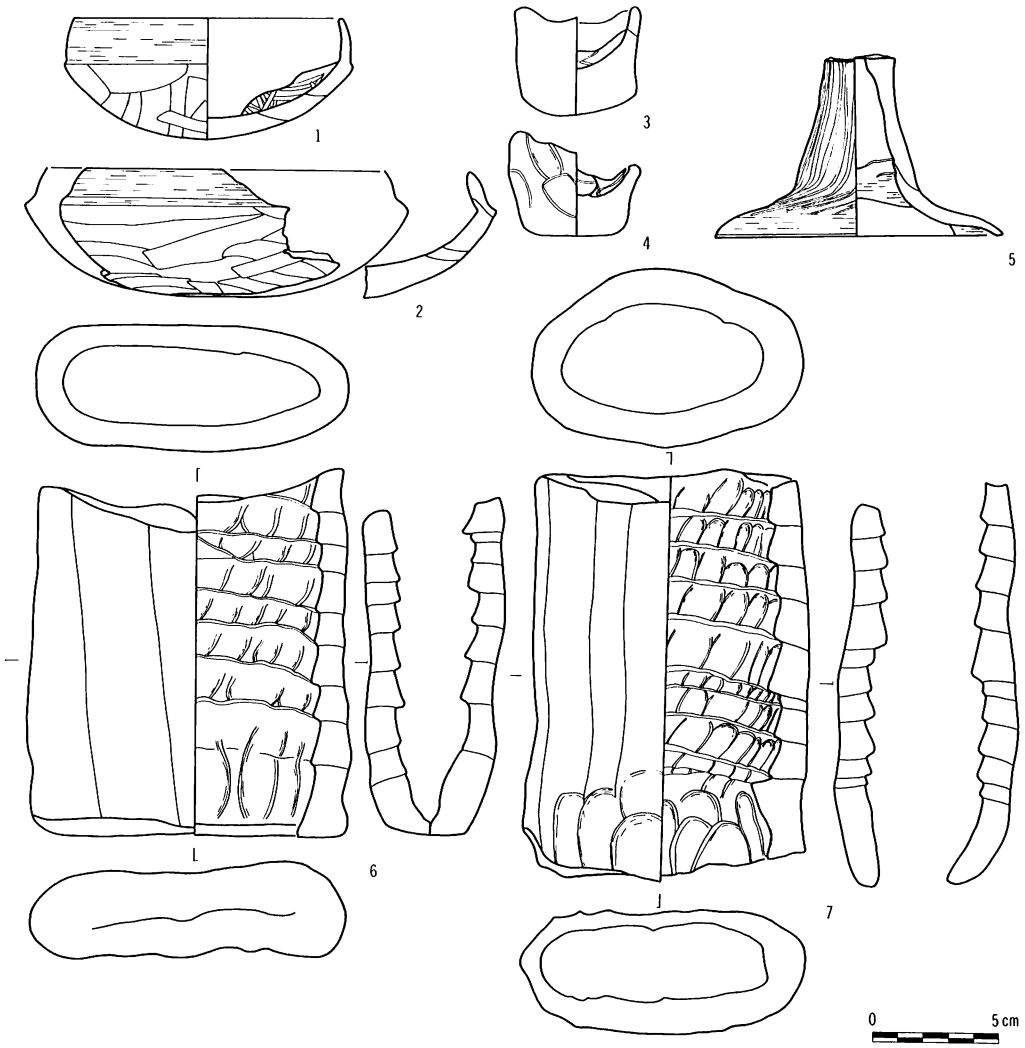


図版12　第５号住居址の発掘

第５号住居址の掘り込みは深く、住居址覆土上層には浅間Ｂ軽石の堆積が認められた。遺物の出土状態はすべて床面直上からの出土である。遺物の中では滑石製の玉の未製品、手捏ねの土器、さらには第２号住居址ＦＡ上層から出土した、断面形が上下につぶれた円形の筒形土製品が確認できた。これらは特筆されよう。



第32図　第５号住居址の遺物分布



第33図　第５号住居址出土の遺物

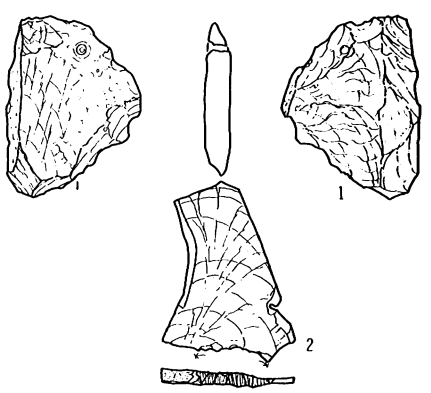
第５号住居址からは、坏２（第33図１、２）、高坏の脚（第33図５）、手捏ね土器２（第33図3、4）、筒形土製品３（第33図６、７、第34図８）、滑石製の玉の未製品２（第35図）が確認された。土師器類については完形品は皆無である。

坏は口縁部と胴部との境が凸帯状に張り出す稜を有するものであり、口縁部はやや内傾するものである。（第33図１、２）、高坏の脚（第33図５）は、小形の脚であり、脚柱部下部にふくらみをもつ。裾部はやや内湾する。手捏ね土器（第33図３、４）はいずれも指頭の圧痕が明瞭なものである。筒形土製品は３点が出土した。（第33図６、７、第34図８）いずれも外面は荒い縦方向のヘラケズリ、内面には輪積痕と指頭の圧痕を明瞭に残している。断面形は、円を上下におしつぶ

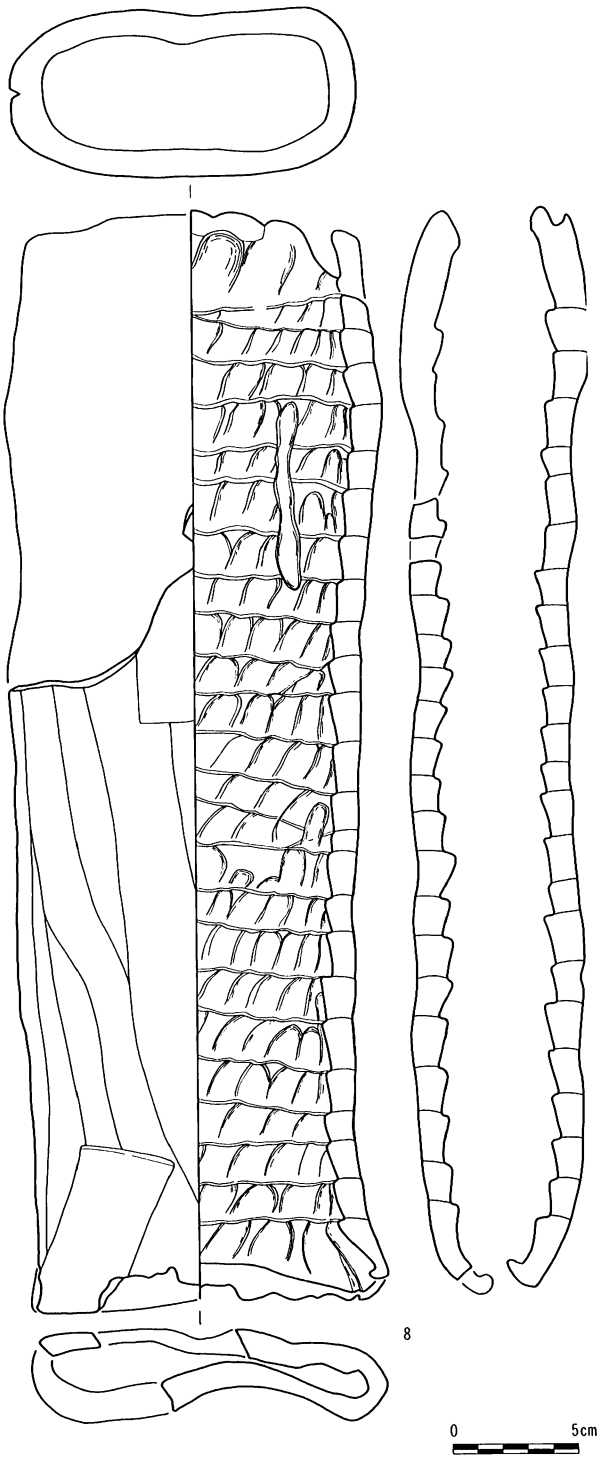
したような形を呈する。これらの内一点についてはほぼ完形に復することができた。（第34図）これによると一端は押しつぶしながらしぼったような形になっているが、完全にはおしつぶされない。他の一端は、しぼってはいるが、不完全におわっている。他の２点については、一端は残されているが、他の一端は接合帯よりきれいに割れている。（第33図67）。

滑石製の玉の未製品は荒く割りとられた剝片に片面より穿孔をうけているもの（第35図１）と板状に剝がされた剝片の一辺に加工痕がみとめられるもの（第35図２）とがある。

以上遺物は、ほとんど単体で出土しており、接合関係をもたない。これらの内、特に土製品がカマド周辺に集中して出土しているということは、この土製品の機能的な面を考えるに何らかの示唆を与えているように思われる。（第32図）

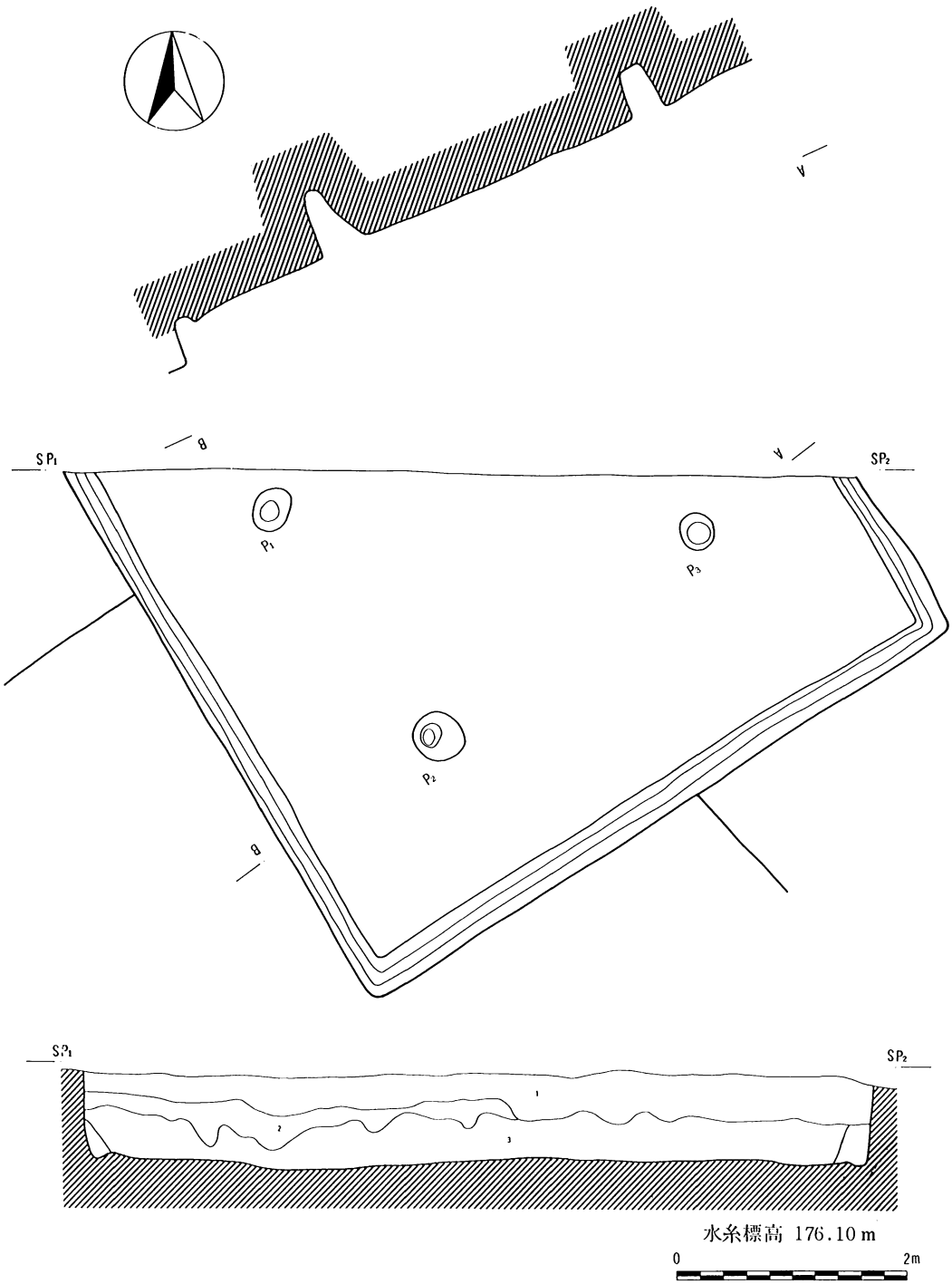


第35図　第５号住居址出土の石製品



第34図　第５号住居址出土の筒形土製品

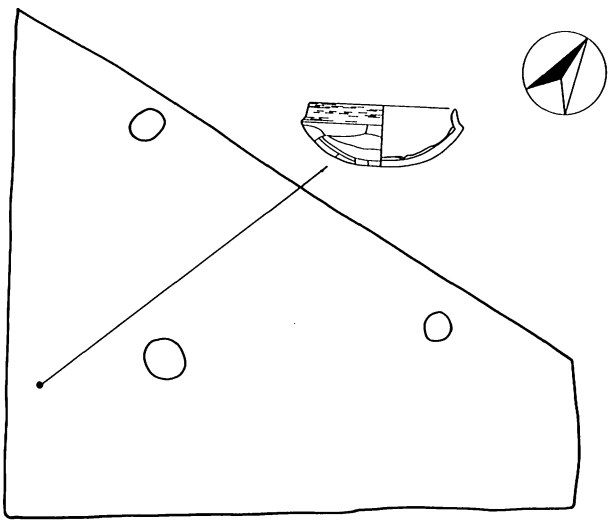
6） **第6号住居址**



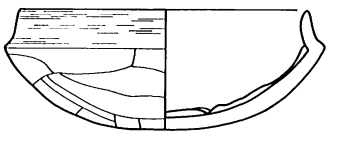
第36図　第6号住居址 実測図

項　　目		項　　目	最長径 cm	最短径 cm	深　さ cm
主　軸　方　向		主柱穴 P_1	38	30	41
		〃 P_2	46	46	56
東西方向の辺の長さ cm	600	〃 P_3	31	27	42
		〃 P_4			
南北方向の辺の長さ cm		貯蔵穴 P_5			
		P_6			
壁　高 cm	36	P_7			
		壁周溝	30	18	8

第7表　第6号住居址計測表



第37図　第6号住居址の遺物分布



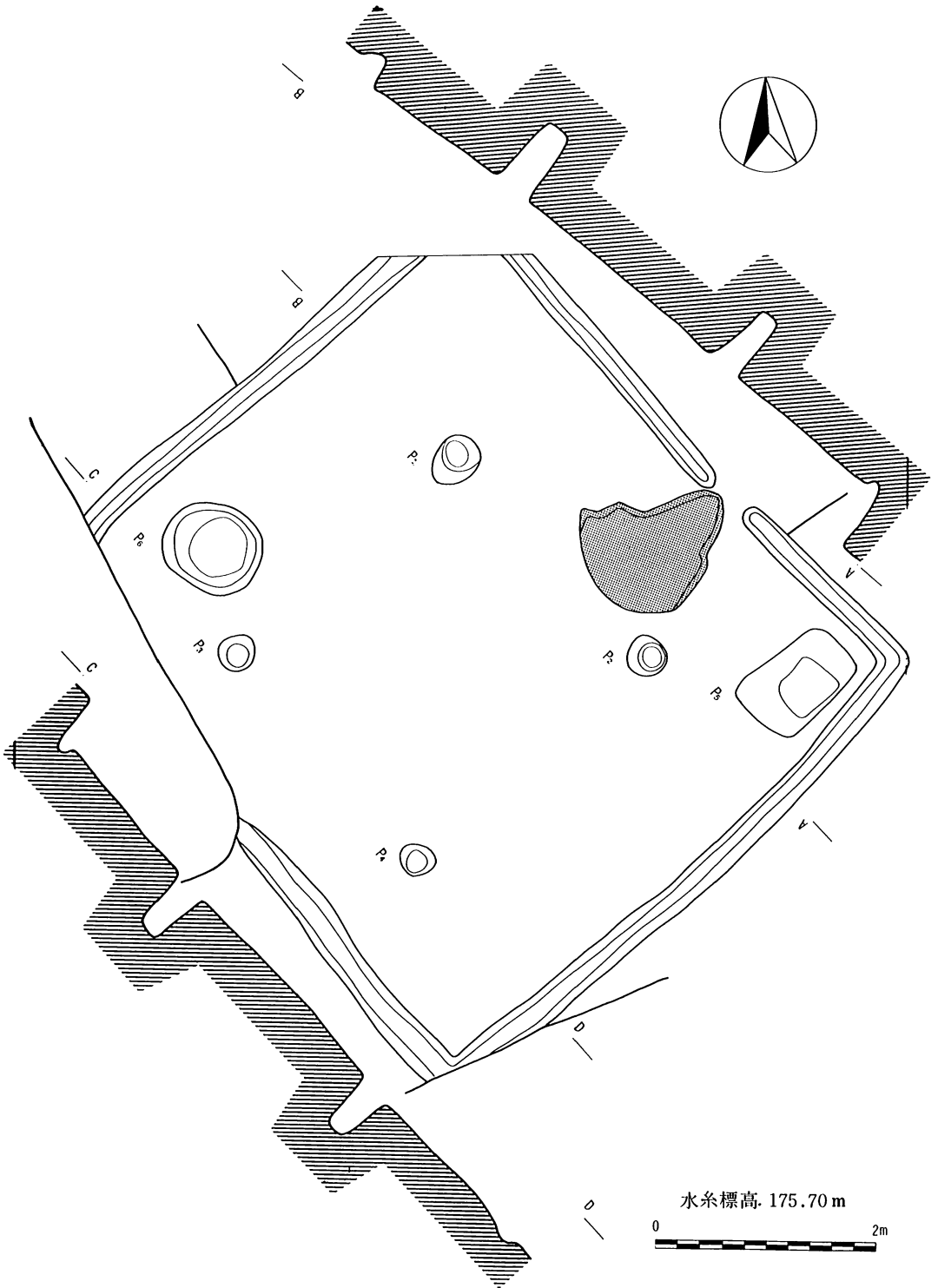
1

第38図　第6号住居址出土の土師器

第6号住居址は、第7号住居址の一部を切って構築されている。その為、第7号住居址のカマドはほとんど壊されている。この住居址の一部は現在、宅地の下となっており調査は不可能であった。この住居址にともなう施設として、主柱穴3と壁周溝を確認した。出土遺物は少なく完形に復元できるものは一点の坏のみであった。

坏は口縁部と胴部との境に凸帯状に稜を張り出すものであり、口縁部はやや内傾ぎみとなるものである。（第38図）

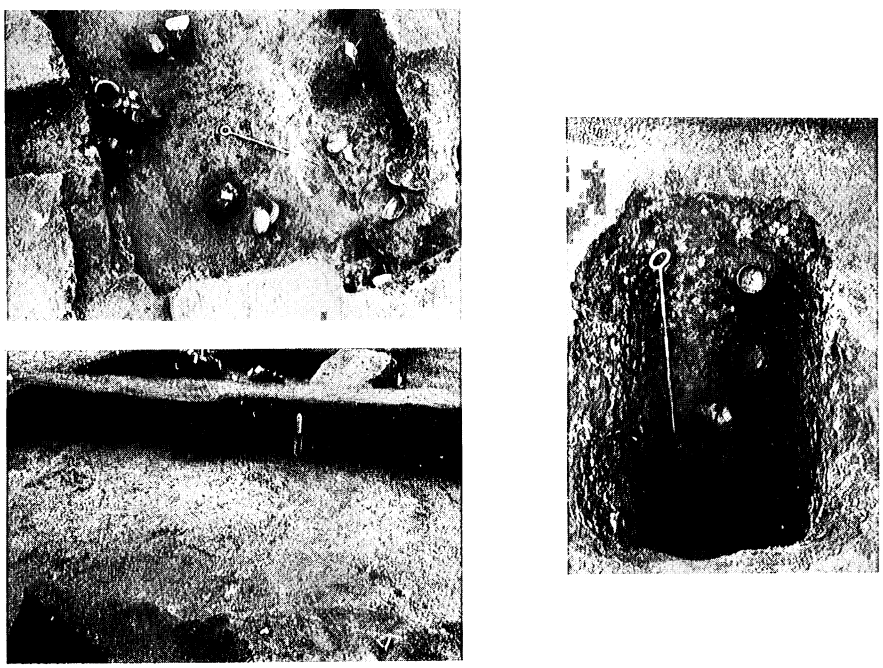
7） **第7号住居址**



第39図　第7号住居址実測図

項　　目		項　　目	最長径 cm	最短径 cm	深　さ cm
主　軸　方　向	N－53°－E	主柱穴 P_1	49	37	76
		〃 P_2	37	35	62
東西方向の辺の長さ cm	590	〃 P_3	35	32	56
		〃 P_4	33	28	53
南北方向の辺の長さ cm	620	貯蔵穴 P_5	102	63	134
		P_6	90	78	34
壁　高 cm	54	P_7			
		壁周溝	34	15	10

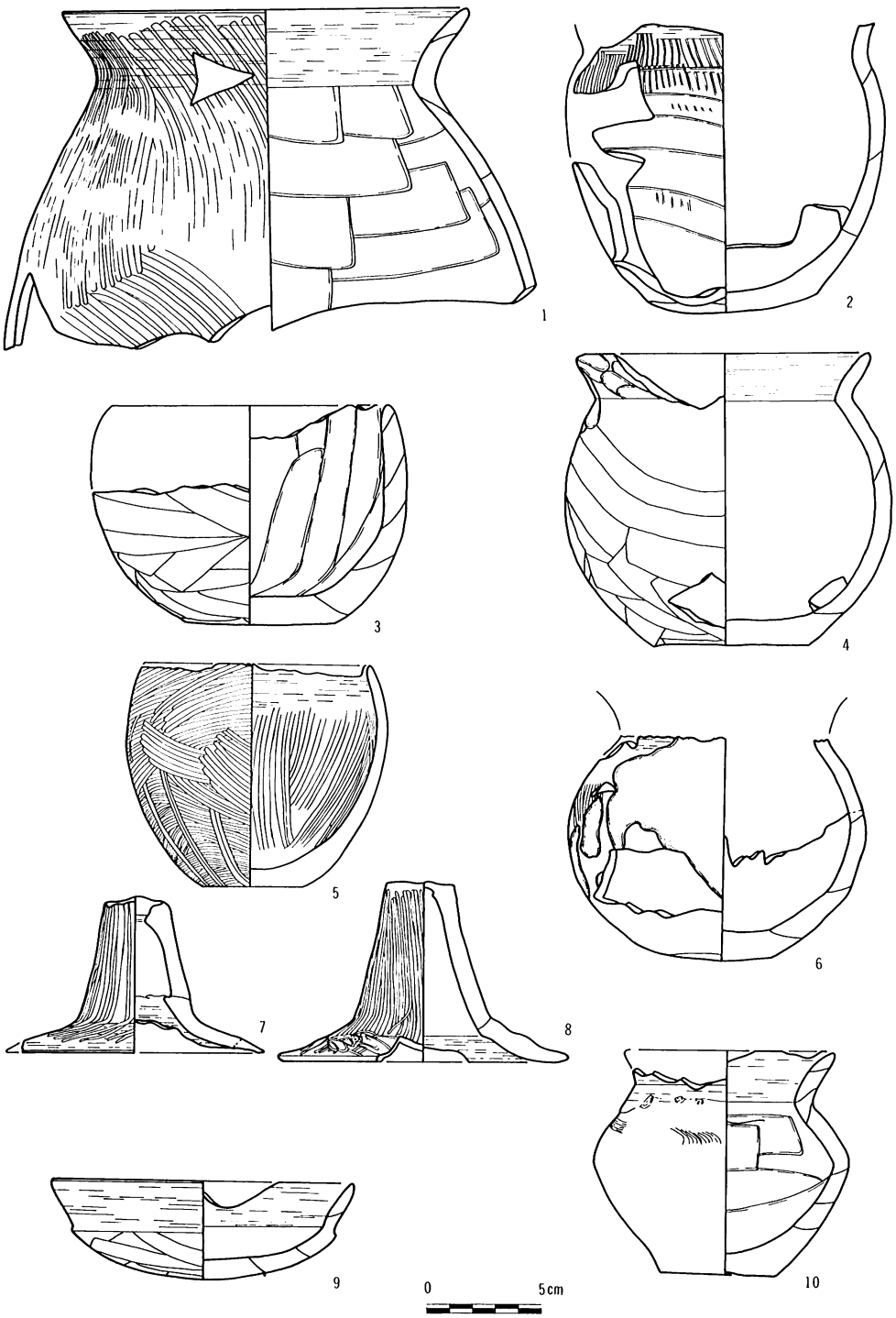
第8表　第7号住居址計測表



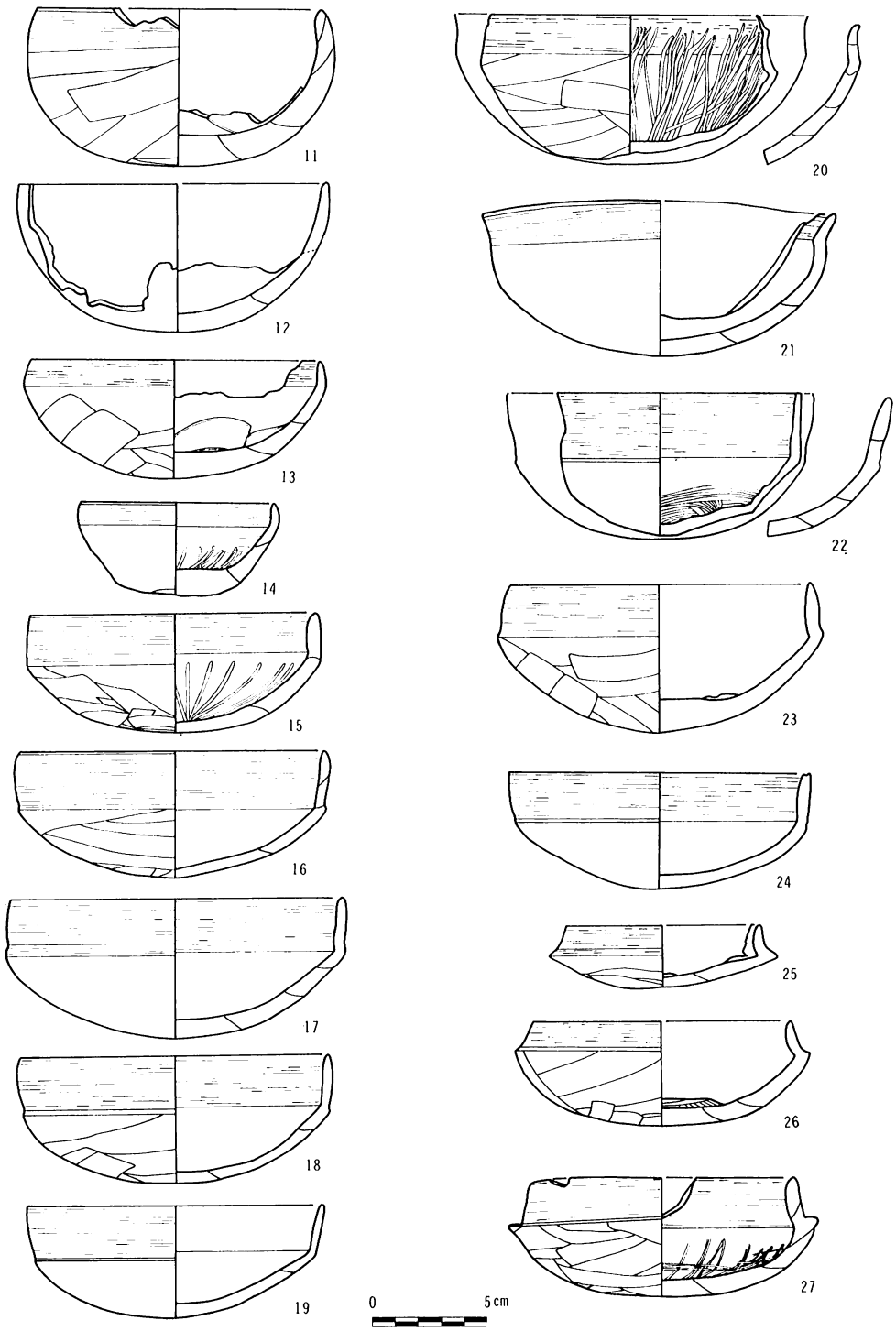
図版13　第7号住居址の発掘

第7号住居址は、第5号、第6号、第8号の各住居址と切り合い関係をもっている。すなわち第7号住居址はこれら3軒の住居址に住居址の一部を切られている。

第7号住居址は壁周溝が全周し、4本の主柱穴と、住居址北西隅に円形のピットを有している。又、東壁中央にはロームブロックを袖としたカマドが存在していたらしいが、第6号住居址によって破壊されている。カマド南には第2号住居址と共通する平面形隅丸方形の非常に深い貯蔵穴を有している。（図版13－3）又、本住居址の覆土中にはFA層を確認することができた。（図版13－2）



第41図　第７号住居址出土の土師器(1)



第42図　第７号住居址出土の土師器(2)

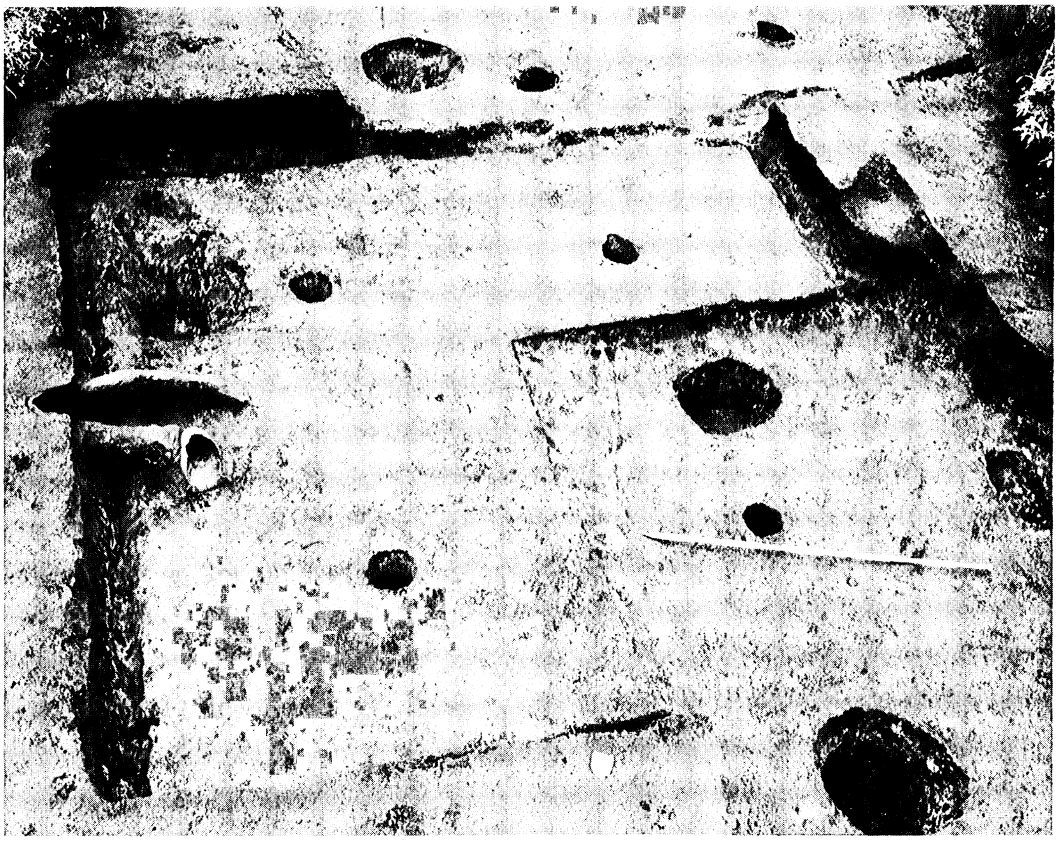
出土遺物（第41図、第42図）

第７号住居址からは甕３（第41図１、２、４）、小形壺１（第41図10）、坩１（第41図６）、鉢２（第41図３、５）、高坏２（第41図７、８）、坏18（第41図９、第42図11～27）が確認できた。内、坏１（第41図９）と小形壺（第41図10）は出土層位、出土地点とも不明なものである。

甕はやや大形の甕（第41図１）と小形甕（第41図２、４）、とに２分できる。甕（第41図１）は上半分のみが貯蔵穴内より確認された。口縁部はくの字に外反するものであり、外面には荒いハケ目痕が残されている。小形甕（第41図２、４）は、胴部が短かくやや張るものでずんぐりした感じをうける。外面にハケ目を残し粗製のもの（第41図２）とナデによって調整されているもの（第41図４）とに２分できる。小形壺（第41図10）は口縁部は外反し胴部は中央よりやや上に最大径を有し、そろばん球状になるものである。器表の荒れが著しい。坩（第41図６）は大形のもので口縁部は欠損している。胴部の器表は非常に荒れている。鉢（第41図３、５）はちょうど小形甕の口縁部を切り取ったような形を呈している。口縁部は底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がるものであり、内外面ともにヘラミガキの著しいもの（第41図５）と、厚手でぼってりしたもの（第41図３）とに２分できる。高坏（第41図７、８）はいずれも脚部のみであり、比較的小形のものである。調整はヘラミガキが著しい。坏（第41図９、第42図11～29）は、18点が確認されているが第41図９を除いて他はすべて床面密着か貯蔵穴内からの出土資料である。これらの坏は大きく５つに区分できる。それはまず、口縁部が所謂内斜口縁のもの（第42図21）。口縁部に稜を有さず、やや内湾ぎみに立ち上がる椀状のもの（第42図11、12）、口縁部が短かく、やや内傾するもので稜を有するもの。すなわち稜の位置が高いもの（第42図13、14）、胴部と口縁部との境に明瞭に稜を有するもの（第42図15～19、24）。胴部と口縁部との境に稜を有するが、その稜が凸帯状に張り出すもの（第42図25～27）の５者である。これらの坏は、ＦＡ層下の住居址である第２号、第４号住居址の坏と共通するものと、第４号住居址ＦＡ層上の坏と共通するものとの両者を有する組み合わせである。

第７号住居址における遺物の出土状態は、ほとんどの資料が単体で出土しており非常に静的であるといえる。遺物の分布は貯蔵穴内及びその埋め土上面に集中している。

8） **第8号住居址**

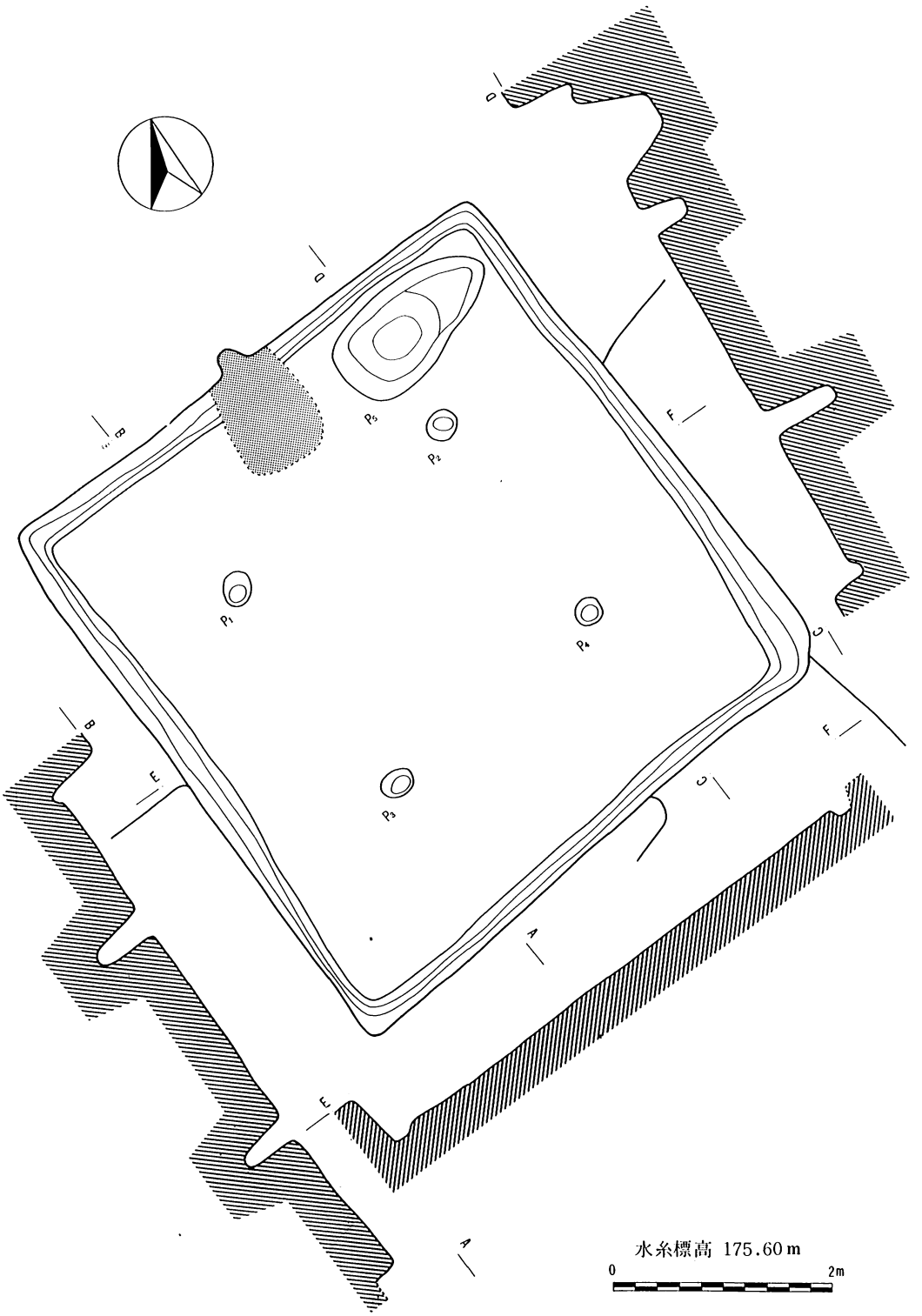


図版14　第8号住居址全景

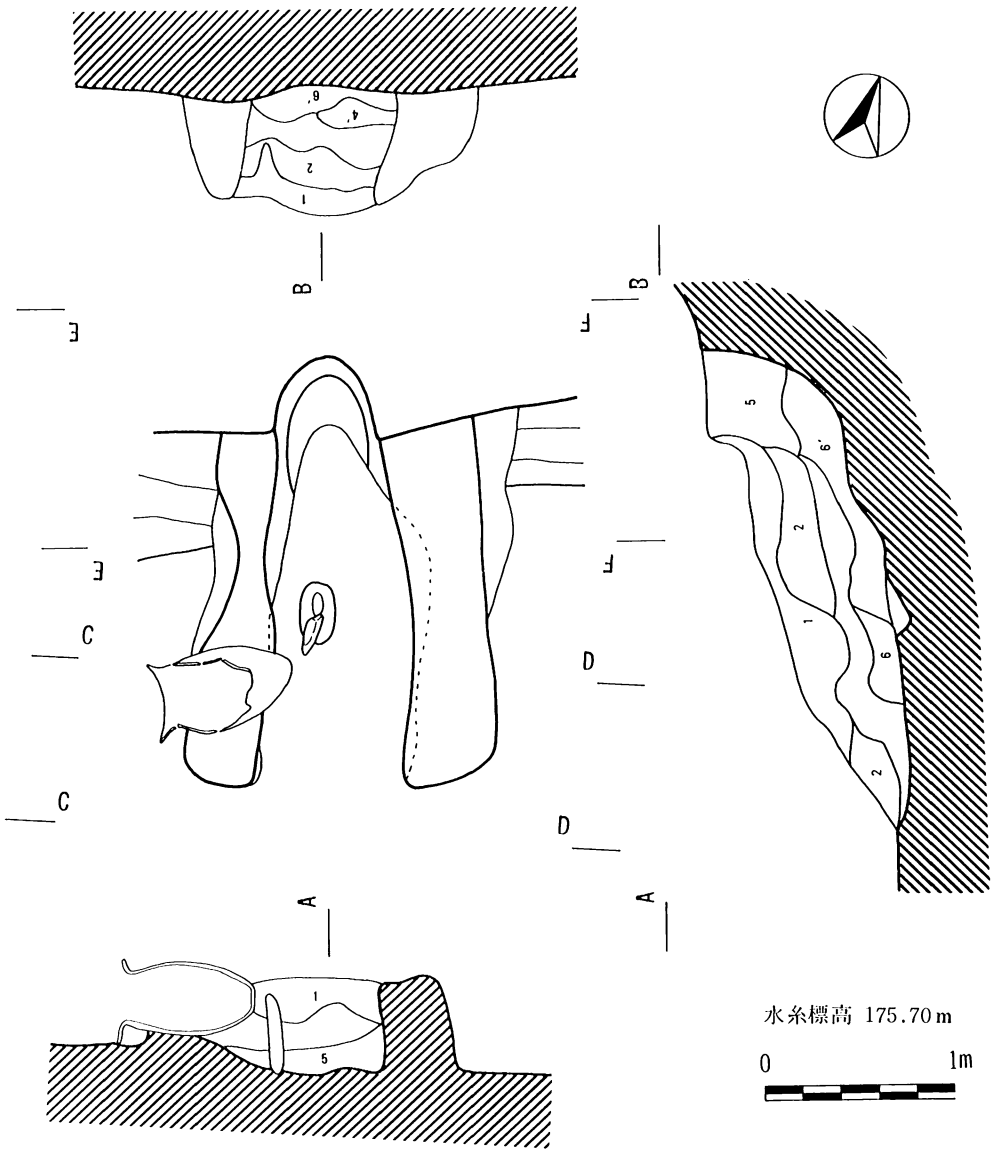
第8号住居址は、発掘区の西端に位置し、第7号住居址の一部を切り、第9号住居址の上に貼り床を施して構築されている。北壁中央に灰白色粘土を袖として用いて構築されたカマドが付設されている。

項　目		項　目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N 19° W	主柱穴 P_1	31	24	55
		〃 P_2	30	13	40
東西方向の辺の長さ cm	540	〃 P_3	31	23	50
		〃 P_4	26	24	67
南北方向の辺の長さ cm	570	貯蔵穴 P_5	164	82	62
		P_6			
壁高 cm	50	P_7			
		壁周溝	40	15	7

第9表　第8号住居址計測表



第43図　第８号住居址実測図

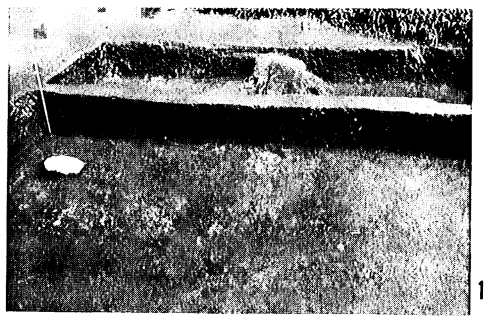


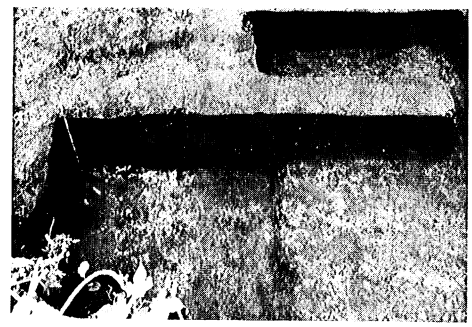
第44図　第８号住居址カマド実測図

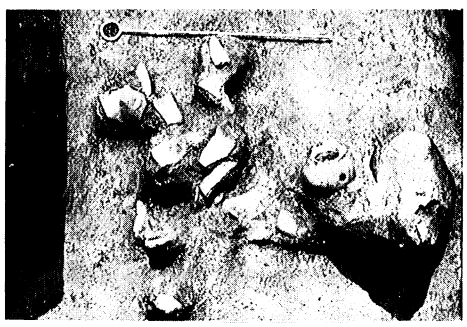
第８号住居址は壁下には壁周溝を全周させ、北壁中央にはカマドを有している。この東側には不整長方形のやや深い貯蔵穴をもうけている。主柱穴は４本が確認できた。

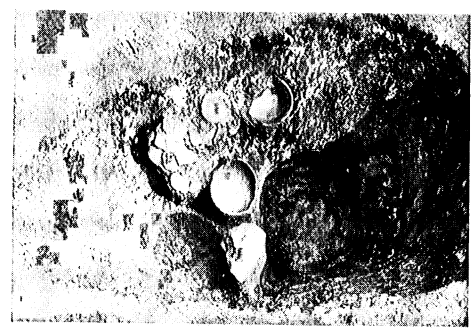
カマドは灰白色粘土を用いて構築されており、袖部は南北に長い。カマド内には石製の支脚を有している。又西側の袖部分には長胴化した甕が横位の状態で出土した。

遺物の出土状態はすべてが床面密着の状態で出土し、その分布はカマド周辺、貯蔵穴、南壁よりにかたよる傾向がある。遺物の出土状態はやはり単体で出土したものが多い。

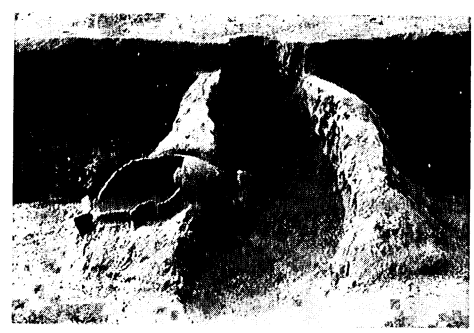

1


2


3


4

5


6

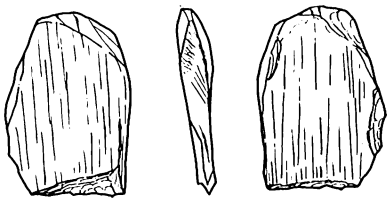
図版15　第８号住居址の発掘

１）第８号住居址の土層堆積状態。（南より）

２）第８号住居址と第９号住居址との切り合い関係を示したセクション（南より）。図版右が第８号住、左が第９号住である。第８号は第９号住の上に貼床を施している。

３）４）、５）は、住居址中央、貯蔵穴内、カマド周辺の遺物出土状態である。

６）カマドの掘り上がり状態。長胴化した甕とそれを支えるようにカマド中央部に石製の支脚がみとめられる。カマド煙道部は住居北壁よりわずかに出る。

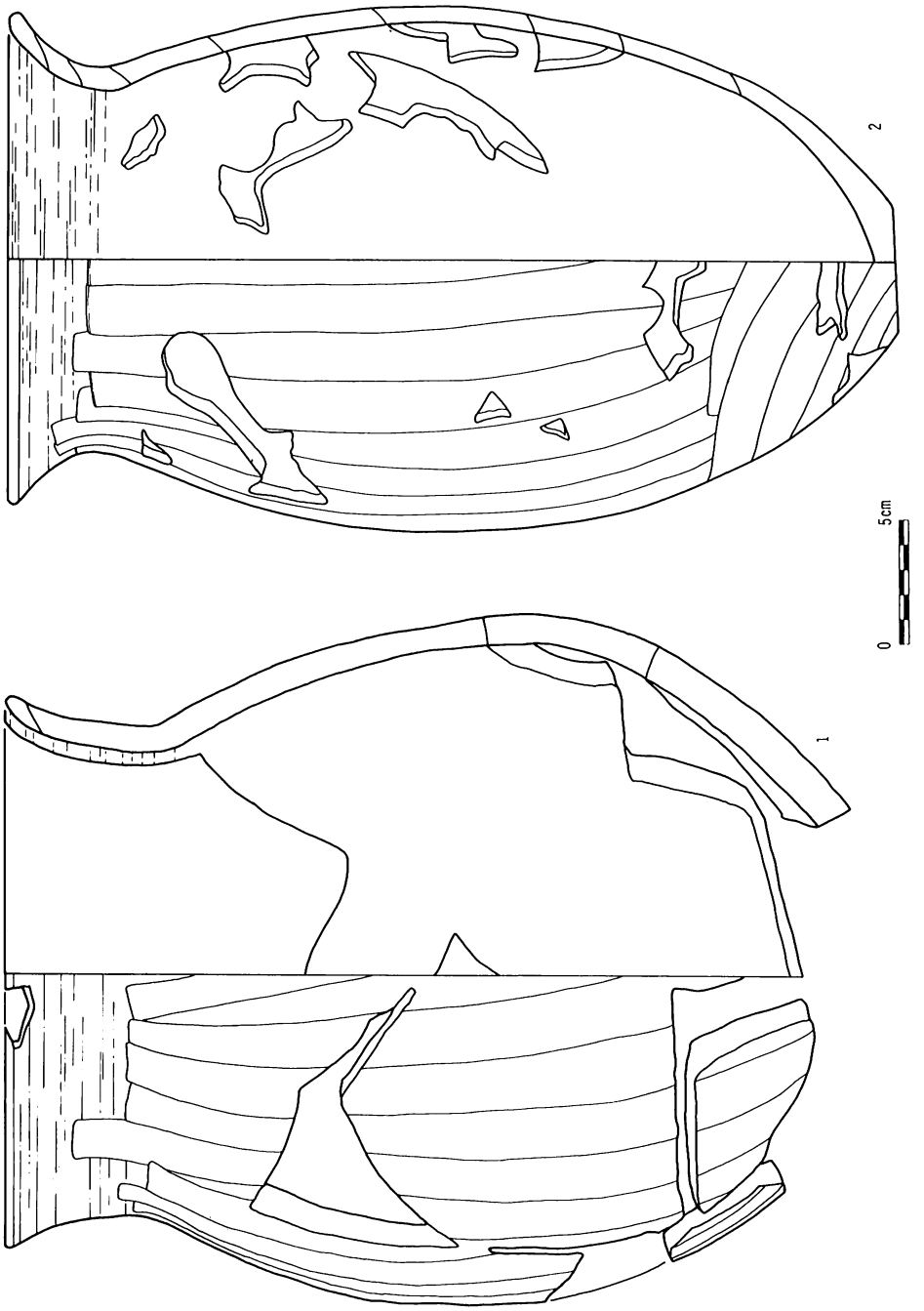


第45図　第８号住居址出土の砥石

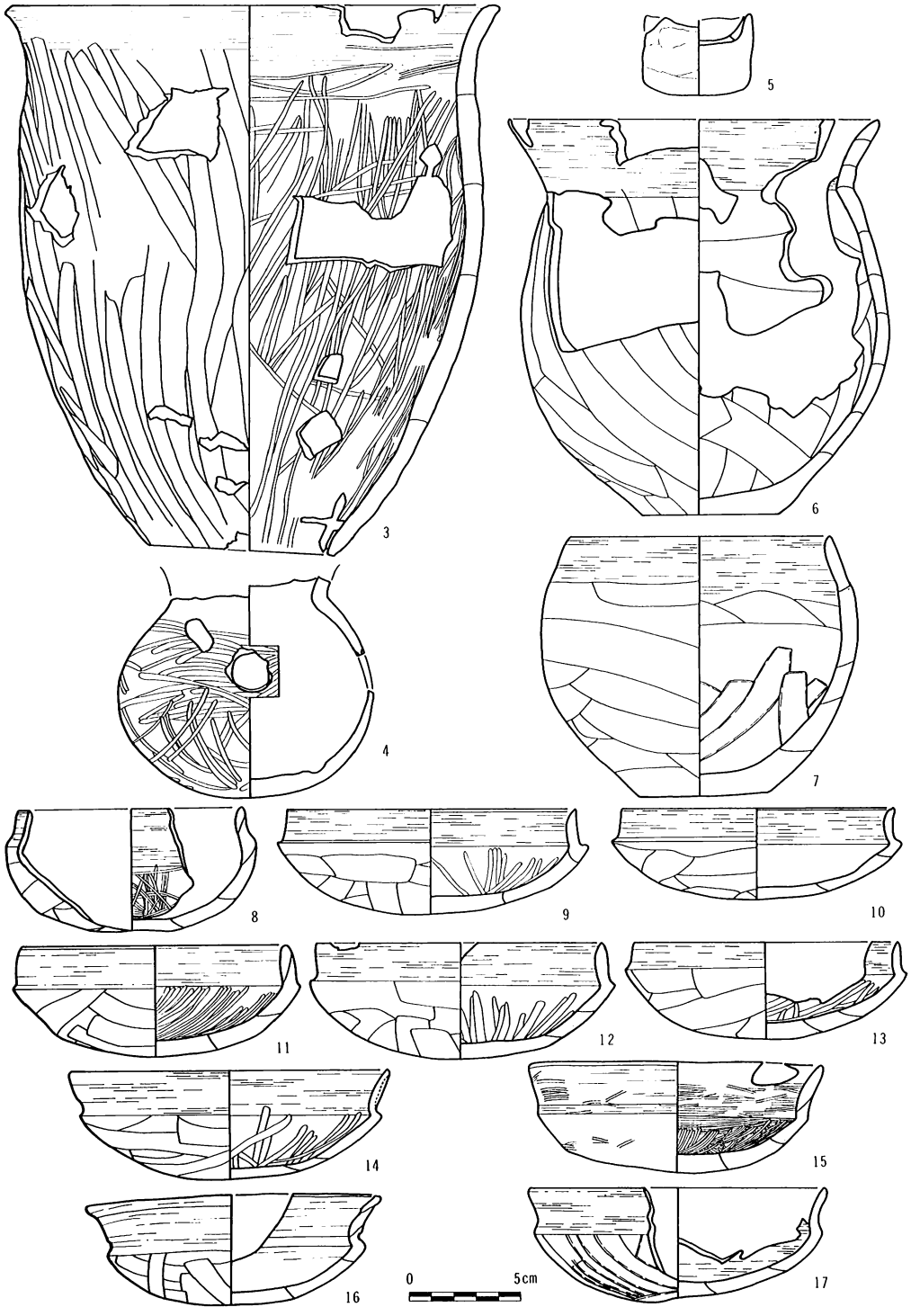
出土遺物（第46図～第48図）

第８号住居址出土のおもな遺物は、甕３（第47図１、２、第48図６）、甑１（第48図３）、鉢１（第48図７）、瑞１（第48図４）、坏10（第48図8～17）、手捏ね土器（第48図５）1、砥石１（第46図）である。

甕（第47図１、２、第48図６）は大形の甕（第47図１、２）、と小形甕（第48図６）とに２分できる。大形甕（第47図１、２）は、非常に大形のものであり、長胴化している。口縁部はゆるやかに外反する。いずれも調整技法として縦方向のヘラケズリが卓越している。小形甕（第48図６）は口縁部はくの字に外反し、胴部中央より下位に最大径をもつものである。やはりヘラリズリが目立つ。甑（第48図３）は、口縁部はゆるやかに外反し、胴部は中央に最大位を有している。外面の調整は縦方向のヘラケズリ、内面は細かな縦方向からのヘラミガキが施されている。鉢（第48図７）は器壁が厚手であり、底部よりゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁部は横ナデによって胴部との境にわずかに段をつくり区別している。瑞（第48図４）は球形の胴部を有するもので口縁部は欠損している。胴部の孔は焼成前穿孔であるが、後にこの孔をひろげようとした痕跡がみとめられる。外面の調整は横方向のヘラミガキが施されている。坏（第48図８～17）は、いずれも、口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出した稜を有するものであり、稜より口縁部が直に立ち上がるもの（第48図８～13）と稜より口縁部が外反するもの（第48図14～17）とに２分できる。手捏ね土器（第48図５）は第５号住居址出土の手捏ね土器（第33図３、４）と共通するものであり、指頭の圧痕が明瞭である。砥石（第46図）は泥岩製の小形のものであり、断面くさび状を呈する。表裏とも作業面は作られている。

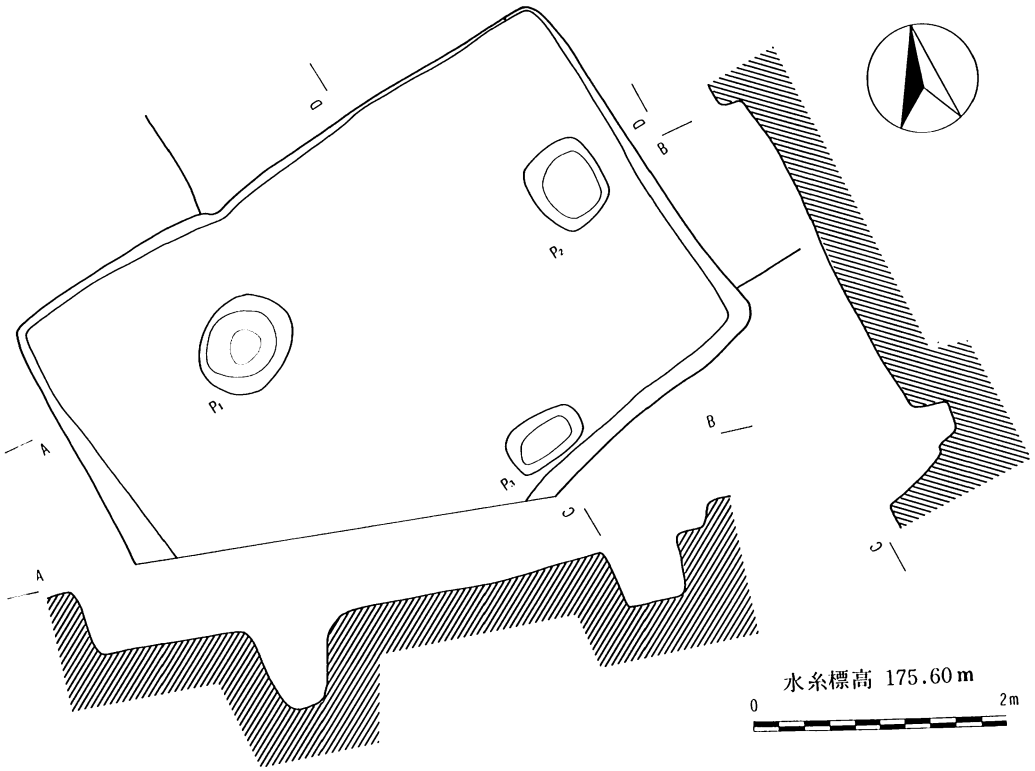


第47図　第８号住居址出土の土師器(1)



第48図　第８号住居址出土の土師器(2)

9） **第9号住居址**



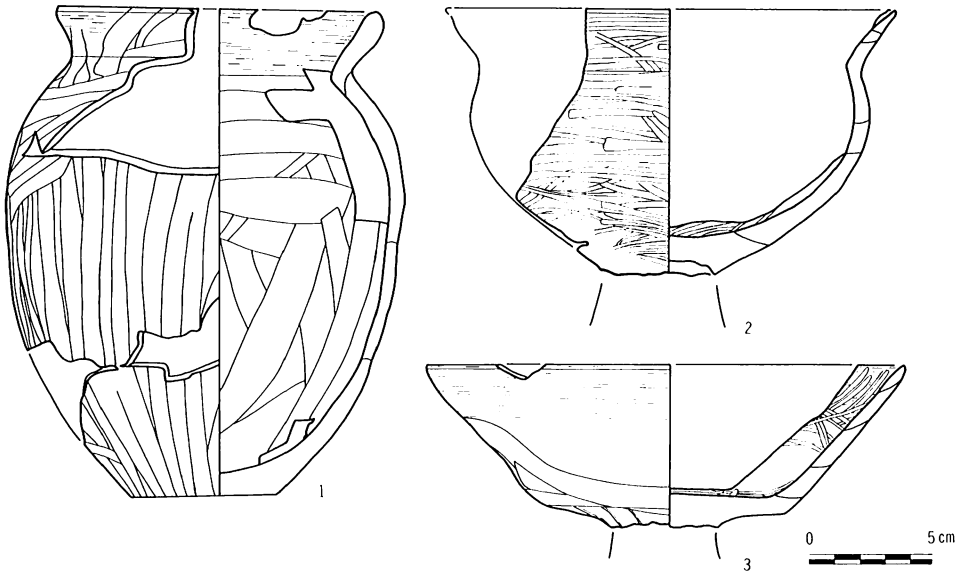
第49図　第9号住居址実測図

第9号住居址は発掘区の西端に位置し、第8号住居址によって一部を壊されている。第9号住居址は平面形は長方形を呈しており、比較的小形の住居址である。おもな施設としては、3本の主柱穴 の他は炉址もカマドも確認されなかった。

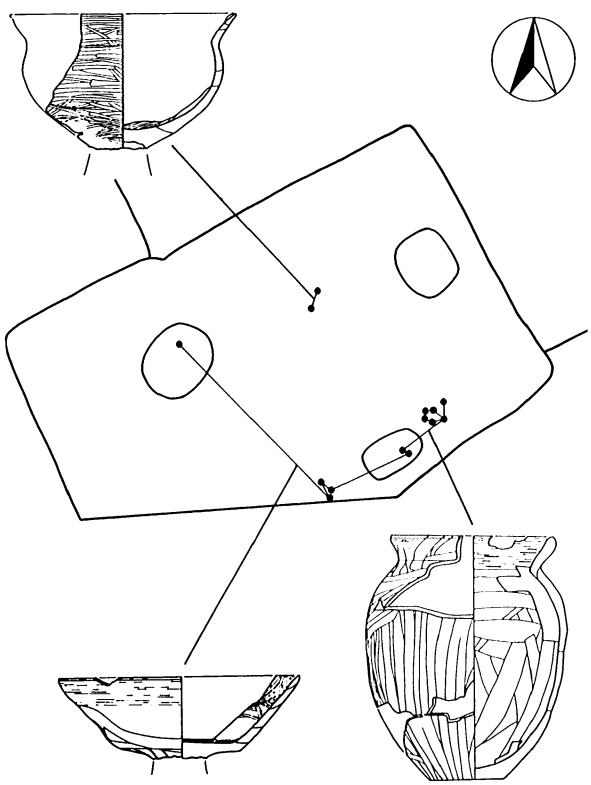
住居址南壁の土層断面にはＦＡ層を覆土上層に把握することができた。

項　目		項　目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N－22°－E	主柱穴 P_1	82	67	70
		〃 P_2	66	58	48
東西方向の辺の長さ cm	480	〃 P_3	64	38	23
		〃 P_4			
南北方向の辺の長さ cm	310	貯蔵穴 P_5			
		P_6			
壁高 cm	55	P_7			
		壁周溝			

第10表　第9号住居址 計測表



第50図　第９号住居址出土の土師器



第51図　第９号住居址の遺物分布

出土遺物（第50図）

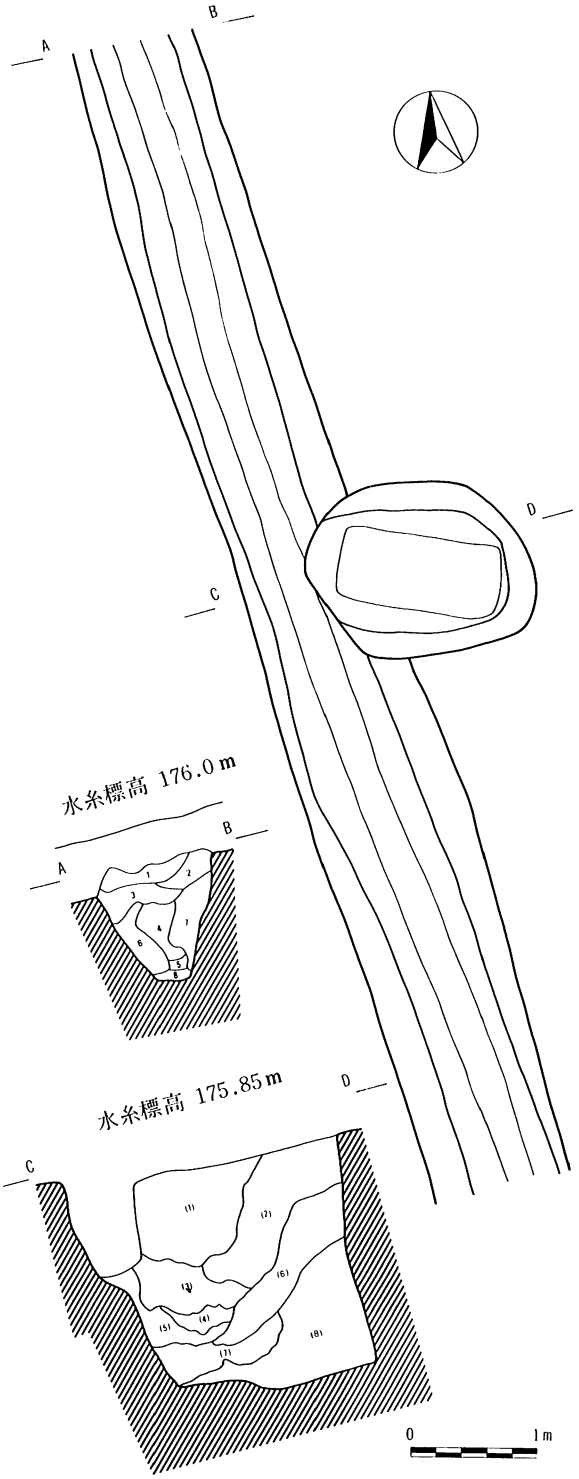
第９号住居址出土のおもな遺物は小形甕（第50図１）脚付の鉢（第50図２）、高坏（第50図３）である。この内、脚付の鉢と高坏は脚部を欠失している。

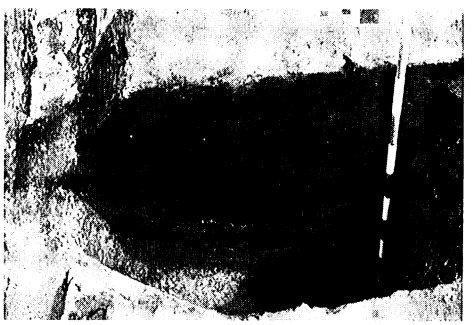
小形甕（第50図１）は口唇部が肥厚し、口縁部は頸部からくの字に短かく外反する。胴部は上半部、肩部に最大径を有する。器壁の厚さは均等に調整されていない。脚付の鉢（第50図２）は内斜口縁を有するものである。脚部は接合部より欠失している。高坏（第50図３）は坏部下部の稜が非常にはっきりしている。

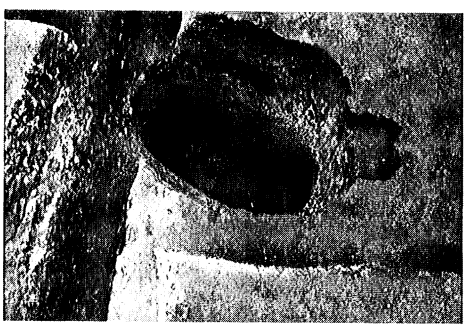
遺物の出土状態は主柱穴内出土の遺物同志の接合がみられる。（第51図）

10）その他の遺構と遺物

前田遺跡からは前述の９軒の古墳時代の住居址群の他に１条の溝と２基の土坑を確認した。

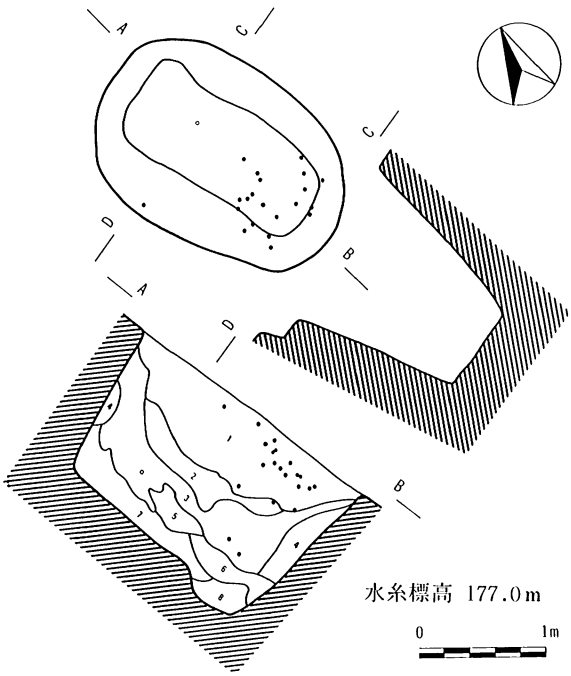




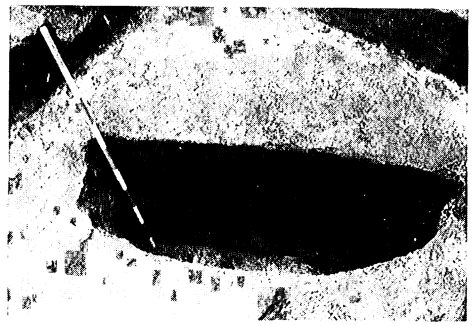


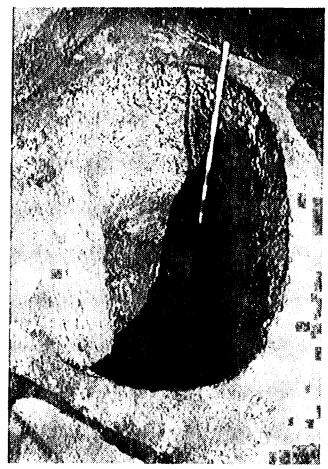
図版16　１号溝と１号土坑

第52図　１号溝と１号土坑実測図

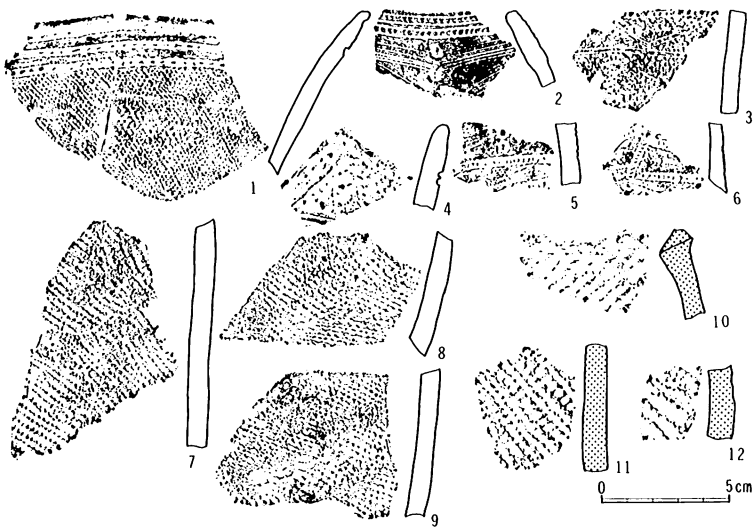


第53図　2号土坑実測図





図版17　2号土坑の発掘



第54図　第2号土坑出土の縄文土器

1号溝（第52図）は第3号住居址と第2号住居址との間に確認されたものである。溝の走向はN－9°－Wを示す。上巾110cm、下巾30cmを計る。溝の断面形は薬研に近い。出土遺物はまったく発見できなかった。又覆土中には火山灰も確認できなかった。

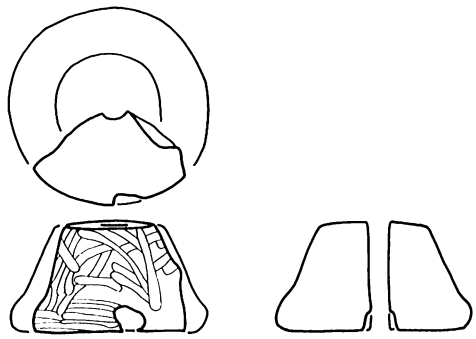
1号土坑はこの1号溝の壁面に確認されたもの

であり、深さ180㎝、長径180㎝、短径120㎝を計り、平面形は長楕円形、底形は隅丸長方形を呈する土坑である。出土遺物は縄文土器と思われる土器の細片が上層中に確認できた。

2号土坑(第53図)は第4号住居址と第6号住居址との間に確認された。深さ140㎝、長径200㎝、短径150㎝を計る。第1号土坑と同様、平面形は長楕円形、底形は隅丸長方形を呈するものである。2号土坑からは第54図に示す縄文土器が確認できた。出土状態は第53図に示す通りであり、かなり上面で確認されている。

この1号土坑と2号土坑は土坑内覆土の状態、平面形などから考えて同時期に属するものと考えられる。一応、2号土坑内の出土遺物などから判断して縄文時代前期後半のものとしておく。

第55図に示したものは、前田遺跡から表採された土製の紡錘車である。全体の4分の1程が残存している。



第55図　前田遺跡表採の紡錘車

Ⅳ　前田遺跡調査の意義と問題点

1）遺構について

本遺跡から今回発見された遺構は、住居址９軒、土坑2基であった。この内、２基の土坑は出土遺物から判断して明らかに古墳時代より以前のものと考えられる。ここでは、この土坑を除く、古墳時代に帰属するものと考えられる住居址についてまとめておきたい。

調査を行った９軒の住居址は、いずれも方形を基本とした竪穴式住居址である。これら９軒の住居址は、それぞれの住居址が有するさまざまの要素から分類が可能である。

第２号住、第４号住、第７号住の各住居址は、平面形は、ほぼ正方形に近く、住居址の主軸方向をほぼ東にもつ。カマドは、東向き、両裾に石を用い、ロームブロックで裾及び天井部を構築している。又、南東隅には、隅丸長方形の深い貯蔵穴を有し、壁周溝を全周させている。さらに、住居址内覆土中に確認されたＦＡ層の堆積状態なども、かなり類似している。以上のことより、これらを一群としてとらえることができよう。――イ群――

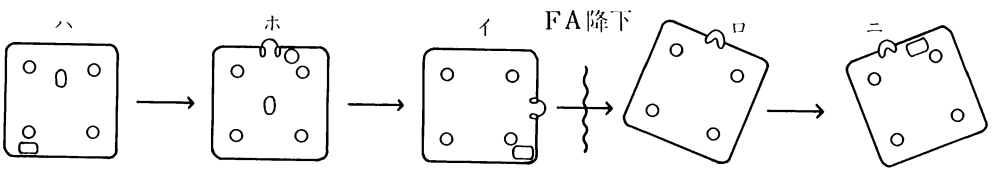
第５号住居址と第６号住居址については、住居址の全掘は行えなかったが、主軸方向あるいは、出土遺物などから一群をもうけられよう。――ロ群――

第３号住居址と第９号住居址は、住居址内にカマドを有しないということにおいて共通する。特に第３号住居址は、住居址中央に地床炉をもつことから、前述のイ・ロ群よりも古い様相をもっているものとして理解したい。ただ、粕川周辺において発見されている所謂、和泉式土器を出土する住居址の貯蔵穴の形態は、円形が一般的である点などを考慮するなら、むしろ、前述の２群に近いと言えるかもしれない。この第３号住居址と第９号住居址をまとめて、ハ群とし、本調査区中最も古い時期の一群として理解したい。――ハ群――

第８号住居址は平面形はほぼ正方形、主軸方向は北西、カマドは北向き、灰白色粘土をカマド裾として使用している。北東隅には、隅丸長方形の浅い貯蔵穴を有している。この住居址はカマドの形態、第５号住、第７号住、第９号住の各住居址の切り合い関係などから判断して、本調査区中最も新しい時期に比定されるものと考えられる。――ニ群――

第１号住居址は平面形は正方形、主軸方向はほぼ北、北壁には、石を芯としたカマドを有し、住居中央部には、地床炉も設けている。カマド脇には、円形の貯蔵穴を有している。又、この住居址で特筆されることとして、入口状の施設を有していることがあげられる。――ホ群――

以上、本遺跡の住居址は、イ～ホの５つに分類することができる。これらの変遷を考えると、ハ→ホ→イ→ロ→ニという変遷が想定できる。この中でイ群とロ群、ニ群との関係は、第７号住居址と第８号住居址との切り合い関係、第７号住居址と第６号、第５号住居址との切り合い関係から、層位的に検証され得るものである。又、ハ群とニ群との関係も、第９号住居址と第８号住



第56図　住居址の変遷

居址との切り合い関係から明らかである。

2）　出土遺物について　（第57図）

ア．土師器

本遺跡からは、多くの土師器が発見されている。しかし、須恵器については認めることがまったくできなかった。この現象は、当地域の時代的な特徴であろうか。ここでは、すでに述べてきた土師器群について総括しておきたい。

本遺跡から確認された土師器は、壺、甕、甑、高坏、坏、埦、鉢、坩、甕の９器種に分類できる。これらのうち、甕、甑、坩は、相対的な大小の違いによって２つに分けることができる。つまり、この遺跡では、土師器群を９器種15種に分けて考えることができる。

これらの器種のうち、坏、埦、甕は、それぞれの一括出土遺物中、最も明瞭にその変化を把えることができる。この坏、埦、甕の変化を一つの指標として、本遺跡出土の土師器をⅠ類からⅢ類までに区分する。

Ⅰ類

坏　胴部は、底部から直線的に開き、口唇部近くにあって直に立ち上がり、口縁部を形成する。そのため、かなり高い位置に稜を有することとなる。（注１）

埦　底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は、わずかに屈曲を有し外反する。所謂「内斜口縁」を有するものである。この埦の器形は、つぎのⅡ類に引き継がれていく。

甕　口縁部は、狭く、頸部から「くの字」に屈曲する。胴部は、球形に張る。この器形は、和泉期の伝統を有するものとして理解できる。

このⅠ類とした土師器群は、所謂、須恵器の模倣坏出現前の段階として把えられる。坏、埦類の平底もこの時期の特徴としてあげられよう。さらに、一括出土資料中には、小形坩等も認めることができる。これらのことより、このⅠ類を前段階の土器群の伝統を強く受け継いだものと理解したい。

Ⅱ類

坏　所謂、須恵器模倣坏がみられる。これも一般に言われるように須恵器の坏蓋の模倣とされるものが、ここではじめて出現する。さらに若干の時間差をもって須恵器の坏身の模倣坏が出現してくる。（注２）

埦　Ⅰ類に近似するが、大形のものなどが現われる。又、これは、坏にも共通する特徴であるが、平底がなくなり、丸底が一般化する。

甕　長胴甕が出現する。しかし、ここでの長胴甕は、器面の調整にハケ目を多用している。又、この長胴甕の他に、Ⅰ類と同様に胴部の張る広口の甕も認められる。

このⅡ類は、所謂、須恵器の模倣坏の出現の段階としてとらえられよう。さらに新たに長胴甕や甑などの新たな器種が加わる段階でもある。

Ⅲ類

坏　須恵器の坏身模倣坏の他に、この坏より型式的に変化したとも考えられる坏がみとめられる。

甕　長胴甕一色となる。調整技法は、ハケ目がまったくなくなり、タテ方向の荒いケズリが顕著となり、器壁も薄くしあげられている。

以上、Ⅰ類からⅢ類は、第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第7号住居址覆土中におけるＦＡ層の状況や、第4号住居址におけるＦＡ層を挟んでの土師器の出土例、さらには、第7号住居址と第8号住居址、第6号住居址、第5号住居址との切り合い関係などの層位的な検討から、時間的な変遷を示しているものと考えられる。すなわち、このⅠ類からⅢ類土器は、前田遺跡における一つの時間的示準としてとらえることができ、そのまま、Ⅰ期～Ⅲ期と言いかえることができる。

イ．土製品

本遺跡からは、非常に特異な形態をもった土製品が4例確認されている。第2号住居址上層から1例、第5号住居址床直より3例が確認されている。（第18図－26、第33図－6、7、第34図－8）

これらの土製品は、いずれもその整形技法、形態的特徴は共通するものがある。それはまず、胎土は、ほとんど精製されず、小礫等を多く含むものであること。土器外面はタテ方向の荒いヘラケズリで調整が行なわれ、内面は、輪積み痕とそれを調整している指頭圧痕を明瞭に残していること。さらに形態的な特徴として平面形は長方形、断面は上下につぶれた楕円形を呈することなどである。

これらの土製品については、現在まで県内での出土例は、他に確認されていない。県外でも類例をみないが、あえてあげるとすれば、八王子中田遺跡で円筒形土製品とされたものがあげられようか。ただ、中田例は、カマドの煙道として用いられているとのことであり、断面形も円形に近く、本遺跡例が、上下端部を押しつぶしているのに対して、あくまでも、円筒形の土管状のものであるという点において大きく異なっている。

さて、この土製品の用途を考えるには、その出土位置と土器表面に残されたススの付着状態に

注目したい。第５号住居址からは、３例が確認されているが、この住居址のカマドは、かなり崩壊した状態が認められ、この周辺から２例が、確認されている。さらに、その土製品を観察すると、片面に斜め方向のススの付着が認められる。（第33図－6、7）　第34図－８には、片面全面にススの付着が認められた。以上のことから、これらの土製品は、カマドの焚き口部分を構成したものではないかと考えられる。この土製品の出現は、土製支脚等の出現とも期を一にして、カマドの形態的整備の一段階の指標としてとらえられないだろうか。以上、これらの土製品については、類例をまって言及したい。

３）まとめ

今回の報告では、確認された住居址をそれぞれの特徴から５つの群に分け、又、その住居址からそれぞれ出土した土師器群について３細分を行った。これをまとめたものが、第57図である。これによると、本発掘区では、３回の住居址群の推移が予想できる。

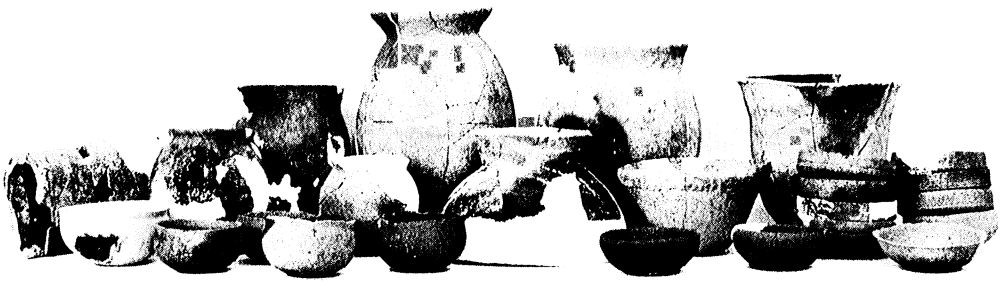
今回の調査は、道路敷という狭い範囲に限られ、集落に１筋のトレンチを入れたに過ぎない。この地域に生活していた人々の生活をより鮮明にするには、生産域、墓域等を含めた集落の構造的な理解が必要であり、このような視点での今後の発掘調査や周辺地域の踏査をさらに進めたいと思う。

注１）　この坏は、柏川地域では、多くみられるものである。最近の調査例では、この坏を含むセットに須恵器模倣の把手付きの大形甑が共伴した例がある。

注２）　須恵器坏蓋、坏身それぞれの模倣坏といわれるものについては、前者が、後者に先んじて出現すると言われている。これは、本遺跡中、第４号住居址におけるＦＡ層を挟んでの上層からの坏身模倣坏の出土、下層床直からの坏蓋模倣坏の出土という出土例も、証明しているように思われるが、第７号住居址の出土例からは、ＦＡ層下の住居床面直上からの両者の共存がとらえられた。このことから、この坏蓋、坏身の模倣坏の入り方については、それほど時間的な隔りがないものと考えたい。

図　　版

1 住



2 住

3 住

4 住

図版18 住居址出土の土師器(1)

5 住　　6 住

7 住

8 住

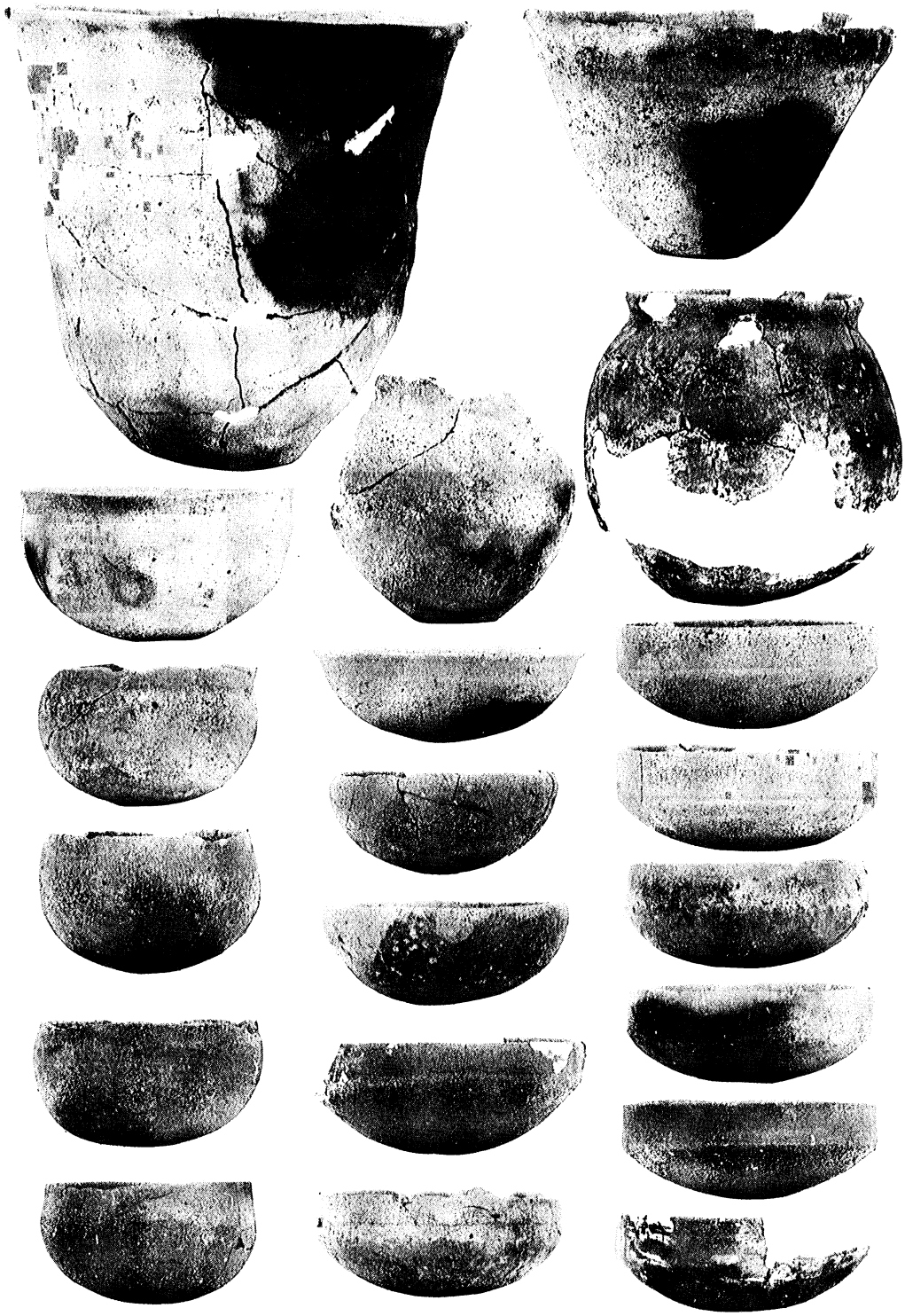
9 住

図版19　住居址出土の土師器(2)

図版20　第１号住居址出土の土師器

図版21　第１号住居址出土の土師器

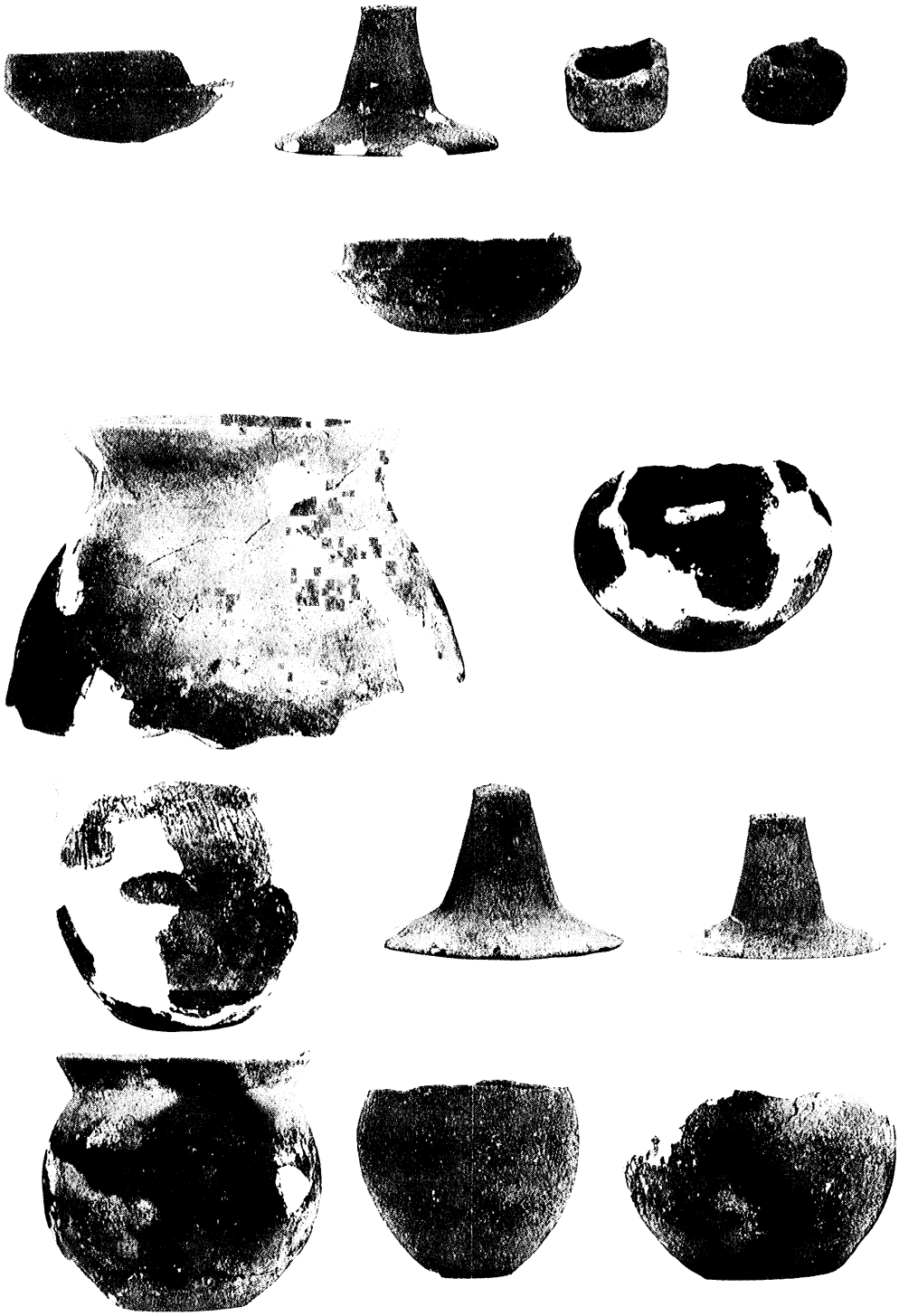
図版22　第２号住居址出土の土師器



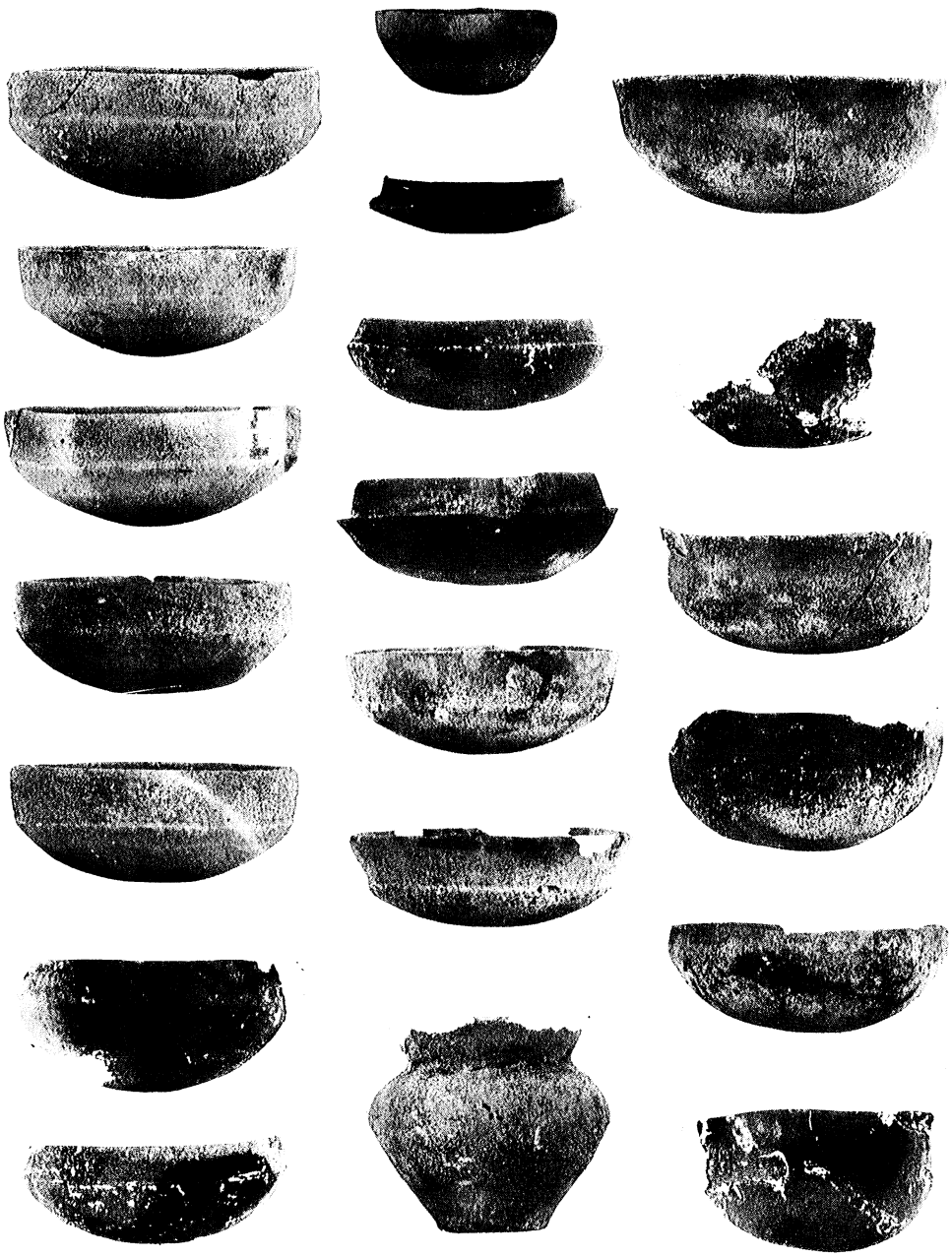
図版23　第２号住居址出土の土師器

図版24　第３号住居址、第４号住居址出土の土師器

図版25　第４号住居址出土の土師器

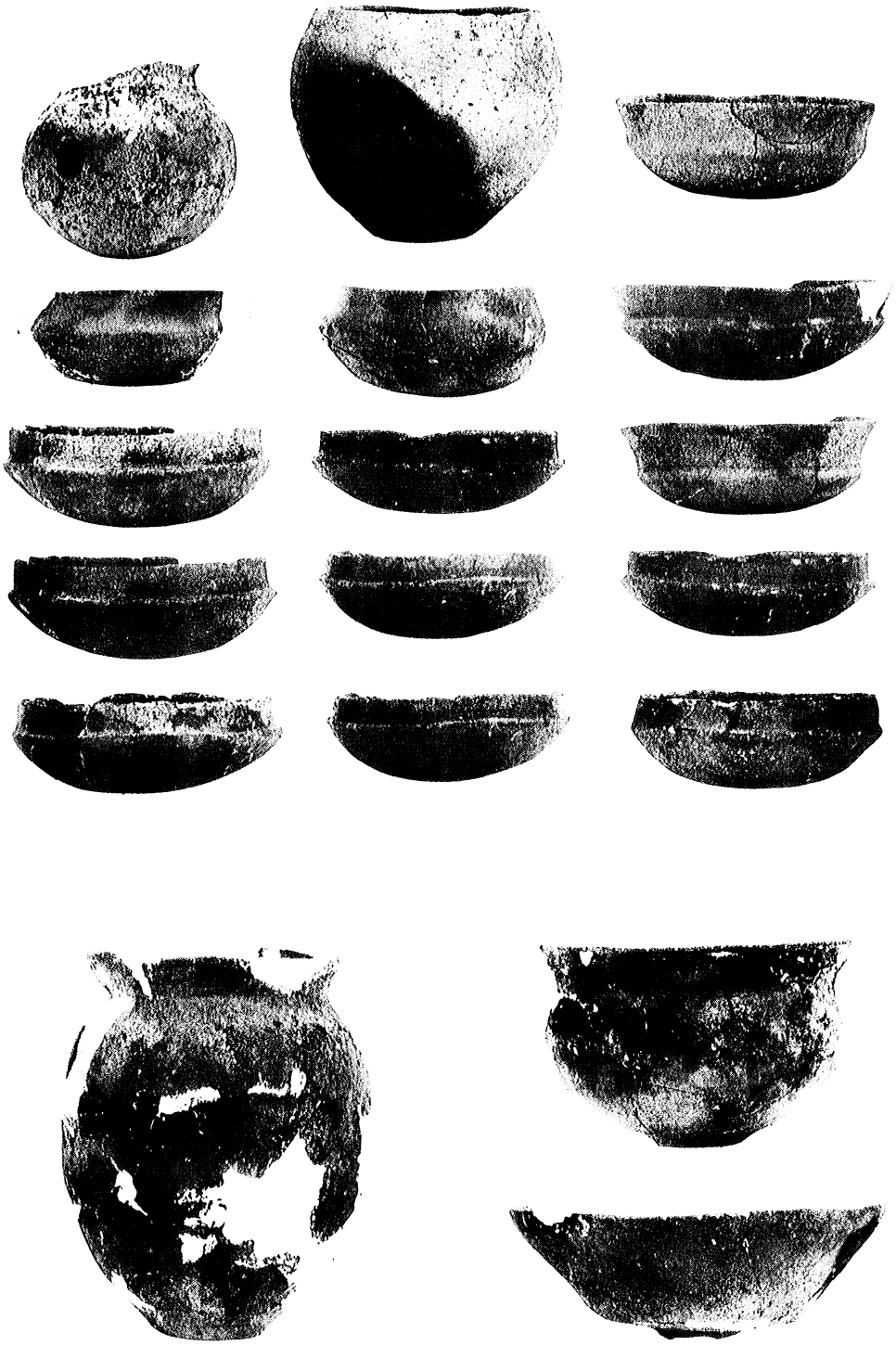


図版26　第５号住居址、第６号住居址、第７号住居址出土の土師器

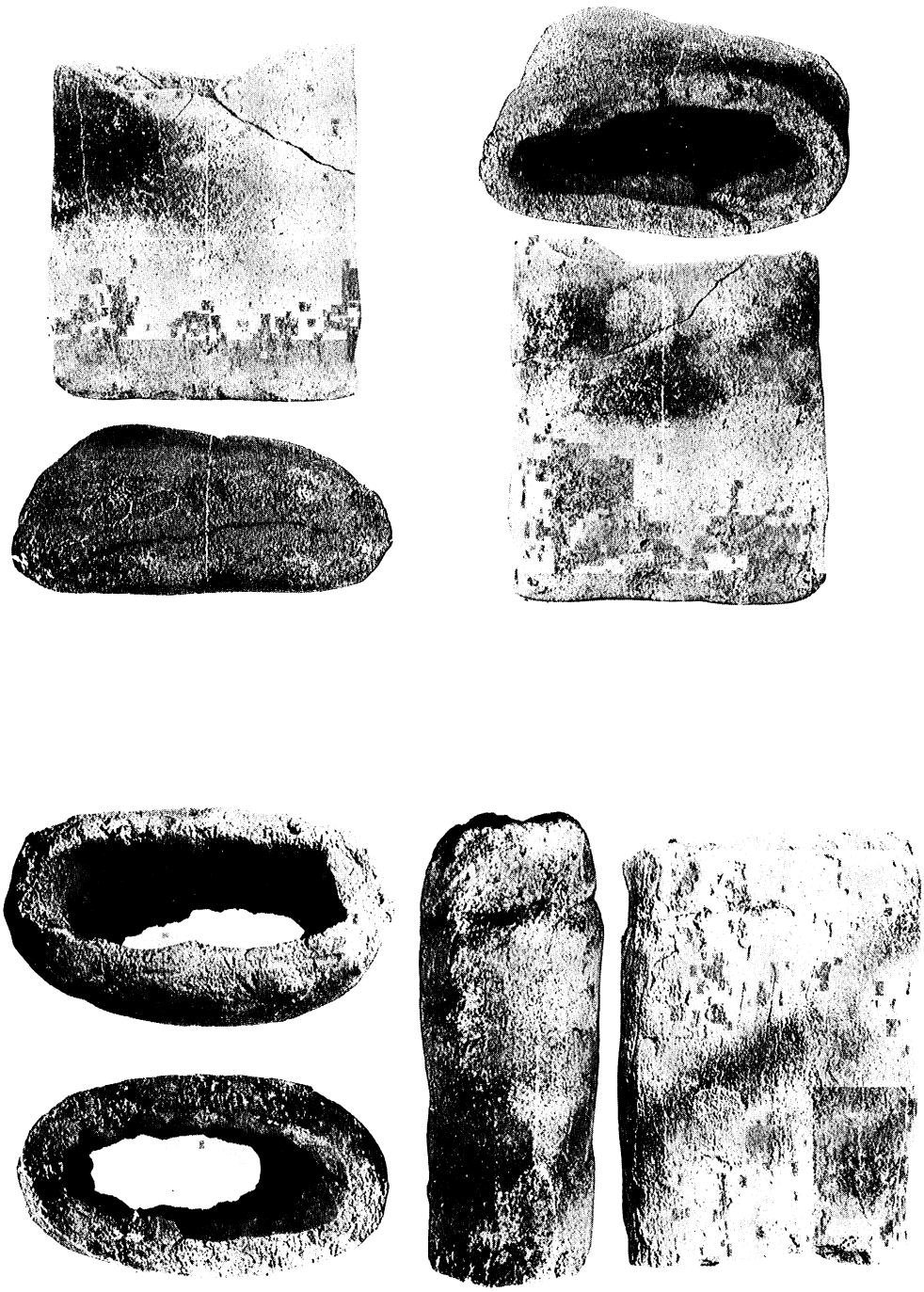


図版27　第７号住居址出土の土師器

図版28　第８号住居址出土の土師器

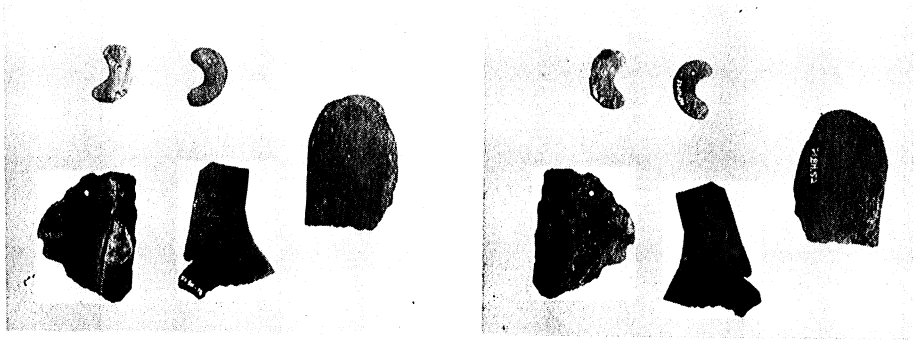


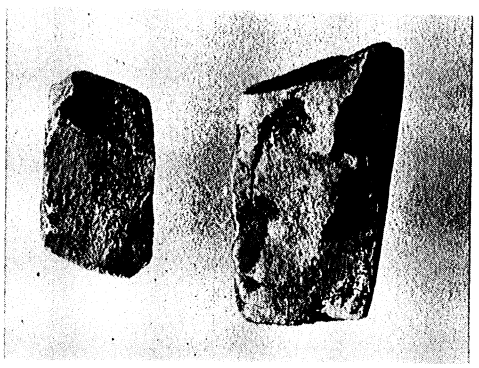
図版29　第８号住居址、第９号住居址出土の土師器

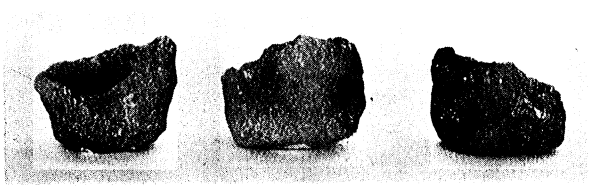


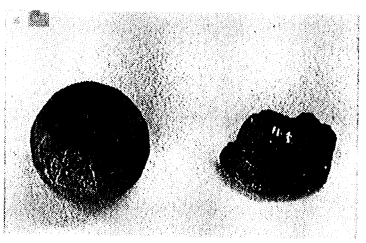
図版30　第５号住居址出土の土製品

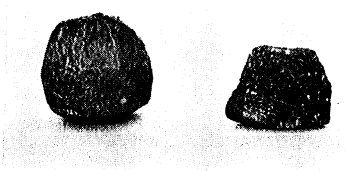
図版31　第５号住居址出土の土製品











図版32　前田遺跡出土の滑石製品及び土製品、砥石

前田Ｆ１
粕川村文化財報告第２集

発 行 日　昭和58年４月20日
編集発行　粕川村教育委員会
　　群馬県勢多郡粕川村西田面194
印 刷 者　㈲小林印刷所

土　器　観　察　表

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
図一No.	器種 器高 口径 底径				残存率　出土層位 色調　胎土 焼成 その他
7－1	壺 31.5 7.5	球形の胴部を呈し、胴中央やや上に最大径を持つ	頸部はヨコナデで、胴上部にヘラナデ、胴中部、下部は摩滅により不明。	摩滅、剥落により不明。	3/4、　床直、 淡褐色、　砂粒混入、 雲母を少量混入、普通
7－2	甑 32.5 25.0 (孔)8.8	口辺部は「く」の字に外反し、胴部はゆるやかなまるみを持ち砲弾形を呈す。	胴部縦方向のハケメの後、口縁部はヨコナデ、胴部はタテ方向のヘラミガキ。	下から上へのタテ方向のヘラミガキの後、口縁部はヨコナデ。	ほぼ完形、　上層 淡褐色、　砂粒若干混入 普通
8－3	壺 19.0	口縁は幅広くゆるやかに外反し、最大径は胴上部に有り、ゆるやかな丸味を持ち、底へと続く。	口縁部はヨコナデの後、上下方向の連状暗文。胴上部はナデの後、上下方向の連状暗文、胴中部から下部にかけてはヨコ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデの後、上下方向の連状暗文、胴部指ナデ。	底部欠損、　床直 淡褐色、　砂粒を若干混入 普通
8－4	甕 (16.8)	口縁部は「くの字」に強く外反し、胴部は球形を呈す。	口縁部はヨコナデ、胴中部から下部にかけてはヨコ方向、右→左へのヘラケズリ。	口縁部はヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	1/3、　上層 赤褐色、　砂粒を若干混入 普通
8－5	坏 4.8 15.0 4.6	直立した短い口縁部から直線的に底部に至る。底部はやや上げ底を呈す。	口縁部はヨコナデ、底部はヨコ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデの後底部を中心とした放射状のヘラミガキ。	完形、　貯蔵穴 赤褐色、　砂状を若干混入 普通
8－6	坏 5.8 14.3 4.0	やや内湾ぎみの口縁部からゆるやかに平底の底部に至る。	胴部から底部にかけて、ナナメ方向を中心とした不規則なヘラミガキ、底部はヘラミガキ。	ナナメ方向のヘラナデ？	2/3、　上層 淡褐色、　砂粒雲母を少量 混入、　普通
8－7	埦 6.0 3.4	胴部は内湾ぎみに立ち上がり、頸部のくびれをほとんど有さず、口縁部はゆるやかに外反。	胴部はヨコ方向を中心としたヘラケズリ、その後口縁部ヨコナデ、底部ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部を中心とした不規則なヘラミガキ。	1/2、　床直 赤褐色、　砂粒を若干混入 普通
8－8	埦 5.2 9.6 5.0	やや上げ底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部でやや内湾する。	口縁部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	口辺部ヨコナデ？胴部から底部にかけてヘラナデ。	2/3、　上層 淡褐色、　小礫、砂粒を少 量混入、　普通
9－9	高坏 14.6 18.0 (裾部)13.0	坏部は稜を有し、脚部は若干のふくらみを持つ。裾部は「八」の字状に大きく開く。	坏部は口縁にヨコナデの後、下から上方向へのヘラミガキ。脚部は裾部にヨコナデの後、上から下方向のヘラミガキ。	坏部は口縁にヨコナデの後、方射状のヘラミガキ、脚部は柱状部においてヨコ方向のヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	坏部5/6、裾部2/3、貯蔵穴内 赤褐色、　砂粒を若干混入 普通
9－10	高坏 13.4	坏部は2段の稜を有し、脚部は柱状部中央でややふくらみを持つ。裾部は有段を呈す。	坏部はヨコナデ	坏部はヨコナデ	3/4、　床直 淡褐色、細い砂粒を多量に 混入、　普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
9－11	高坏 19.3	坏部はゆるやかな稜を有し、口縁はゆるやかに内湾する。	坏部は口縁部ヨコナデの後、下から上方向へのヘラミガキ。	坏部、口縁部ヨコナデの後、放射状にヘラミガキ。	坏部1/8、上層 淡褐色、砂粒を少量混入 普通
9－12	高坏 20.3	坏下部に稜を有し、口縁はゆるやかに内湾する。	坏部はタテ方向のヘラナデの後、口縁部ヨコナデ。	坏部、口縁部ヨコナデの後、放射状にヘラミガキ。	坏部3/4、上層 赤褐色、砂粒を少量混入 普通
9－13	高坏 19.6	坏下部に稜を有し、口縁はゆるやかに内湾する。	磨滅（ヘラミガキらしき痕跡を残す所あり）	口縁部ヨコナデ。	坏部3/5、床直 砂粒を若干混入 普通
9－14	高坏 (裾部)16.8	柱状部はゆるやかに広がり、裾部は「ハ」の字状に大きく開く。	裾部ヨコナデの後、柱状部から裾部にかけてヘラミガキ。	柱状部(指おさえか？) 裾部(ヨコナデ)	脚部のみ1/3、上層 淡褐色、砂粒を若干混入 普通
9－15	高坏 (裾部)13.4	柱状部はふくらみを持ち、裾部は「ハ」字形に大きく開く。	裾部ヨコナデの後、脚部全体にわたり、タテ方向のヘラミガキ	柱状部横方向のヘラケズリの後、裾部はヨコナデ。	脚部のみ1/2、床直 淡褐色、砂粒を若干混入 普通
9－16	高坏 (裾部)15.3	脚部は柱状部で直線的に広がり、裾部は「ハ」字形に大きく開く。	裾部ヨコナデの後、柱状部から裾部にかけてタテ方向のヘラミガキの後、裾部にヨコ方向のヘラミガキ。	裾部ヨコナデ、柱状部しぼり。	脚部のみ1/2、床直 淡褐色、砂粒・雲母を若干混入、普通
9－17	高坏 14.6cm	脚部は柱状部で直線的に広がり、裾部は「ハ」字形に大きく開く。	裾部ヨコナデの後、柱状部から裾部にかけてヘラミガキ。	裾部ヨコナデ	3/5、上層 赤褐色、砂粒を若干混入 普通
10－18	坩 17.9 13.4 4.9	胴部は球形を呈し、最大幅は胴中央よりやや上方にある。頸部はよくしまり、口縁部は稜を有し上部は垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部はヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラケズリ（一部その後に指ナデ）、底部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ。	ほぼ完形、貯蔵穴内 赤褐色(部分的に黒斑) 砂粒を若干混入 普通
10－19	坩 13.0	頸部はよくしまり口縁は直線的に立ち上がり、上方でゆるやかに内湾する	口縁部は口唇部ヨコナデの後、上下方向の暗文を有す。	口縁部上方ヨコナデの後、上下方向の暗文を有す。	1/4、床直 淡褐色、砂粒を若干混入 普通
10－20	坩 9.8 10.1 3.2	最大径は口縁部端に有る。胴部は中央部で強く張り出し、頸部は良くしまる口辺部は直線的に立ち上がり、上方で若干内湾する。	口縁部はタテ方向のヘラナデの後、上方はヨコナデ。胴部上方はタテ方向のヘラナデでその後、底部にかけてヘラケズリとヘラナデ。	口辺部はヨコ方向のヘラナデの後、上方はヨコナデ。	3/4、床直 黒褐色、砂粒を若干混入 やや不良
10－21	坩 7.9 8.0 3.4	胴部は球形を呈し、口縁部上方の径の胴部径がほぼ等しい。口縁部は直線的に立ち上がり上方でゆるやかに内湾する。底部はやや上げ底である。	口縁部はヨコナデ、底部から胴部にかけてはヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、口縁部ヨコ方向のヘラナデ。	1/2強、床直 赤褐色、砂粒を若干混入 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
15－1	甕 33.5 17.5 6.0	口縁部は「くの字」状に外反し、胴部は丸味をおび、長胴で最大径は胴中央に有す。口唇部がやや厚い。	胴部はタテ方向のハケメ。その後、底部にはヨコ方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は縦方向のハケメの後、胴上部はヘラナデ、中部はヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	胴7/8、底1/5、床直 淡褐色、　砂粒を多量に混入、　普通
15－2	甕 22.0 16.0	口縁部は若干の稜を有しゆるやかに外反する、胴部の張りは弱く、最大径は中央部にある、長胴化のきざしがうかがえる。	口縁部下方から胴部上部にかけてタテ方向のあらいハケメ、その後胴上部から胴中部にかけて細い右下りのハケメ、最後に口縁部ヨコナデ。	胴上部にハケメの後、胴部全体にナナメ方向のヘラナデ？、口縁部はヨコナデ。	ほぼ完形、　床直 淡褐色、　砂粒を若干混入 普通
15－3	小形甑 12.4 20.5 6.9(孔2.6)	折返し口縁部を有し、やや小形の鉢形で単孔を呈す。底部に若干ふくらみを有するが、ほぼ直線的に立ち上がる。	胴部はヨコ方向のヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。	口縁部は指頭による圧痕の後、ヨコナデ底部から口縁部方向にナナメ方向のヘラケズリ。	ほぼ完形、　床直 淡褐色、　砂粒を多量に混入、　普通
15－4	小形甕 15.9 12.3 6.3	口頸部は「くの字」状に短く外反する。胴部は球形を呈し、最大径は中央部に有る。	口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部はヨコナデ	2/3、　床直 赤褐色（黒斑が多い）
15－5	甑 23.1 24.0 8.8	口縁部はゆるやかに外反し肉厚である。 胴部は丸味をもった砲弾形を呈す。	胴部はナナメ方向のヘラミガキ、口縁部はヨコナデ。	口縁部ヨコナデの後、ナナメ方向のヘラミガキ	ほぼ完形、　床直 淡褐色(部分的に黒斑) 砂粒を若干混入 普通
16－6	壺 16.0	胴部は球形を呈し、口縁は「くの字」形に外反し、ゆるやかな段を呈す。口唇部は方形状である。	頸部から口縁部にかけてはヨコナデ。	胴部はヨコ方向を中心としたハケメ。その後頸部から口縁部にかけてヨコナデ。	1/8 淡褐色、　砂粒を若干混入 普通
16－7	甕 (20.1)	胴部から口縁部は「く」字形に強く外反する。	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	1/8、　上層 赤褐色、　砂粒を若干混入 普通
16－8	甕 20.0	胴部は張りはやや少なく胴中央部に最大径を有す。口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデ、その後胴上部へラナデ、胴中部から下部にかけてナナメめ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴下半部ヨコ方向へラケズリ。	1/2、　床直 淡褐色、　砂粒を若干混入 普通
16－9	小形甕 13.0 10.6 4.4	口縁部は短かく、やや外反する。頸部内面にはするどい稜を成す。胴部は上半に最大径を有する。底部は小さな平底を有する。	口縁部はヨコナデ、胴上半部は器形の剝落が著しい、胴下半部は胴上半から下方向へのヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴下半は磨滅が著しい。	3/5、　床直 淡褐色、　砂粒を含む 普通
16－10	埦 7.7 14.5 4.9	口縁部は短かく、外反する。所謂「内斜口縁」を有する。口縁内側には稜を有する。底部は小さくやや上げ底状を呈する。	口縁部はヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	完形、　床直 淡黄褐色、　砂粒を若干混入、　普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整		備考
			外面	内面	
16－11	埦 7.4 10.6	所謂「内斜口縁」を有する。口唇部はするどくとがる。口縁部外面には屈曲を有せず、内面に稜をもつ、座部は丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、頸部タテ方向のハケメ底部はヨコ方向のヘラケズリの後ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ、 底部は剝落が著しい	完形、　床直 赤褐色、　小礫を含む 普通
16－12	埦 6.4 10.1	所謂「内斜口縁」を有する。口縁部は直に立ち上がるが内面にのみ稜を有する。底部は丸底を有する。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラナデの後、放射状の暗文が見られる。胴部は剝落が著しい。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通
16－13	埦 7.2 11.2	口縁部は短かく、外反する、胴部は球形を呈し、底部は丸底となる。	口縁部ヨコナデ、胴部から底部はヨコ方向のヘラケズリ。	底部から口縁部方向への不規則なヘラミガキによる暗文がみとめられる。口縁部内面の器壁の剝落が著しい。	完形、　床直 淡褐色、　砂粒、輝石を含む 普通
16－14	埦 6.5 11.3	口縁部は短かく、わずかに外反する、胴部は球形を呈し、座部は丸底となる。	口縁部ヨコナデ、胴部から底部にかけてヨコ方向のヘラケズリの後ヘラミガキ。	底部から口縁部方向への放射状のヘラミガキによる暗文、口唇部及び口縁部内面の器壁の剝落が著しい。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を若干含む 普通
17－15	坏 6.0 13.7	やや内湾ぎみに外反しながら立ち上がる口縁部を有する。口縁部と胴部の境いに稜を有し、その上をヘラ状の工具によるナデにより沈線化をしている。底部は丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、胴部から底部にかけてヨコ方向のヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部から胴部にかけて不規則なヘラミガキによる暗文。	3/4、　床直 赤褐色、　小礫を含む 普通
17－16	坏 5.6 13.4	口縁部と胴部の境に稜を有する。口縁部は長く、直に立ち上がる。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部から胴部にかけてヨコナデ。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通
17－17	坏 5.6 13.4	口縁部と胴部の境に稜を有する。口縁部は長く、直に立ち上がる。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部から胴部にかけてヨコナデ。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通
17－18	坏 5.2 13.5	口縁部と胴部の境に稜を有する。口縁部は直に立ち上がり口唇部でわずかに外反する。 底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、胴部右→左へのヨコ方向、ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコナデの後、底部から口縁部方向のヘラミガキによる則規的な放射状暗文	完形、　床道 赤褐色、　砂粒と小礫を含む 普通
17－19	坏 5.7 12.7	胴部と口縁部との境に稜を有する。その稜の上をヘラナデによって沈線を施してさらに稜を明瞭なものとしている。底部は丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後、底部から口縁部方向へのヘラミガキによる放射状暗文。口唇部の剝落が顕著。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整		備考
			外面	内面	
17－20	坏 5.0 12.8	胴部と口縁部との境にゆるやかな稜を有する。底部は比較的偏平。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後底部から口縁部方向へのヘラミガキによる放射状暗文。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通
17－21	坏 5.6 12.2	胴部と口縁部との境にゆるやかな稜を有する。 口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後ヘラミガキによる暗文、口唇部器壁の荒れがみとめられる。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通
17－22	坏 5.2 13.5	胴部と口縁部との境に稜を有する、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後ヘラミガキ。	2/3、　貯蔵穴内 赤褐色、　砂粒を含む 普通
17－23	坏 4.8 14.2	所謂「内斜口縁」を有する。口唇部はわずかに立ち上がる底部は丸底を呈し、浅く皿状を成す。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラミガキが顕著。 口縁部の器壁の剝落が目立つ。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を含む 普通
17－24	埦 5.4 11.6	底部から胴部は半球状を呈し、口唇部は内湾する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラによるナデ	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を多く含む 普通
17－25	埦 5.3 12.2	底部から胴部は半球状を呈し、口唇部は内湾する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、底部はヘラによるナデ。	完形、　床直 赤褐色、　砂粒を多く含む 普通
18－26	筒形土製品	平面形は長方形、断面形は上下につぶれた楕円形を呈する。	タテ方向のヘラケズリ。	接合帯を残し、その上に指頭圧痕を明瞭に残す。	FA上 赤褐色、　小礫を含む
18－27	紡錘車	断面形は胴部とフクラミを有する台形状を呈する。	ヘラケズリ		完形、　上層 淡褐色、　長石粒を含む 普通
21－1	高坏 (裾部)14.9	柱状部にふくらみをもち裾部は急に大きくひらく	柱状部はタテ方向のヘラミガキ、裾部はヨコナデの後、タテ方向のハケメ	柱状部はユビによるナデ、裾部はヨコ方向のハケメの後ヨコナデ	脚部のみ2/3、床直 淡褐色、　小礫を含む 普通
21－2	埦 5.8 11.6 3.5	所謂「内斜口縁」を有する。底部は小さくやや上げ底状を呈する。	口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ 器壁の荒れが目立つ	2/3、　床直 淡褐色、　砂粒を含む 普通
21－3	坩 14.8	口縁部のみ残存。大きく外傾し口唇部近くに直に立ち上がり稜を形成する	口唇部ヨコナデ、口縁部はタテ方向のヘラミガキ。	口唇部ヨコナデ、口縁部はタテ方向のヘラミガキ。	口縁部のみ2/3、床直 淡褐色、　砂粒を含む 普通
21－4	高坏 7.2 18.7 3.1	坏部のみ残存。坏部下部には稜を有する。口縁部は大きく外傾し、口唇部で直に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、胴部はタテ方向のヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	坏部のみ1/2、床直 赤褐色　小礫を含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
27－1	甕 29.3 18.5 7.3	折り返し口縁を有する。口縁部は大きく外傾し、口唇部端は尖く稜を成す。胴部は中央部に最大径を有し、やや張る。	口縁部ヨコナデ、胴部は左上→右下方向のヘラナデ、胴部下部はタテ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	1/2、淡褐色、FA上 砂粒を含む 普通
27－2	甕 26.1 15.6 7.8	単口縁を有する。口縁部は短く外反する。胴部は上半部に最大径を有し、胴下部は直線的にすぼまり、底部に至る。	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ、胴部は右下→左上方向のヘラケズリの後、タテ方向のヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	完形、黒褐色、床直 砂粒を含む 普通
27－3	高坏 15.0	坏部のみ残存。口縁部は直線的に開く。口唇部端に沈線を有する。	ヨコナデ	磨滅が著しい。	坏部のみ完形、上層 赤褐色、砂粒を含む
27－4	甕 23.8 12.1 6.5	単口縁を有する。口縁部はゆるやかに外反する。胴部はほぼずん胴である	口縁部ヨコナデ、肩部にハケメ、胴部はタテ方向のヘラケズリ。	口縁部はハケメの後ヨコナデ、胴部はハケメ。	完形、赤褐色、床道 小礫を含む 普通
27－5	小形甕 18.8 12.2 4.7	単口縁を有する。口縁部はゆるやかに外反する。胴部は最大径を下部にもつ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ユビナデ。	口縁部はヨコナデ。	2/3、淡褐色、FA上 砂粒を含む 普通
28－6	甕 18.8	単口縁を有する。口縁部は外反し、口唇部でさらに外反度を強める。胴部は直線的に長く長胴化している。	口縁部ヨコナデ、胴部タテ方向のヘラケズリ。	口縁部はヨコナデ。胴部はタテ方向のヘラナデ。	1/5、淡褐色 FA上 砂粒を含む 普通
28－7	坏 11.4 4.3	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラによるミガキ。	1/2、淡褐色、FA上 砂粒を含む 普通
28－8	坏 7.9 16.7	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。胴部は深い。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。	1/2、赤褐色、FA上 砂粒を含む 普通
28－9	坏 6.2 13.8	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。胴部は深く丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデ。	口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。 口縁部に器壁の剥落が著しい。	完形、淡赤褐色、床直 砂粒を含む 普通
28－10	坏 5.1 13.8	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや外傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ。	1/2、淡褐色、FA上 砂粒を含む 普通
28－11	坏 5.3 12.3	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部は巾が広く直に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。	2/3、赤褐色、床直 砂粒を含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
28－12	坏 5.6 13.5	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部中広く直立する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラによるヨコ方向のナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。	2/3、床直 赤褐色、小礫を含む 普通
28－13	坏 4.5 12.2	口縁部は内湾しながらゆるやかに立ち上がり浅い皿状をなす。	ヨコ方向のヘラケズリの後ヨコ方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリ。	ナデの後ヘラミガキによる放射状暗文	2/5、一括 赤褐色、小礫を含む 普通
28－14	坏 4.5 13.1	胴部と口縁部との境に明瞭な稜を有する、口縁部はやや外傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ。	3/4、FA上 赤褐色、砂粒を含む 普通
28－15	坏 3.9 12.5	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は直立する。体の器高は低い。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後ヘラミガキによる不規則な暗文。	2/3、FA上 褐色 普通 内面黒色
28－16	坏 4.2 11.5	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後不規則なヘラミガキによる暗文。	2/3、FA上 暗褐色、砂粒を含む 普通 内面黒色
28－17	坏 4.6 13.3	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する、口唇部には平坦部を作り出す。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後ヘラミガキ。	完形、FA上 黒褐色、砂粒を含む 普通
28－18	坏 5.0 12.2	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラによるナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	1/2 FA上 淡褐色、砂粒を含む 普通
28－19	坏 4.6 11.6	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	完形 FA上 赤褐色、砂粒を含む 普通 内面黒色
28－20	坏 5.5 12.6	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデの後ヘラミガキ。	2/3、FA上 淡褐色、砂粒を含む 普通
28－21	坏 5.1 12.8	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデの後ヘラミガキ。	3/5、FA上 淡褐色、砂粒を含む 普通
28－22	甕 7.6	胴下半部と底部のみ残存底部は平底に木葉痕をのこす。	タテ方向のハケメ、底部周辺へはヘラナデ。	ヨコ方向のハケメ	胴部のみ1/3 上層 淡褐色、砂粒を含む 普通
29－23	甑 28.0 21.6 17.8	胴部はゆるやかな「砲弾状」を呈する。口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ、胴部は右下→左上方向のヘラケズリの後ヘラナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部はヨコナデのち、胴部下からのヘラミガキ、胴部はヘラミガキ。	完形、床直 淡褐色、砂粒を少量含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
29－24	坩 9.8	直立する口縁部をもつ。口唇部の器壁はそぎ落としたように徐々に薄くなる。	ヨコナデの後、ヘラミガキによる不規則な暗文。	ヨコナデ。	口縁部のみ　ＦＡ上 褐色 普通
29－25	鉢 8.1 9.8 28	小さな底部からゆるやかに内湾する胴部を有し、口縁部は内面に稜を有し外反する。	口縁部ヘラナデ、胴部から底部にかけてヘラナデ。	口縁部ヘラナデ、胴部から底部にかけてヘラナデの後ヘラミガキ。	⅓　床直 赤褐色 普通
29－26	甕 17.1	胴部はかなり肩の張る器形である、口縁部は頸部から「くの字」に外反し段を有する。口縁部内面にも段を有する。	口縁部ヨコナデ、肩部ナデ。	口縁部ヨコナデ、肩部ヘラナデ。 器壁の剝落が顕著。	胴下半欠損　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
29－27	甕 32.6 17.0 5.0	胴部は中央部に最大径を有し、長胴化をしている底部は小さく、口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部ヨコナデ、胴部はタテ方向のヘラケズリ。 器壁の剝落が顕著。	口縁部ヨコナデ、胴部はナデ。 器壁の剝落が顕著。	⅔　ＦＡ上 淡褐色　砂粒を含む 普通 ２次焼成がみとめられる
33－1	坏 4.7 10.6	口縁部と胴部の境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部ヘラミガキ。	⅔　床直 黒褐色　砂粒を含む 普通
33－2	坏 13.2	口縁部と胴部の境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	¼　上層 淡褐色　砂粒を含む 普通
33－3	手捏ね土器 4.3 5.0 4.5	坏形のもので底部は厚く口縁部は手でつまみあげられてつくられている。	指頭圧痕	指頭圧痕	完形　床直 淡褐色　砂粉を含む 普通
33－4	手捏ね土器 4.2 3.9	坏形のもので、底部は厚い。	指頭圧痕	指頭圧痕	⅔　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
33－5	高坏 11.4	脚部のみである。脚柱部下部にふくらみをもつ、裾部は内湾ぎみに大きく開く。	脚柱部タテ方向のヘラミガキ、裾部はヨコナデの後ヘラミガキによる暗文。	ヨコナデ	脚部のみ¾　床直 赤褐色 普通
33－6	筒形土製品	平面形は長方形、断面形はつぶれた楕円形を呈する。一端はつぶされている。	タテ方向のヘラケズリ。	輪積痕と指頭の圧痕を明瞭に残す。	床直 淡褐色　砂粒を含む 普通 一端に黒斑がみとめられる
33－7	筒形土製品	平面形は長方形、断面形はつぶれた楕円形を呈する。	タテ方向のヘラケズリ、一端部に指頭圧痕。	輪積痕と指頭の圧痕を明瞭に残す。	床直 淡褐色　砂粒を含む 普通 一端に黒斑がみとめられる
34－8	筒形土製品	平面形は長方形、断面形はつぶれた楕円形を呈する。両端は上下からつぶされている。	タテ方向のヘラケズリ、端部に指頭圧痕	輪積痕と指圧痕と明瞭に残る。	ほぼ完形　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通 一面全体には黒斑
38－1	坏 4.8 11.4	胴部と口縁部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、胴部は荒いヘラケズリ	口縁部から胴部ヨコナデ。	⅔　床直 黒褐色　石英粒を含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
41－1	甕 17.5	口縁部は「くの字」に外反する。	口縁部は荒いハケメの後ヨコナデ、胴部は荒いハケメの後ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴ヘラナデ。	胴上半部のみ　貯蔵穴内 淡褐色　砂粒を含む 普通 口縁部に塗彩か
41－2	小形甕 7.4	口縁部は欠損しているが胴部からゆるやかに外反するものと思われる。底部はやや丸底風にしあげられている。	口縁部タテ方向のハケメの後ヨコナデ。胴部はタテ方向のハケメの後ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ。	1/3　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
41－3	鉢 9.5 11.9 6.4	底部からゆるやかに内湾しながら胴部は立ち上がり口縁部に至る。	ヘラケズリの後ヘラナデ。	ヘラナデ。	4/5　床直 淡褐色　かくせん石を多く含む　普通
41－4	小形甕 12.7 12.6 7.2	口縁部は「くの字」に外反する。胴部は比較的大きな底部から球形に張る。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	完形　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
41－5	鉢 9.5 10.2 3.95	底部からゆるやかに内湾しながら胴部は立ち上がり口縁部に至る。口唇端部をほとんど欠損している。	細かいヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ 胴部はタテ方向のヘラミガキ。	完形　床直 赤褐色 普通
41－6	坩 4.7	頸部から口縁部にかけて欠損、胴部はかなり大きく張り、つぶれた球形をなす。	頸部にヨコナデ 胴部はタテ方向のハケメの後ヘラナデ。 表面の剥落が顕著。	ヘラナデ。	1/3　床道 赤褐色 普通
41－7	高坏	脚部のみである。脚柱部は下部にふくらみを有し裾部は大きくラッパ状に開く、裾部端はやや内湾する。	脚柱部はヨコナデの後タテ方向のヘラミガキ、裾部はヨコナデの後ヘラミガキ。	裾部はヨコナデ。	2/3　床道 赤褐色　砂粒を含む 普通
41－8	高坏 12.6	脚部のみである。脚柱部は直線的にひらく、裾部は大きく、ラッパ状に開く。	脚柱部タテ方向のヘラミガキ、裾部はヨコ方向のヘラミガキ	脚柱部タテ方向のヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	脚部のみ4/5　床直 赤褐色 普通
41－9	坏 4.4 13.1	胴部と口縁部の境に稜を有する。口縁部は稜より外傾する。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	完形　一括 淡赤褐色　砂粒を含む 普通
41－10	小形壺 9.8 9.1 5.0	口縁部は外反し、胴部は「そろばん玉」状を呈する。頸部に接合帯のおさえ痕有り。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	完形　一括 淡褐色　砂粒を含む 普通
42－11	埦 6.8 12.3	半球状の胴部からゆるやかに内湾しながら立ちあがり口縁部に至る。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 内面底部の器壁の荒れがめだつ。	3/4　貯蔵穴 暗褐色　砂粒及びFP粒を含む 普通
42－12	埦 6.4	半球状の胴部からゆるやかに内湾しながら立ちあがり口縁部に至る。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 底部周辺の器壁の剥落が目立つ。		1/2　床直 赤褐色　砂粒を含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	備考
42－13	坏 5.1 12.6	丸底の底部からゆるやかに外反した胴部は口縁部でわずかに稜をつくり内湾ぞいに立ちあがる。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリの後ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部へラナデ	完形　床直 淡褐色 普通
42－14	坏 3.9 8.5 2.8	底部は丸底に近い平底を有する。口縁部はゆるやかな稜を有しやや内湾する。	口縁部ヨコナデ 胴部はへラケズリの後ヨコナデ 底部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコナデの後タテ方向のヘラミガキ。	完形　貯蔵穴 淡褐色 普通
42－15	坏 5.2 12.7	口縁部と胴部の境に稜をする。口縁部は稜より直立する。口縁内面はややふくらみを有する。	口縁部ヨコナデ 胴部はへラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。一部に器壁の剝落が目立つ。	完形　一括 赤褐色 普通
42－16	杯 5.4 13.2	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する、口縁部は稜より直立する。 器壁は比較的うすく均一になっている。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ 稜周辺に器壁の剝落が顕著。	完形　床直 赤褐色　小礫を含む 普通
42－17	坏 6.6 14.15	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する、口縁部は稜より直立する。 口唇端部は沈線が施される。	口縁部ヨコナデ 器壁の荒れが目だつ	口縁部ヨコナデ 稜線周辺の器壁の荒れが顕著。	完形　床直 赤褐色　砂粒を含む 普通
42－18	坏 5.5 13.4	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する口縁部は稜より直立する。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部へラナデ 口縁部及び胴部の器壁の荒れが顕著。	完形　床直 赤褐色　砂粒を含む 普通
42－19	坏 12.7 6.2	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する、口縁部は稜よりやや外傾ぎみに立ち上がる、口唇端部には面とりがなされている。	口縁部ヨコナデ 器壁の荒れが顕著。	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ	完形　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
42－20	坏 (15.4)	口縁部と胴部との境にゆるやかな稜を有する、口縁部は端部でやや外反する。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ナデの後、タテ方向のヘラミガキによる不規則な放射状暗文。	¼　床直 赤褐色　小礫を含む 普通 一部に黒斑
42－21	坏 6.7 15.4	所謂「内斜口縁」を有する。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部へラナデ	¾　床直 赤褐色　小礫を含む 普通
42－22	坏	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する口縁部は稜よりやや外傾ぎみに立ち上がる、口縁部は幅広く、胴部も深い。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ 胴部はナデの後ヨコ方向のヘラミガキ	⅓　床直 灰褐色　角せん石を多く含む　普通
42－23	坏 6.4	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する口縁部は稜よりやや内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はナデ	½　床直 灰褐色　角せん石を多く含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整		備考
			外面	内面	
42－24	坏 5.50 13.0	口縁部と胴部との境に明瞭な稜を有する、口縁部は稜より直立する。口唇端部には沈線が施される	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリの後へラナデ。	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ	完形　貯蔵穴 赤褐色　砂粒を含む 普通
42－25	坏 2.75 8.4	口縁部と胴部との境に凸帯状り張り出す稜を有する。器高は低く非常に浅い。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリの後一部にへラミガキ	口縁部ヨコナデ 胴部ナデの後へラミガキ。	½　床直 淡褐色 普通 黒斑がみとめられる。
42－26	坏 4.5 11.2	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部へラミガキ	⅔　床直 黒褐色 普通
42－27	坏 5.2 11.4	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ 底部を除く全面にススの付着がみられる	口縁部ヨコナデ 胴部へラナデの後タテ方向のへラミガキ。	⅘　床直 淡褐色 普通
47－1	甕 22.4	口縁部は胴部よりわずかに屈曲を有し、直立ぎみに立ち上がり、口唇端部でわずかに外反する。胴部は下位に最大径を有しやや下膨れである。	口縁部ヨコナデ 胴部は上から下にかけてのへラケズリが顕著である。 胴部下端には器壁の荒れが顕著である。	口縁部ヨコナデ 胴部へラナデか。	⅗　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
47－2	甕 36.2 20.0 5.0	口縁部は胴部より「くの字」に大きく外反する。胴部は長胴化し膨みは少ない。	口縁部ヨコナデ 胴部上半は、下から上にかけてのタテ方向のへラケズリ下半は下から上にかけてのナナメ方向のへラケズリが顕著。	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコ方向のへラナデ。	完形　カマド内 淡褐色　砂粒を多く含む 普通
48－3	甑 24.7 22.25 8.3	口縁部は大きく外反する。胴部は中央部に最大径を有する。	口縁部ヨコナデ 胴部はへラケズリの後下から上にかけてのへラナデか。	口縁部ヨコナデ 胴部はへラナデの後ちタテ方向のへラミガキ。	完形　床直 赤褐色 外面⅓に黒斑
48－4	瑞	口縁部を欠失している。注口部は焼成前穿孔である。又注口のまわりには小さな割れがみとめられる。胴部は丸底を呈する。	頸部ヨコナデ 胴部はへラケズリの後ヨコ方向のへラミガキ。	胴部はヨコ方向のへラミガキ。	胴部のみ突形　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
48－5	手捏ね土器 3.9 4.8 4.7	坏形のもので底部は厚く口縁部はつまみあげによって作り出されている。	手捏ね痕	ユビナデ	⅔　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通
48－6	小形甕 17.7 16.6 6.0	口縁はゆるやかに外反する。胴部は下位に最大径を有しやや下膨れである	口縁部ヨコナデ 胴部はタテ方向のへラケズリ 底部もへラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はへラナデ	¾　床直 淡褐色　砂粒を多く含む もろい
48－7	鉢 11.6 11.7 5.6	平底の底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部はヨコナデによって表現されている。又口縁内面にはわずかに稜を有する	口縁部ヨコナデ 胴部　右下→左上方向のナナメ方向のへラケズリ。	口縁部ヨコナデ 胴部へラナデ、一部にミガキもみとめられる。 暗褐色を一面に呈する。	完形　床直 淡褐色　砂粒を含む 普通 外面に一部黒斑

挿図番号	器種	器形の特徴	調整		備考
			外面	内面	
48－8	坏 5.4 10.0	口縁部と胴部との境にわずかに稜を有する。胴部は比較的深い。	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラミガキ。	½ 床直 淡褐色 普通
48－9	坏 4.7 12.9	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ちあがる。口唇端部には沈線が施されている。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコナデの後ヘラミガキ。	完形 床直 黒褐色 普通 特に底部外面にススの付着
48－10	坏 4.1 12.1	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ちあがる。口唇端部には沈線が施されている。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ、一部にヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ 胴部はナデの後ヘラミガキ。	完形 床直 黒褐色 普通
48－11	坏 4.9 11.9	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ちあがる。口唇端部には沈線が施してある。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はナデの後ヘラミガキ。	完形 床直 黒褐色 砂粒を含む 普通
48－12	坏 5.1 12.8	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ちあがり口唇端部では外反する。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はナデの後ヘラミガキ。	完形 床直 黒褐色 普通
48－13	坏 4.3 11.8	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より内傾ぎみに立ちあがる。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデの後ヘラミガキ。	¾ 床直 赤褐色 普通
48－14	坏 4.9 14.4	口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出す稜を有する。口縁部は稜より外傾する。	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラナデの後ヘラミガキ。	完形 貯蔵穴 黒褐色 普通 内面は赤褐色を呈する。
48－15	坏 5.1 13.0	口縁部と胴部との境に稜を有する。口縁部は稜より外傾する。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラナデの後ヘラミガキ。 底部のみ黒色。	完形 床直 淡褐色 砂粒を含む 普通
48－16	坏 5.0 13.1	口縁部と胴部との境に稜を有する。口縁部は稜より大きく外反する。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部もヨコナデ。	完形 床直 淡褐色 砂粒を含む 普通
48－17	坏 4.9 13.3	口縁部と胴部との境に稜を有する。口縁部は稜より外反する。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部もヨコナデ	½ 床直 淡褐色 普通
50－1	小形甕 19.5 12.9 5.8	口縁部は頸部より「くの字」に外反する。又口唇端部は肥厚する。胴部は上半部に最大径を有する器厚は不均一であり全体にゴツゴツしている。	口縁部端ヨコナデ 頸部はタテのヘラナデ 胴部は上から下へのヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	¾ 床直 赤褐色 砂粒を含む 普通

挿図番号	器形	器形の特徴	調整		備考
			外面	内面	
50－2	脚付埦 (10.4) 17.8	脚部を欠失している。口縁部は外反する、胴部は中央に最大径を有する。	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコ方向のヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラミガキ。	½ 淡褐色 床直 普通
50－3	高坏 (6.8) 19.2	脚部を欠失、坏部の下端とは稜を有する。口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラナデの後ヘラミガキ	⅔ 赤褐色 床直 砂粒を含む 普通